

不許転載

# 愛を育む子育て

# 愛を育む子育て

## 目次

はじめに 4

子どもをめぐるふたつの意見 6

しめるかゆるめるか／スパルタ派とナチュラル派／文部省の考え方／  
望ましい子育ては？／統制と自由、そして愛／

人間にはふたつの心がある 12

「自」の心と「他」の心／性善説と性悪説／赤ちゃんは他者に尽くす／  
自他が一体化した赤ちゃんの心／「自」の成長／心は矛盾している／

「愛」は見返りを求めない 17

心の成長の道すじ／子どもに無関心なお母さん／親自身の心／  
変わってきた価値／「他」の心を育てる／体罰はしつけか／  
「愛のムチ」はない！／人のせいにする民主主義／民主主義は平等対等／  
愛情は一方通行／人を思い通りにする思想／民主主義の悪／  
「自分が」幸せになりたい／自己愛を捨てる／客観的な価値／我慢、辛抱／  
ダブルバインド（二重拘束）／自分の殻／愛はギブ・アンド・ギブ／  
人間と動物の違い／

統制が必要な時期 35

お腹の赤ちゃんに自由はない／気持ちが大の方を向く／  
小学生に求められていること／小学生は大人を求めている／農業の体験／  
「愛」は「信」を生む／

自由が必要な時期 44

赤ちゃん中心の生活に／おのれを捨てる／手をかけず、目をかける／  
気持ちを満たしてやる大切さ／心の成長の締めくくり／人を信じられない／  
夢や希望がない／理解と手本／「自分らしさ」の追求／  
働かない若者、勉強しない子ども／成長の道すじを見通して／

子どもの心に育てたいこと 56

「トップランナー」を目指すのか／世界を変えるITと遺伝子／  
「みんな同じはダメ」／「できる」人間が「善い」人間なのか／  
知識も能力もいない／心の汚れ／人類の危機／仲良く生きる／  
社会崩壊の危機／情けない日本の子ども／「悪知恵」を捨て、心を磨く／  
幸せとは何か？／民主主義は自己主張／子どもに執着する／気分で怒る親／  
愛ではなく取引／取引と孤独、不安／現実社会は「自」ばかり／  
思い通りにできないこと／願うことの大切さ／「和」を取り戻す／  
日本が世界の手本となる／

いま、大人にできることは何か 80

根気がなく、閉じこもる子どもたち／なぜ根気強さが必要なのか／  
根気はどうしたら育つか／自己主張と不安／子どものストレス／  
愛情不足が殻を作る／

夫婦として、父として、母として 91

夫唱婦隨の復活／父親不在の真実／生きる意味を問う／  
生みだし、包み込むのが母／民主主義と女性／自己主張する女性／  
何を求めるべきなのか／母性の回復／弱肉強食の世の中／民和主義／母の使命／  
子どもの可塑（かそ）性／安定した夫婦関係を築く／

おわりに 112

はじめに

2001年6月、各新聞で、児童虐待に関する最新の調査結果が報道されました（厚生労働省によるもの）。それを見ると、まことに驚くようなことがわかります。

新聞を読まれて、ご記憶の方も多いと思いますが、虐待に関する統計的な調査は1990年から始まっています。児童相談所が受け付けた虐待に関する相談は、十年間で十七倍に増えたことが明らかになりました。尋常ではない急増ぶりです。このような事態は、おそらく世界に例を見ないでしょう。しかもこれは、おおやけになった件に限られています。外部に明らかにされなかったものまで含めると、一体どれほどの数にのぼるのか、見当もつきません。

虐待をする人は、およそ六割が母親、二割強が父親であるとされています。虐待のニュースに接した多くのお母さん方は「なんてひどい。かわいそうに・・・」と感ずることでしょう。しかし、それと同じくらい、あるいはそれより大勢の方が「つい虐待してしまう気持ちもわかる」「私もいつしてしまうかわからない」と、思っているようです。新聞への投稿や雑誌の特集記事などを見ると、そのことがよくわかります。これは、おそらく多くのお父さんにも共通する気持ちでしょう。

正直と言えば正直な心情です。そういう思いを包み隠さず明らかにして、その上で対策を講じていくことは必要でしょう。しかし、その一方で、虐待の心理に共感する人がそれほどまで多いことに、はっきりと申し上げて恐ろしさを感じずにはられません。その思いは、一つ間違えると「虐待はあって当たり前」「誰もがするもの」「だから私がするのも仕方がない」という、一種の「免罪符」になってしまう危険性をもつように感じるのです。

虐待は、決してあってはなりません。家庭から、一切の暴力は追放されなければなりません。それは、大きく広がって、世界のあらゆる人々のあいだから、暴力がなくなることに繋がっていくでしょう。

これは、限りなく難しいことです。しかし、「難しい」とことと「実現しなくていい」とことは別です。あらゆる人が、手をたずさえ、声を掛け合い、力を合わせて、この一見不可能な目標の実現に向かって歩いていくことを望む気持ちでいっぱいです。

これは、究極的には、「愛」の力によって成し遂げられることだと思います。いまの日本で「愛」と言うと、たいていの場合男女の恋愛が連想され、そのために気恥ずかしいこ

とばというイメージが強いようです。

もちろん男女の恋愛感情もそれはそれで結構なものでしょう。そこで、それも含め、親子愛、家族愛、人間愛など、大きな愛を考えると、愛とは、自分よりも相手、他者を優先し、生かしてあげたいと願う気持ちであることのように思います。

くわしくは本文に譲りますが、このような他者愛、愛他心は、人間が成長の過程で新たに身につけるものではなく、あらゆる人間が生まれながらに備えている、「こころの根っこ」とでも呼べるものです。他者への愛が、動物と人間を分かつ最大の違い、人間の人間たるゆえんである、ということもできます。

私たちは、自閉症や学習障害といった子どもの発達障害、それから、そういう障害があるお子さんをもった家族（特にお母さん）の抱えるストレス、さらに精神分裂病やうつ病などの心の病、このような多くのことを心理学的に研究し続けています。そしてそれらに基づき、愛とは何なのか、幸福や生きる意味とは何なのかといったように、大きな視野から「人間」そのものを考える取り組みを続けてきています。

こうした研究活動の成果の一つとして、今回、子育てを「愛」というキーワードにおいて考え、本書をまとめました。心理学的の専門用語などはほとんど使っておりません。多くの方に、気軽に手に取っていただきたいという思いを込めて書きましたが、その願い通りになっているでしょうか。

この本を読んで、私たちの考えに興味や関心、共感などをもっていただけたら幸いです。

## 子どもをめぐるふたつの意見

### しめるかゆるめるか

子どもをめぐる現代の状況がいかに複雑で危機的か、これは、あらためて言うまでもないことでしょう。新聞、テレビ、ラジオ、週刊誌、そして近ごろはインターネットという便利（しかし同時に危険）なメディアがあり、それらがこの手の問題を四六時中流し続けています。みなさんは毎日、情報をそれこそシャワーのように浴びていることと思います。

これらの情報は、単なる事実の報道だけではありません。そこには、心理学者、法律学者、元教師、作家、政治家、子育てに一家言を持つタレントなどなど、実に多彩な人たちが登場して、いろいろにコメントをします。単なる事実、に味付けがされるわけです。味が濃く、脂っこかったり、激辛だったりすれば、ワイドショー向きになりますし、非常に淡泊で、味が付いているんだかないんだかわからないほどならば、7時のニュースにちょうどいいでしょう。

細かく分析して、分類したわけではありませんが、それらのコメントは、だいたい次の2種類に分けられると思います。もっとも、ごく当たり前の分類であって、みなさんもこんなことにはとっくにお気づきだと思うのですが。

ひとつめ。今の子どもたちがこれほどまでメチャクチャになってしまったのは、親も教師も近所のおじちゃんおばちゃんも、みんな引っこくめて大人がだらしくなってしまったのが原因だ、とするものです。

子どもが悪さをして、毅然とした態度で叱れなくなった。それに、子どもが何かしようとする「危ない」「怪我したらどうする」、そんなことばかり言って、挑戦させるといことがない。また、どの家庭もそこそこ豊かになって、子どもが欲しがるものは何でも与えられるようになった。そんなこんなで、子どもと大人が同等、場合によっては子どもが大人を見下すようになっている。

こんな状態を立て直すには、大人がカブトの緒でもフンドシでも何でもいいからとにかくビシッと締め直し、子どもにガツンと一発「カマして」やる必要がある、こういう結論になります。一度失った主導権を再び大人の手に取り戻して、子どもにはつべこべ言わずな、というわけです。「鉄は熱いうちに打て」、「三つ子の魂百まで」、こんなことわざが合い言葉になります。

さて、ふたつめですが、これはひとつめのものとは正反対です。子どもたちが今のよう

になってしまったのは、われわれ大人が管理しすぎてしまったのが原因だ。子どもたちはみな疲れている。ゆとりがない。ストレスがたまっている。もう子どもを縛るのはやめようじゃないか。大人の価値観を子どもに押しつけるのもいけない。子どもにも人権があるのだ。したいことをし、したくないことはしない権利がある。

子どもと大人という垣根を取り払って、お互いがまったく同等、対等な立場に立っていれば、子どもは自然に育っていく、育ててやろうなんておこがましい考えは捨てよう、という主張です。権威ある存在としての大人は、ここでは否定されます。望まれるのは子どもと共に迷い、途方に暮れる大人です。17世紀フランスの思想家、ルソーの言った「自然に帰れ」、こんなことばがよく出てきます。

### スパルタ派とナチュラル派

いま仮に、ひとつめの意見をスパルタ派、ふたつめの意見を、よいことばがないのですが、ルソーの「自然に帰れ」にちなんでナチュラル派と名付けます。スパルタ派の人々は、ナチュラル派を「甘い!」「軟弱だ」「そんなことを言っているから子どもがつけあがるんだぞ」と激しくなじります。

もちろんナチュラル派も黙ってはいません。スパルタ派の人々の意見を「軍国主義だ」「ファシズムだ」と言って攻撃します。親や教師の命令を、何でもハイハイと言って聞くような子どもは人間じゃない、ロボットだ、と言います。昭和の初めには、日本中のみなが、軍部の言いなりになるロボットになってしまった、あの時代以来、これからさき未来永劫にいたるまで、再びロボットを育ててはならないのだ、というわけです。そして、いま、子どもたちが荒れているのは、ロボット化を拒否する子どもたちが、反乱を起こしているのだと説明します。そういう反乱なら、家庭内暴力も学級崩壊も援助交際も大歓迎、腐った社会をつぶすために、子どもたちよ、もっと反乱を起こせとあおる学者もいます。

意見を言う人々を大ざっぱに色分けしますと、政治家は多くがスパルタ派です。わかりやすい例を挙げれば、石原慎太郎・東京都知事には『スパルタ教育のすすめ』という、たいへんよく売れた著書があります。民放ワイドショーのコメンテーター諸氏も、だいたいこちらに属しているのではないのでしょうか。そうしたタレントや文化人は、子育てに忙しい主婦層に絶大な影響力をもっています。

さて、それではナチュラル派に属する人々はどうでしょうか。代表は学校の先生です。戦後の学校教育の出発点は、先ほども少し紹介しましたが、太平洋戦争のたいへん苦い教

訓です。一部の人の扇動に、やすやすとのってしまう人間を、二度と作ってはならない、教育こそがその責務を負うべきだという信念のもと、「自分で考え、自分で判断し、自分で決められる」子どもを育てることが基本方針になりました。これは戦後50年以上たつたいまでも、まったく変わっていません。

子どもの意志を最優先しますから、教師は先頭に立って子どもを引っ張ったりしてはいけません。「いけません」は言い過ぎかも知れませんが、それに近いのが学校では常識です。学校では最近「指導」に変わって「支援」ということばがよく使われます。あくまでも「子どもがしたいこと」を、教師は側面から、後方から支援するわけです。「後方支援」などと言うと、かつての湾岸戦争の時みたいに、こちらの方がよっぽど戦争に近いようにも思えますが、いずれにせよ、権威をもって子どもを教え導くような先生は、戦前戦中の遺物として博物館入りを進められ、いまは子どもと肩を並べて対等につき合える先生が求められているわけです。

#### 文部省の考え方

さて、話が学校になったところで、学校の元締めである文部省は、いったいどういう立場をとっているのか、このことを考えてみます。文部省の親分は文部大臣という政治家であり、先ほどの色分けにしたがうなら彼はスパルタ派、しかし文部省配下の教師、その多くがナチュラル派であるならば、事態がたいへんややこしくなるのが普通でしょう。最近はなりをひそめましたが、かつて激しかった文部省対日教組の闘争は、ひとつの現れです。

さて、文部省がその時々教育方針を発表すると、それがけっこう時代の感覚にマッチしていて、わりに親しみやすい流行語というか、キーワードになっています。数年前からは「心の教育」ということが言われていて、みなさんもしばしば目や耳にしているのではないのでしょうか。さすが秀才ぞろいのお役人だけあって、なかなかうまいことを言っています。

この「心の教育」を専門に審議した、文部大臣の諮問機関がありました。分厚い報告書が出されていて、ご覧になりたい場合はどこの図書館にもあると思います。もちろんおもしろいはずがありません。普通の人にとっては実にツマラナイものです。

その中に「悪いことは悪いと、きちんとしつけよう」という一文があります。やっぱり文部省も、近ごろ多くの大人が何だかフヌケみたいになってしまい、子どもが悪さをしようが口答えをしようが、ヘラヘラしててまこと頼りないと考えたようです。ここはひと



つ、大人がかつての権威を取り戻し、有無を言わず子どもの首根っこを押さえ込む、そういう場面も必要だと説くわけです。

では、報告書全体の論調がそうなっているかという点、そうでもありません。教育とは、基本的に、子どもが自分で考え、自分で判断することが大事だとする点で、戦後ずっと言われてきたことをそのまま繰り返しています。つまり、先ほどの色分けを再び使うならば、スパルタ派とナチュラル派の、両方の言い分をただ並べただけという形になっているのです。

スパルタとナチュラル、両派の主張は、そもそも相容れるものではありません。そんなことは誰でも、聞いただけでわかります。戦後の学校が口を酸っぱくして言ってきた「自分で考え、自分で判断」というのは、極端に言えば「人のことばに耳を貸すな。いいか悪いか、正しいか間違っているかは自分で考え、自分で決める」ということなのです。こういう方針で育てられた子どもたちが、どうして大人の言うことを聞くようになるのでしょうか。人の言うことなどアテにするなど教えながら、もう一方では大人の言いつけにしたがえと要求することが、はじめから矛盾しているのは小学生でもわかります。さっき、秀才ぞろいのお役人と言いました。秀才には違いないでしょうが、本当の意味で「頭がいい」のかどうか、疑いたくなってきました。

戦後教育は、このような大矛盾を抱えながら、50年以上も続いてきました。そしてこれは、学校や教育だけの問題ではなく、社会全体が抱えた矛盾でもあったのです。

望ましい子育ては？

さて、いままでの話を整理すると、ごく単純に言って、子育てや教育に4つの選択肢があったように思います。

スパルタ派の言うとおりにする

ナチュラル派の言うとおりにする

両派の言い分を足して二で割る

両派の言い分とも良しとせず、新しい方向を見いだす

と、この選択がどうかということは、これから先の話の中でいろいろな角度から考えてみたいと思います。結論だけを言っておきますと、私たちはどちらにも限界があると考え

ています。

先に を取り上げますが、これはもう言いましたように文部省は学校教育をこの方向で進める方針です。しかし、もともと正反対のものを無理やりくっつけてひとつの方針にしようというのが根本的に間違っています。文部省や学校は、これがいかにも可能なことのように言い、新聞やテレビなどのマスコミも同調していますが、とんでもない話です。スパルタ派は、親や教師、大人たちの言うことには服従せよと主張しています。ナチュラル派は、善悪は自分で考え、自分で判断せよと子どもたちに教えます。それはつまり、納得できなければ相手が誰だろうと従うなと教えていることです。どうやったらこのふたつの主張が一体になるというのでしょうか。しつこく繰り返すようですが、そんなことはできません。ですから の選択肢はボツ、いま文部省や学校が言っていることは単なる絵空事です。

さて、察しの良い方々はとっくにお気づきだと思いますが、こそ私たちが主張したいことです。そのことをこれから詳しくお話ししていきたいと思いますが、その中で、ときにはスパルタ派のようなことを言ったり、ナチュラル派のようなことを言ったりするように受け取られるかも知れません。その受け取られ方はまったくの間違いではありませんが、あらかじめ少し説明を加えておきます。

#### 統制と自由、そして愛

スパルタ的なのは、「子どもには統制を加えろ」と言うときです。「統制」ということばが固すぎれば、「権威ある導き」と言い換えられるでしょうか(もっと固くなったか)。逆にナチュラル的なのは、「子どもには自由が必要だ」と言うときです。私たちは、子育てには、この統制と自由の両面が欠かせないと言いたいのです。これだけだったら、ほかの誰かがとっくに同じようなことを言っていると思います。しかし私たちは、この両面をただくっつけばいいとは考えていません。子どもには、成長の過程で、主に統制を必要とする時期と、それよりも自由を必要とする時期とがあります。そして、このふたつの時期は、成長につれて交代で訪れてきます。大人はその時々に応じ、子どもの姿をよく見極めて、統制と自由を適切に与える必要があります。どちらか1本でいこうとすると、子どもの成長に無理やゆがみが出てきます。スパルタだけでも、ナチュラルだけでも不十分なのです。

そして、もっと大事なものは、この統制と自由の基礎にあるのが、この本の一番重要なテ

ーマである「愛」です。愛のない統制は、単なる束縛です。大人の都合で子どもを縛りつけるだけです。そして、愛のない自由は、単なる放任です。面倒くさくて、子どもをほったらかしにしているだけです。そして悲しいことに、いま、日本の子育ては、この「愛のない統制」か、「愛のない自由」かの、どちらかに傾いているのではないのでしょうか。

「そんなことはない！ 私は十分子どもを愛している。誰がなんと言おうとこれだけは断言できる」、こうおっしゃるお父さん、お母さんは多いことでしょう。それは素晴らしいことです。しかし、よけいなお節介とは思いますが、その「愛」を、もうちょっと掘り下げて考えてみていただきたいのです。ひょっとしたら、その愛は、お子さんに向けられたものではなく、お子さんを通して、自分に向いているのではないのでしょうか。お子さんを愛しているようで、実は、自分を、自分だけを愛しているのではないのでしょうか。

こんなことを言っても、本当はどうなのか自覚するのは、たいへん難しいことです。この本1冊だけで、愛の問い直しへの答えを出すことは、おそらく不可能に近いでしょう。それでも、ほんのちょっと立ち止まって、一緒に考えてみていただけたらと思います。

## 人間にはふたつの心がある

### 「自」の心と「他」の心

さて、子どもは成長につれて、おもに統制を必要とする時期と、自由を必要とする時期を交互に通ってきます。両方をバランスよく通って成長すると、他者に対して素直に心を開く、かと言って主体性がないわけではなく、しっかりと「自分」というものをもった、とても円満な人間になっていくと考えられます。

ここで、人間の心とはどうなっているのかを、一度きちんと考えておきたいと思います。すでに答えを出したようなものですが、人間は、他者に向かって開いていて、他者を受け入れる心と、自分のことを優先し、自分をとて大事にしようとする心、このふたつの心をもっています。

「なんだ、当たり前じゃないの、そんなこと」と思われるかも知れません。でも、例えば心理学とか、精神医学とかの研究分野では、案外このことが「当たり前」ではないのです。これらの研究では、いままでずっと、人間の心を、自分を大切にしようとする心だけで説明しようとしてきました。他者に心を開くのは、その方が自分自身の生き残りに都合がいいからそうするにすぎない、と考えられてきたのです。でも、それだけでは「人間とは何か」ということはわかりません。人間には、自分はどうなってもいいから、ひたすら相手に尽くすという心があるのです。そこでは、自分の都合とか、損得勘定とかは抜きなのです。

### 性善説と性悪説

ちょっとここでお話をはさみますと、みなさんよくご存知だと思いますが、「人間の本性は善か悪か」という、古来中国で言われた「性善説」「性悪説」というものがあります。みなさんは、人間の本性はどちらだと考えていらっしゃるでしょうか。

あくまで私たちの感覚ですが、いまの日本では、どちらかと言えば「性悪説」がやや有利のように思えます。赤ちゃんや子どもとは、きわめてわがままで勝手なもの、はやりのことばで言うなら「ジコチュー」であるとされています。そのジコチューな奴らを、大人がしつけて、教育して、どうにか世間で生きていけるように仕立ててやるのだ、と、こんなふうに考えられているのではないのでしょうか。

もっとも、これは日本らしい考え方と言うより、ヨーロッパ的のしつけ観に影響されてい

る部分が大きいと考えられます。数年前、ある雑誌で読んだのですが、ヨーロッパでは、古くから、三歳くらいまでの子どもは、動物と同じだと考えられているそうです。ですから、イヌやネコをしつけるのと同じように、マナーやルールを、有無を言わずたたき込みます。体罰は当たり前で、「神様は、親が叩くためのお尻を子どもに贈った」と言われます。それによって、単なる動物だった幼児が、だんだん人間らしくなって、社会生活ができるようになって考えられているのです。

こうした考えが、現代のヨーロッパで、どこまで一般的かは、調べていないのでくわしくわかりません。しかし、わざわざ雑誌で紹介されるくらいですから、日本のしつけも、「動物並みの子どもを人間にしてやるんだ」というきびしさ（しつけではなく虐待になるおそれが大きいと思いますが）が必要だと考える人が多いのでしょう。

さて、性善と性悪ですが、私たちは、人間とは、どちらでもあり得ると考えています。生まれたての赤ちゃんが、絶対に悪いことをしないのは確かです。その後の成長で、他者に尽くす心が豊かに育っていく人は、悪を犯す危険性が低くなるでしょうし、自分を優先する心ばかりが大きくなる人は、反対にいつでも悪を犯しながら生きていくようになるだろうと思います。だいたい、「悪いこと」というのは、自分だけいい思いをしたい、とか、得をしたい、といった気持ちが強く、そのために他人に害を与えることを言うのがほとんどです。

#### 赤ちゃんは他者に尽くす

相手に尽くす心の話に戻ります。「無理無理。自分より他人を優先するなんて、私にはとてもとても」、たいていの人はこちらが本音でしょう。それが普通です。しかし、どんな人でも、ずうっと昔、どれくらいかというとまだ1歳前後の、歩けるか歩けないかの頃は、どうだったのでしょうか。もちろん、そのころの記憶がある人はいないでしょうから、身近に赤ちゃんがいる人は、その赤ちゃんのことを思い浮かべてみてください。

1歳くらいの赤ちゃんが、おもちゃを持っていたとします。「ちょうだいな」と手を差し出すと、ほとんどの子が素直に渡してくれます。「ありがとう」と喜んでみせると、赤ちゃんもうれしそうにニッコリします。赤ちゃんは、相手が誰でも、その人が喜んでくれれば、自分もうれしくなるのです。お菓子を分け合ったとしても、自分の分がなくなってしまいうのに、こちらにドンドンくれます。ふと我に返って、自分のところにひとつも残っていないのに気がつく「エーン」と泣き出しますが、最初から計算して、「アンタの分

はこれだけね」とばかりに、ちょっとしかくれない赤ちゃんは、まず、いません。自分の損得にはまったく無関心なのです。

こういう赤ちゃんを見て、多くの方は、「ホントに赤ん坊というのは知恵がないなあ、自分の損得もわからないんだから。早く大きくなって、かしこくなれよ」と考えます。実際、子どもも、3歳ともなれば、もう損得勘定ができるようになります。3歳の子とお菓子の分けっこをしたとすると、もうその子は一方的にサービスはしてくれません。自分の取り分が少なくならないか、相手ばかりが得をしないかと、非常に慎重になります。多くの親や大人たちはそれを見て、やあ、この子もかしこくなったもんだと言って喜びます。でも、ちょっと待ってほしいのです。たしかにかしこくなったかも知れませんが、かしこいはかしこいでも、アタマに「ワル」や「ズル」が付きはしないでしょうか。

損得勘定ができる人と、できない赤ちゃんと、果たしてどちらが人間として上等だと言えるでしょう。私たちはもう、絶対に赤ちゃんの方だと思うのです。赤ちゃんは、まったく心が汚れていません。心が汚れてしまった人たちは、その汚れを必死に隠します。そして、汚れに引きずられて悪いことをしそうになるのを、必死にガマンします。しかし、赤ちゃんは、そんなむなしい努力をしなくても、ただあるがままで、悪いことをしないどころか、考えもしないわけです。

#### 自他が一体化した赤ちゃんの心

これはどういうことなのでしょう。

赤ちゃんにも、自分のことを大切にしようとする心はあります。たとえば、おなかがすいたり、オムツが濡れたりして不快になると、大きな声で泣いて訴えます。これが、自分を大切にする、言い換えれば自分を生かそう、生かしたいとする心のひとつです。

そしてまた、他者に心を開き、他者を受け入れようとする心は、お菓子やおもちゃを例に挙げたとおりです。

赤ちゃんの中では、このふたつの心が完全に一体化しています。しかも、赤ちゃん自身が意識してそうになっているわけではありません。無意識のうちに、ふたつの心がひとつになっているのです。この、「無意識」というのがまたピンと来ないかも知れませんが、たとえばこんなふうに考えてみてください。

赤ちゃんは、おなかがすくと、「オッパイが飲みたいよう」と、大声で泣きます。オッパイを口に含めば、たいていピタッと泣きやみます。そして、おなかがいっぱいになると、

たちまちご機嫌になります。「いま飲んだから、次はいつにしようかな」、とか、「たまには他のものを飲みたいな」、とか、よけいなことはいっさい考えません。おなかがすく泣く 飲む 満足する ご機嫌が直る、と、いたって単純、明快です。

それから、人見知りが始まるまでは、あやしてくれる人になら誰でもニコニコと反応します。相手がブスツとしていたって、一生懸命に見つめます。お愛想のご褒美ちょうだいね、と計算をしているわけではありませんし、まったく差別の気持ちがないのです。

どんな場合でも、赤ちゃんが意識的にそうしているわけではありません。「無意識」ということが、多少はイメージしやすくなったでしょうか。

こう考えると、生まれてから1歳くらいまでの赤ちゃんは、大人が逆立ちしたってかなわない、人間として最高に清らかな心をもっていることがわかります。子育ての始まりは、親よりもはるかにすばらしい心をもった赤ちゃんををお世話することで、親自身が人間として心の磨き直しをするのです。ですから、子育てとは、大人の価値観ではかった悪知恵やずる賢さを、早々とつけてやることではありません。

### 「自」の成長

こんな赤ちゃんも、少し大きくなってくると、いろいろ「よけいなこと」を考えるようになります。食べ物は、好きなものを一番最後まで取っておいたりします。少し前までは、真っ先にかぶりついていたのに、です。こんな様子を見て、お父さんやお母さんは「この子も知恵がついたなあ！」と喜ぶかも知れませんが、いちがいに喜んでばかりいられるでしょうか。それは、悪知恵のつき始めでもあるのです。

人付き合いでも、えり好みが始まります。都合のいい人、自分に得になる人にはいい顔を見せますが、都合の悪い人、嫌いな人には、いやな顔を見せるようになります。

この時期、赤ちゃんの心にどんな変化が訪れているか、と言いますと、完全に一体化していたふたつの心、他者に開いた心と自分を優先する心とが、分離し始めたのです。そして、分離したふたつの心のうち、自分を優先する方ばかりがどんどん育っていきます。これは、誰でもほとんど例外なく、勝手にそうなるのです。いちおう年齢を示しますと、だいたい2, 3歳頃から5, 6歳頃にかけて、自分を優先する心が急激に育ちます。その結果、このころの子どもは非常に自己主張が強くなります。また、自分を保護してくれる人から離れたがり、他人に対して攻撃的にすらなったりします。これがいわゆる「第1次反抗期」と呼ばれるものです。

心は矛盾している

他者に向けた心と、自分に向けた心は、なかなか両立しません。他人のことばかり気にかけていると、自分のことがおろそかになりがちですし、その逆も起こります。ふたつの心は互いに「あちらをたてればこちらがたたず」という関係にあり、つまりは「矛盾」しているわけです。しかし、赤ちゃんの頃は、このふたつがまったく矛盾していません。それはつまり、人が喜べば自分も喜び、人が悲しければ自分も悲しむ、ということです。人間は誰しも、生まれたばかりはそういう心をもっています。つまり、これこそが人間のもっとも人間らしいところ、人の人たるゆえんであると言えます。

ところが、成長し、大人に近づくにつれて、こういう心は消えていきます。人が喜ぶと、自分は喜ぶどころではなく、うらやましがったり、ねたんだりすることの方が多くなります。また、人が悲しめば、一緒に悲しむふりをして、ハラの下では「ザマアミロ」とか、そこまでひどくはないにしても、「ああよかった、こんな目に遭うのが自分じゃなくて」と思ったりします。大きくなるにしたがって、人間らしさを身につけていくどころか、反対にどんどん人間らしさ、人間性を失っていくことになるのです。

人間は誰でも、多かれ少なかれこうなる宿命を負っています。とすると、ナチュラル派の言うように、子どもが自分で考え、自分で判断し、自分で決めることばかりを大事にしていると、とんでもない結果になるのが当たり前です。放っておいたらどんどん人間性を失ってしまうのが、人間の悲しい宿命なのに、それに拍車をかけるような方針なのでから、これは危険きわまりないと言えるでしょう。半世紀以上にわたるその蓄積が、いま、非行とか学級崩壊とか少年犯罪とか引きこもりとか援助交際とか無気力とか不登校とか学力低下とかいじめとか自殺とか（きりがない！）といった形で噴き出しているのです。

分離していくふたつの心を、再び一体化させること、教育の目標の究極は、ここにあります。子育てにも、同じ方針をもつべきです。そうでなければ、いま私たちが直面している数々の問題は、決して乗り越えられません。大げさに響くかも知れませんが、人類の幸せな未来も、ないと言えます。わざわざ「人類」などと言ったのは、実はこれが日本だけではなく、地球規模の大問題でもあるからです。子育てや教育の問題は、環境や、政治や経済の問題の基礎をなしているのです。



## 「愛」は見返りを求めない

### 心の成長の道すじ

子育ての道のりで、どんなときに、どんな「統制」と「自由」が望ましいか、ということの説明するのが、この本の役目のひとつです。そのことは、ちょっと長くなりますので、章をあらためて説明することにします。ここでは、その前段のお話をいたします。

たいていの方々は、こう言っては失礼ですが、子どもの成長全体に目配りをするより、日々の言動を重視して、その時々に対応に追われているのではないのでしょうか。そのことをいいとか悪いとか、いちいち申しません。しかし、子どもの心の育ち方には、体の育ち方がそうであるように、どの子にもある程度共通した道筋があります。

食べ物のことを考えてみるとよくわかっていただけたと思いますが、赤ちゃんの頃は母乳やミルクから始まって、何ヶ月頃になったらどんな離乳食を始めたらいいか、多くのお母さんは本やテレビなどで研究して、よく知っています。離乳食にも、ペースト状から固形食に向かって、けっこう細かい段階があります。そして、だいたい大人と同じものが食べられるようになって、たとえばうす味に慣れさせておかなければならないとか、脂肪分や糖分、刺激物はできるだけひかえるとか、近ごろはアトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患が多いので、それに配慮した食事を組み立てるとか、いろいろなことができます。どれも、子どもの健康な体作りのために、年齢や成長に応じた気配りであるわけです。

### 子どもに無関心なお母さん

では、子どもの心の成長について、こうした体の成長と同じくらいの、ていねいな配慮がなされているのでしょうか。私たちにはそれがどうも不十分であるように感じられます。いつでしたか、こんな話を聞いたことがあります。ある35歳ぐらいの方から聞いた話ですが、その方が市立図書館に行ったときのことで、広いロビーに雑誌や新聞が備え付けであり、多くの人々がそこに思い思いに過ごしていました。少し離れたところに、数人の小さな女の子（おそらく2, 3歳から5, 6歳くらい）がいたのですが、その子たちの騒々しいことと言ったらなかったそうです。喚声を上げて追いかけてくるは、階段の手すりを滑り降りるは、ゴミ箱のフタを開け閉めするは、まったくひどいもので、見かねた掃除のおばさんが「危ないよ」と言ったそうですが、聞くものではありません。その方が親はどこにいるのかなあ、と思い探していたら、なんと、その子たちが走り回る輪の中に

あるテーブルに座り、ひたいを寄せ合って世間話に忙しい2人の女性、彼女らが母親だったということです。このふたりは、掃除のおばさんが子どもらをたしなめているときにも、顔も上げずにおしゃべりに没頭していたそうですが、おかげで、世間話が終わり、子どもたちを呼び寄せて、椅子から立ち上がるまで、彼女らが母親であったとは、まったく気づかなかったそうです。

その方は教育熱心な人でしたので、このお母さんたちを追いかけて出口のところとつつかまえ、お説教をしたそうです。開口一番に言ったのは、「アンタ方、子どもに愛情もってるんですか」ということでした。彼女らは、自分たちのおしゃべりを最優先し(どうせ口く話じゃないに決まっていますが)、子どもたちが何をしようが、他者から何を言われようが思われようが、まったく無関心だったのです。子どもに無関心であることほど、愛から離れたことはありません。その方がされた指摘は本質をついたとても鋭いものだったと思います。

彼女らは鬼のごとき形相で振り返ると、猛烈な勢いでまくし立て始めました。

「よけいな世話よ、子どもを愛しているかなんて、アナタにそんなことを言われる筋合いはないわ、知りたきゃ教えてやるわよ、ワタシほど子どもを愛している母親はこの世にいないんですからね、さ、わかったらどきなさいよ、アンタなんかと話してるヒマないの、これからこの子のピアノなんですからね。そのあとは英会話だってあるの。だいたいアナタね、人のこと気にする時間があつたら、ちつとは自分のこと気をつけたらどう？」

あまりのすさまじさに、子どもがおびえてベソをかき出したそうです。

この2人、とびきり美人でも上品でもなかったそうですが、身なりに気を遣い、若々しい感じのお母さんとのことでした。子どもたちもそれぞれにかわいい服を着せてもらい、どの子も髪をくるくると結い上げ、ちょこんと髪飾りを付けてもらっていたそうで、お母さんが手をかけていることは、一目でわかります。

しかし、どれほどいい服を着せようが、習い事に行かせようが、ぜいたくな食事をさせようが、それらで愛の大きさ、深さをはかることはできません。子どもを愛するとは、手をかけることではなく、目をかけることです。目をかけるとは、最高の関心を寄せることです。無関心に放っておくこととは、正反対なのです。

#### 親自身の心

このお母さんたちのように、ある面では、とても一生懸命子どもに手をかけるのに、別

の面では、まったく無関心でほったらかしというのは、いったい、どういうことなのでしょう。何も母親たちだけがそうなのではなく、多くの父親たちにも当てはまることだと思います。

これは、ほとんどの親たち、彼ら自身が育ってくる道筋において、自分を主張し、自分を優先する心ばかりを大きくさせ、他者に関心をもち、他者を受け入れる心をまともに大きくしてこなかった結果、きつく言えば「なれの果て」だろうと、私は考えます。そういう意味では、彼らを育てた親や学校に責任があるわけで、いまの親の世代は、被害者でもあるわけです。おじいちゃん、おばあちゃんは、そのまた親に育てられたのですから、これはいわゆる「ニワトリが先か、タマゴが先か」の話になり、結局だれの責任にもできません。しかし、現在は、被害者である親がまた新たな被害者を作り出しています。「親が悪い、じいちゃんばあちゃんが悪い、いやいや世の中が悪い」、このように言ったところで、どこかでこの悪循環を断ち切らないといけないのです。現代に生きる人々すべてが、一大決心して考えを変えなければならぬと言えるでしょう。

さて、親たちが、自分を優先する心ばかりを大きくしてきた、と言いました。いまの多くの子育て世代は、高度経済成長が頂点からそろそろ下り坂にさしかかろうとする頃に、子ども時代を送った人たちだろうと思います。学歴社会はすでに当たり前になり、受験競争はとくに激化していました。このような世の中で、それ自体にはまったく価値がないものが、きわめて大きな価値や力を示すようになりました。代表はお金です。お金そのものは、それがいくら茶碗に山盛りになっていたって、ちっともおなかにはふくれません。食べ物と交換することで、やっと役目を果たせるのです。子どもにも分かる簡単なことを言っただけです。

学歴や地位も同じことです。それらがあっても、別に人間としてすぐれているわけでも、上等なわけでもありません。ただ、人より多くのお金が稼げる、つまるところはそれだけです。

#### 変わってきた価値

骨身を惜しまず働くとか、人には親切にするとか、ぜいたくは言わないとか、うそをつかないとかといった、かつてとても大切にされていたことは、ほとんどかえりみられなくなりました。少しくらいうそをついても、それで出世できたりもうけたりできれば、その方が「回転の速い切れ者」としてほめたたえられます。もうけたお金でぜいたくざんまい

をしていれば、「さすが大物はやるのが違う」などと言われ、テレビで紹介されたりもします。汗を流して働くなんで、トロいやつがすることで、デキル人間はエアコンのきいた部屋で人に指図をするものだ、こう考えられています。

こういう風潮の中、それにあった子育てや教育が行われてきました。基本方針として大切にされたのは「人に勝つ」ことです。すでに言ったように、人間は誰でも、大きくなるにつれて、自分を優先する心がふくらんできますが、その中には「人に勝ちたい」「人よりすぐれたことをしたい」という気持ちが含まれています。それが大きくなりすぎると、本来の人間らしさをおおいかくしてしまう「心の闇」になってしまいます。しかし、その闇を吹き払うどころか、ますます大きく、濃くすることが目指されれば、この世が暗く、住みにくいところになっていくのは、当たり前です。

勤勉、質素儉約、正直、こうした昔ながらの価値は、どれも他者、昔ふう言えば「人さま」の方を向いたものです。こうでなければ「世間に顔向けができず」「人さまにご迷惑がかかる」からでしたが、戦後になって、こういう考え方はとても軽蔑されました。それよりも、人がどう思おうと、なんと言おうと、自分でいいと思ったことがよくて、悪いと思ったことが悪い、こう言える人間を育てなければならぬとされたのです。あらゆる基準は自分の中にあり、外にはないと子どもたちは教えられました。それはつまり、「人の意見になど耳を傾けるな」ということです。そうになると、人は誰でも、自分に都合のいい意見や、おだてや、自尊心をくすぐってくれる言葉などは、喜んで受け入れますが、少しでもきびしい小言などには、いっさい耳を貸さなくなります。いまは、大人も子どもも、みなそうになっています。多くの親や教師が、「子どもが大人の言うことをまったく聞かなくなった」と嘆きますが、できるだけそうなるように育てたのですから、それは教育の成果が大いに上がった結果と言えるのです。一生懸命育てたつもりで、いざ育ち上がったときに「こんなはずではなかった」と嘆くのでは困ります。

本当に人間らしい心をもった人間とは、自分を大事にする心と、他者を大事にする心とが、一体化している人のことです。

自分を大事にする心の方は、放っておいても大きくなりますが、他者を大事にする心の方は、そうはいきません。生まれながらに誰もがもっている心ではありますが、放っておかれると、大きくなるにしたがってどんどん小さくなり、ほとんど働かなくなってしまいます。こちらの方は、親や教育者が十分に気をつけて育て、伸ばし、しつけなければなりません。

「他」の心を育てる

もちろん「自」の心も、正しく育て、導いてやらなければなりません、いまは「他」の心がほとんど省みられていませんので、こちらを強調しているわけです。

さて、問題は、「他」の心をどう育て、しつけていくか、です。よくあることとして、こんな話があります。自分の子が、よその子を叩いて泣かせたので、その子がどれほどの目にあつたかをわからせるために、親が思いきりビンタして「しつけた」というもの。しかし、近ごろは逆かも知れません。よその子にケツバされて泣いて帰ってきたので、「うちの子に何すんの！ どんなに痛かったかアタにも教えてやるわ！」と逆上して、小さな子どもにケリを入れる・・・、あまり多くはないでしょうが、今日も日本のどこかで起こっていることは考えられます。

「そんなことではいけません」と口でさとすのにくらべると、かなりスパルタ的です。そして、こういうスパルタ的しつけがなくなったことが、日本の子どもをダメにした、こういう意見が強く言われます。口で言ってわからんやつにはカラダでわからせる、というわけで、こう書くと明らかなように、拷問に近いと言えます。

体罰はしつけか

叩かれ、殴られ、小突かれて「しつけられた」子どもたちは、素直に心を開くようになるのでしょうか。残念ながらそうはなりません。育つのは、おびえ、卑屈さ、それから恨みと、憎しみと、復讐心です。「いまに見ている、このクソバアア（お父さんだったらクソジジイ）、そのうち仕返ししてやるからな」、多く叩かれれば叩かれるほど、こういう気持ちをつのらせます。その後はたいてい悲劇が待っています。

「愛のムチ」というのもあるじゃないかと、多くの人は言います。憎くて叩くんじゃない、かわいいから仕方なく叩くんだと。では、愛のムチと、虐待との違いを、だれがつけるのでしょうか。ここまでは愛のムチ、ここから先は虐待と、その境界線は誰が引くのでしょうか。結局、それを引いているのは自分です。自分のカン、センス、常識、信念、モットー、何でもけっこうですが、そういうものにしがたって、そういうものを信じて叩いているわけです。それは、当然、人によってまちまちです。同じ子どもの言動を見たときに、「こんなことで叩かなくても」と思う人も、「こりゃイカン、ここでぶん殴らなくてどうする」と怒る人もいるわけです。愛のムチか虐待かの区別は、人によって判断がさまざま、つまりきわめていい加減なものです。みんなが適当に決めているということは、

本当の区別は誰にもつけられない、ということでもあります。

「愛のムチ」はない！

こう考えると、大人が子どもを叩くのは、一から十まで単なる暴力なのだ、虐待なのだということを、私たちはあらためて思い定めなければなりません。決して叩いてはいけな  
いのです。「きれいごとを言うな、殴らなきゃわからん子だっているんだぞ」と、食い下  
がる人もいるでしょう。しかし、「殴らなきゃわからん子」は、殴っても決してわかりま  
せん。殴られれば、以前にもましてひどいことになります。「愛のムチ」などというのは、  
憎くて子どもを叩いた人が、良心の呵責にさいなまれて（あるいは世間の手前かっこうが  
つかなくて）、苦し紛れの言い訳をしているだけです。

「イライラして、つい手が出ちゃう」と言う、正直な人もいるかも知れません。その「つ  
い」というところに、叩くことがすでにしつけども何でもないことがよく表れています。  
やっぱり、子どもが憎らしくて、腹が立って、叩いてしまうわけです。そのとき子どもは、  
大人の腹いせの犠牲者、被害者でしかありません。「愛のムチ」は、絶対にはないのです。

子どもへのイライラ、腹立ち、憎たらしいという思い、こうした気持ちを乗り越えるの  
は、「愛」しかありません。どこまでも、限りなく子どもを愛することです。「そんなこ  
と、とっくにわかってる」と言う人が多いでしょう。しかし、偉そうに言って本当に恐縮  
なのですが、子どもに対してイライラするようでは、子どもに限りない愛情を注いでい  
るとは言えないのです。たいていのお父さん、お母さんは、「イライラさせる子どもが悪く  
て、自分は悪くない」と思っていることでしょう。それがそもそもの間違いで、悪いのは  
イライラさせる子どもではなく、子どものことでイライラしてしまう親の方なのです。

#### 人のせいにする民主主義

とにかく、現代人は、何でもかんでも人のせいにします。そもそも、「民主主義」という  
ものが、そういう性質をもっているのです。いまが民主主義の世の中であるのは、言うま  
でもないことですが、ここでは、一人ひとりがしっかりと自分の考えをもって、それを相  
手に堂々と主張できることが大切にされます。これがちょっと極端になると、ウソでも、  
まちがいでいいから、とにかく話し合いで相手を納得させ、ときにはやっつけることが  
大事になるのです。自分は、つねに正しいのだという立場をつらぬき通さなければなりま  
せん。少しでも弱みを見せたら、たちまち相手につけ込まれますから、本当はまちがって

いたり、こちらに非があったりしても、それはなかったことにして、つまり自分のことは棚に上げて、相手を服従させなければならないのです。

最近、小学校の授業でも、「ディベート(討論)」が取り入れられるようになりました。ディベートは、民主主義ではとくに重要な技術です。ディベートの大会では、レフェリーによって、ある共通のテーマが示されます。たとえば、「アメリカ軍の基地が、日本国内にあること」というテーマについて、賛成と反対の立場に分かれます。それぞれの立場は、チームを組んで、相手を議論でうち負かすために、どういう論法でいくか、資料は何を使うか、など、さまざまに作戦を立てて、論争に臨みます。

これは、ゲームなのです。ですから、自分が本当に賛成か反対か、正しいと思うか間違いと思うか、ということとは関係ありません。いままで賛成だったけれど、これからは急に反対の立場をとる、ということになっても、あわてず騒がず逆のことを堂々と見えなければ、ディベートの達人とは言えないのです。

一万円札で有名な福沢諭吉は、「何か問題を出して見ろ、オレは賛成でも反対でも、君らのお好み次第の議論をしてみせる自信がある」と、友人たちに言ったそうで、これがまさにディベートです。

現代の国会中継を思い出しても、同じです。自分だって同じ穴のムジナであることは、周知の事実なのに、そんなことはおくびにも出さず、厳しく相手を追求する政治家が多いではありませんか。それから、ついこの間まで自民党だったのに、そこを離れて新党を結成した途端に「自民党はけしからん」と始める人が、いくらでもいます。

何が正しいのか、何が善いことなのか、どうすることが人間としてすばらしいのか、こうしたことは、民主主義においてはどうしてもよくなる運命にあります。とにかく、人はまちがっていて自分はずねに正しく、人の欠点は目ざとく見つけて足を引っ張り頭を踏みつけ、自分だけは得をしようと必死になる、民主主義とは多かれ少なかれ、遅かれ早かれ人間をこのようにしてしまう社会システムなのです。

#### 民主主義は同等対等

こういう風潮が、悲しいかな子育てにもたいへんに悪影響を及ぼしています。民主主義はもうひとつ、「だれもがみんな同等対等」という原則があります。親だろうが子だろうが、兄姉だろうが弟妹だろうが、先生だろうが生徒だろうが、「人間として」同じである、どちらにも人権があって、そこに上下の差はない、ということです。

大人と子どもが対等ならば、もはやしつけもへったくれもありません。教育が成り立つ余地などなくなってしまいます。両者が対等で、それぞれに自分の得になることばかり考えるようになれば、親子ですら敵同士になるのです。ですから、親は何でもかんでも子どものせいにします。

「こんなに言ってるのに、一回で言うことを聞かないでママ（またはパパ）を怒らせる」

「なにかっていうと口ごたえばかりして、子どものくせに生意気だ」

「一人じゃ何にもできないくせに、えらそうなこと言って」

「誰のおかげで大きくなれたと思ってるの」

子どもは子どもで、口が達者になってくると、猛烈に反抗します。

「いまやろうとしてたんでしょ、なんでいちいち怒るのよオ」

「関係ねえだろ、ほっといてくれよ」

「何にもわからないくせに、口出ししないでよね」

「だれが生んでくれって頼んだんだよ、オレだって好きこのんでこんな家に生まれたんじやねえよ」

こうした親子げんかは、ちょっとやそつとできあがるものではありません。やはり、長い長い時間をかけて、親子関係に根を張っていくものだと思います。

#### 愛情は一方通行

こうした子どもたちに対して、親が首根っこをギュウッと押さえ込んで、口ごたえも反論もできないように育てるといふ、スパルタ的な子育てはどうでしょうか。一概には言えませんが、中学校に入る頃から、そのやり方ではほとんど効果がなくなるだろうと思われまます。押さえつけて、とにかく言うことを聞かせるだけでは、子どもは極端な愛情不足におちいります。親からの愛が感じられず、親を信じられなくなると、子どもは自分の世界に閉じこもり、必死になってそこに安心を求めようとします。しかし、そこは孤独と不安が渦巻く、冷え冷えとした世界です。そこへの閉じこもりがあまり度を超すと、ついには、犯罪や殺人などのかたちで爆発したり、反対に、重圧に押しつぶされて自殺したりするこ



とが起きてしまいます。反対に、単なる自由放任も、子どもに愛を与えないという点では共通しています。

子どもを、自分だけの世界に置き去りにし、閉じこもらせてはいけません。子どもは誰しも、生まれながらひたすらに親を求めています。その心にこたえ、かぎりない愛を与えるのが親のつとめです。決して親と子は対等ではないのです。誤解を招く言い方かも知れませんが、子どもへの愛情は一方通行なのです。それは、親の自己満足とか、独りよがりとかではありません。子どものためを念じて、ひたすらに愛を注ぐだけです。余計な期待はしませんし、見返りも求めません。しかし、その愛があるときには、ごく普通の期待をはるかに超えた、すばらしい成長を、子どもは見せてくれるのだらうと思います。

親が、自分の都合を子どもよりも優先するようでは、子どもはいつまでもそれに縛り付けられて、のびのびと大きくなっていくことができません。親が、おのれの欲やこだわり、思いこみを捨てて子どもに接したとき、初めて、子どもは本当に大きくなっていきます。身も心も、健康に育っていきます。

近ごろ、児童精神医学者や心理学者、教育評論家といった人々が、「親の教育力が低下しているいま、子どもの問題について、親にあれこれ要求してもダメだ。親に代わって社会が子どもを受け入れ、子育てを支えるようにしなくてはならない」、こういう意見を述べています。冗談ではありません。親こそがしっかりしなくては、子どもは絶対に救われないのです。「親の教育力が低下している」のならば、何よりもまずそれが向上するようにしなければならぬはずで、子どものためならば自分はどうなってもいい、こういう覚悟と責任を、すべての親がもたない限り、子どもの幸せはありません。

#### 人を思い通りにする思想

さて、子どものことで腹が立ったり、イライラしたりするのは、子どもが親の思い通りにならないからでしょう。思い通りにならなくてアタマに来るのは、子どもというのは親の思い通りになるものだ、あるいはするものだという前提があるからです。

この前提は、先ほども取り上げましたが、民主主義の考え方そのものです。民主主義は、基本的に、自分を抑えて相手を立てるのではなく、相手を制限して言いなりにし、自分の思い通りにしようとする考え方です。民主主義では、一人ひとりがみな王様であり、支配者なのです。そこには当然衝突や意見の食い違いが生じますが、その際は何でも話し合いになります。しかし、話し合いは、多くの場合、譲り合いにはなりません。自分の意見の

方がマシだ、正しい、というのが基本になって、相手を説得します。話し合いで決着がつかないときは多数決で、というのが民主主義のルールですが、多数決でものごとを決めるというのは、たとえまちがっていても、多くの人が賛成すればそれがまかり通るということです。本当に正しいか、とか、善いことか、などというのは、どうでもいいわけです。多くの人が「賛成！」と手を挙げさせれば、ウソでもまちがいで、悪でも偽でも、そっちの方が正しくなるのです。

そして、やむを得ず反対意見に従うのは、そうしないと犯罪者にされてしまうか、非常に損をすることが明らかなきだけです。

どうして民主主義を目のカタキにするのだろう、と、違和感を感じられる方も多いかと思えます。日本は戦後50年以上、民主主義を最高の考え方としてやってきました。そのことは、教育に絶大な影響を及ぼしたと言えます。そして、民主主義教育を受けた人たちが、続々と親になって、子どもを産み、育てているのです。中には、早くもおじいちゃん、おばあちゃんになっていられる方も、多いはずです。民主主義の考え方は、すでに3世代ほどにわたって引き継がれているわけです。

その結果、日本はどんどんいい国になっているのでしょうか。子どもたちはみな、元気に、明るく、素直に育っているのでしょうか。そう思える人は、かなり少ないはずですが。私たちの願いとは反対に、日本はますます悪い方向へ向かっている、そうとしか思えない出来事や事件が、いま、多発しているではありませんか。

日本はいま、ほとんどがけっぶちの、ギリギリのところ立っています。出来事や事件を見るとそうになっていますし、政治も、経済も、環境も外交もそうです。私たちだけが勝手に「アブナイぞー、アブナイぞー」と騒いでいるわけではなく、他にも似たような警鐘を鳴らしている人は、いくらでもいます。世界全体、地球そのものがそういう危機にあるわけですが、その中でも、日本が一番危ないところにいると言えるのです。

## 民主主義の悪

私たちは、今日の危機を招いたのは、過去半世紀以上にわたって日本社会の基本になってきた、戦後民主主義だと考えています。子育てや教育は、その悪影響をもちに受けて、ほとんど壊滅状態です。ですから、お父さんとお母さんが、とおりいっぺんの子育てマニュアルを身につけたくらいでは、事態はよくなりません。根は深く、広いのです。かなり下まで掘り下げなければ、解決は不可能です。そして、私たちは、焦点を民主主義に合わ

せなければならぬと言いたいのです。

民主主義に問題あり、と言うと、スパルタ教育を主張する人々が喜ぶかも知れません。「それみる、やっぱり民主主義とかいって子どもを甘やかしたツケが回って来たのだ。子どもにはビシッと、ガツンとやらなきゃ」というわけです。しかし、もちろん私たちはスパルタ教育を礼賛するわけではありません。そのことはすでに述べてきました。

民主主義によって、親も子も、先生も、みんなが自分ばかり主張し、優先するようになったことが問題の根源です。子どもはもともとそのようには生まれついていなかったのですが、大人たちがよってたかってそうなるように育て上げてきたのです。誰もが、自分だけを愛し、他者に愛を与えないのです。一見愛しているようでも、それは相手を通して自分を愛しているに過ぎません。

「自分が」幸せになりたい

夫婦すらそうなってはいないでしょうか。「キミを（アナタを）一生幸せにする」と、口では言いますが、だいたいは「この相手となら、自分が幸せになれそう」と思って、結婚するのが本音です。自分はどうなっても、この相手にひたすら尽くして一生を終えよう、こんな覚悟をしている人がもしいたら、ぜひお会いしてみたいものです。しかし、本当の愛とはそういうものなのです。

結婚相手は大人ですから、愛をもらおうとしてもなかなか思い通りにはいきません。最初の半年くらいはうまくいくかも知れませんが、すぐに底が見えてきます。あっという間にミエミエになると「成田離婚」になります。こんなことばも時代遅れになったのは、めずらしくとも何ともなくなったからでしょう。

その点、子どもはこれから育っていくわけで、うまく育てば親を愛してくれる可能性はかなり高いと言えます。かくして、多くの親が、子どもに愛してもらおう、なぐさめてもらおう、いやしてもらおうと思って、せっせと子どもをかわいがるのです。子どものためではなく、親自身のために子育てをしているのです。そのどこに、愛が見いだせるでしょうか。あるのは親の自己愛だけです。

こうして、子どもは親のペット、アクセサリー、なぐさみもの、おもちゃになっていきます。ペットをひたすらかわいがるのは、ペットに愛してもらいたいからです。いやしてもらいたいからです。イヌを一生懸命かわいがる人が、よく「イヌは裏切らない」と言います。亭主や女房はちょくちょく裏切るわけです。傷をいやしてくれるのが、イヌでなく

て、自分の子どもであったら最高です。ですから、多くの親が、子どもを自分の思い通りに育てたがるのです。そして、そうならないとき「あんなに可愛いがってやったのに、この恩知らず！ 裏切り者！」と逆上することになります。子どもが面食らうのは当たり前でしょう。子どもは親から愛をもらわなければ大きくなれないのに、当の親が、子どもに愛されないと行って嘆くのですから。どっちが親でどっちが子どもか、わかったものではありません。

#### 自己愛を捨てる

しかし、私たちのように親の立場にある人は、自己愛を捨てなければなりません。子どもは決して親の思い通りにはなりませんし、また、してもいけないのです。子どもは親の持ち物ではないし、ましてやペットでもアクセサリでもないからです。

じゃあ、親は子どもに、しつけも干渉も口出しもするなと言うわけか、と思う人がいるでしょう。さて、ここが難しいところです。親は全身全霊をこめて、子育てを、しつけをしなければなりません。そのことと、子どもを親の思い通りにしてはならない、ということとは、矛盾しないのでしょうか。

子どもを自分の思い通りにしたがる、というのは、子どもを自分の持ち物、いやそれ以上に、自分の一部と見なしていることと同じです。では、ここで考えをもう一步深めて、多くの親たちは、自分自身が自分の思い通りになっているのでしょうか。そんなこと、言われなくてもできてるに決まっていると言わずに、少し立ち止まって考えてみていただきたいと思います。

仕事のトラブルは女房と関係ないのに、ついハツ当たりをしてしまった、夫が疲れて帰宅したのに、ついつい愚痴ばかり言って怒らせてしまう、たばこは体に悪いと知っていながら、どうしてもやめられない、酒も、酔うまで呑まなければ気がすまない、子どもには好き嫌いをするなど言いながら、自分は食べないものがある、運動不足なのに、ちょっとしたゴミ出しすらクルマで行ってしまう・・・、一つひとつ反省してみると、ほとんどの人が「こうしなくては、とわかっているのに、どうしてもできない。または、ついついしないですませてしまう」、こんな問題を抱えて、毎日生活しているのではないのでしょうか。

自分のことを自分でコントロールできないのに、どうして他人である子どものことを思い通りにできるのでしょうか。いやはや、説教じみた言い方で恐縮です。「何だ偉そうに

コノヤロー」と思われた方も多いでしょう。別に特定の誰それがどうこうと言っているわけではないので、あまり気にしないでください。

自分で自分が思い通りにできない人間に、どうして子どもを思い通りにできようか。この基本に立つことが大切です。その上で、子どもの健やかな成長を願って、一生懸命に子育てをするのですが、そこでもっとも重要なのは、親の思い通りにならない子どもを、どこまでも許し、認めることです。これは、甘やかすこととは違います。

### 客観的な価値

いいことはいい、悪いことは悪いと、はっきり教えなければなりません。そしてそれは、親の好みや思いこみ、こだわりやきげん、こうしたものに左右されてはいけません。人や、時と場合によって良かったり悪かったりする、いい加減な価値ではなく、客観的に見て、誰からも、そしていつでも正しいとされるものごとを教えなければなりません。それには、ほかならぬ親自身が、そうした正しい価値をいつも意識し、それが身に付くよう努力し続けなければならないと言えます。そして、スーダラ節のように「わかっちゃいるけどやめられない」という姿勢は、自分自身には許さない、厳しさを課すのです。できなければ、どこまでも反省しなければなりません(あまり落ち込んで逆効果ですが)。親と同じように、子どもだって「わかっちゃいるけどやめられない」ことはしょっちゅうです。そして、親は子どもより多少経験をつんでいますから、自分のことはさておき、子どものあやまちをよく目に付きます。そのたびに、ガミガミ、あるいはネチネチ叱られたのでは、子どもはすっかり萎縮してしまうでしょう。だいたい、ガミガミ、ネチネチ言い続けるのは、子どものためにそうしているのではなく、親自身の腹の虫が治まらず、そのストレスを解消するために、子どもに八ツ当たりしていることが多いものです。叱っているうちに、自分のことばに自分で興奮してきたりして、引っ込みがつかなくなり、どうにも困ったことになります。子どもこそいい迷惑です。

### 我慢、辛抱

親は、子育てに確固たる信念をもち、うまくいなくてもじっと辛抱し、我慢をし、おだやかに、ねばり強くしつけをしていかなければなりません。だいたい、この「辛抱」とか「我慢」とかいうことばが出てきただけで、「あっ、こりゃダメだ、こんな時代遅れの感覚には付き合っていられない」、このように受け取られるのではないのでしょうか。あと

でまた紹介しますが、現代の子どもたちが示す特徴のひとつに、ほとんど我慢ができず、根気がない、ということがあります。なぜそうなるのか、理由はいくつかあるでしょうが、まず、お父さん、お母さん方が我慢をしなくなったことが考えられます。さっきも言った「わかっちゃいるけどやめられない」のは、我慢が足りないからです。しつけども、1回言っただけで聞き分けなければ、すぐにカッとなってピターンとひっぱたきます。まあ、待ってあげてもせいぜい「仏の顔も三度」というところでしょうか。本当の仏さまはもっと許してくれると思いますが。

親自身が我慢しないのに、子どもに口先だけで「何よ、それくらい、ガマンしなさい」とか「まったくおまえは辛抱が足りねえなあ」などと言ったって、子どもがよくなるわけがありません。別にガマンなんてしなくていい、と考えて子育てをしているのなら、また話は違ってきますが、多くのお父さん、お母さんは、我慢強い子になってほしいと願っているわけです。そのためには何よりも、親自身がじっと耐える姿を示して、お手本になるべきでしょう。

「お菓子が食べたいけれどガマンする」「テレビを見たいけれどガマンする」、こうした我慢を子どもと一緒にするのも、かわいらしくてけっこうですが、親たるもの、子どもよりはレベルの高い我慢をしたいものです。子育てで一番大切なのは、ここでまた話が戻りますが、子どもが自分の思い通りにならなくても、じっと我慢することです。すぐに、目の前でしつかけの効果が表れなかったとしても、簡単にあきらめたり、キレてしまったりせず、じっと辛抱して、いつか必ず通じるときが来ることを信じて、子どもと向き合い続けることです。この我慢や辛抱こそが、親の愛なのです。

「アンタのためにやってるんでしょ!!」「お母さんの言うことを聞けない子はいらからね。もう出て行きなさい!」「何度言ったらわかるんだ、もう知らん、勝手にしろ!」、どのことばも、いちおうは子どものために言っていることです。しかし、言われた子ども自身は、こうしたことばの裏に、お父さん、お母さんの愛情を感じ取れるでしょうか。

#### ダブルバインド(二重拘束)

「出てけ!」とか「勝手にしろ!」とかは、もちろん脅しです。親は、本当にそう思っているわけではありません(と、信じたいのですが・・・)。それを子どもが真に受けて、本当に出ていったり、やりたい放題勝手にふるまったら、お父さん、お母さんはどうなるでしょうか。ますます逆上して、「勝手にしろっていうのは、そう意味じゃないだろうが!

本当にバカだねおまえは!!」、たぶんこうなるでしょう。子どもは、親の言うとおりにすると怒られるし、言うとおりにしなくても怒られるわけです。親は結局、「素直に謝れ」と言いたいのですが、その気持ちがひっくり返って「勝手にしろ」となります。子どもは、本当に勝手にすれば、ますます叱られますし、何もしなくても怒鳴られます。気持ちはどんどん混乱し、追いつめられます。

このような叱り方を「二重拘束（ダブルバインド）」と言います。こうしたしつけを受け続けると、子どもは次第に親の言うことを信じられなくなってきました。

幼いころにダブルバインドで叱られると、ワーンと泣いて混乱した気持ちを訴えます。親はその泣き声にますます腹を立て、ときには暴力で押さえ込もうとします。少し大きくなって、計算がはたらくようになると、子どもは親が脅しで言っていることがわかってきます。脅しには脅しで対抗だというわけで、本当に家出をしたりします。「どうして黙って出ていくの!」と叱ると、「そうしろって言ったのはそっちでしょ!？」と、あげ足を取られてしまいます。こうなっては親の言うことを素直に聞くどころではありません。

子どもにとって、この世で一番の信頼を寄せるのは、親であるはずですが、生まれたての赤ちゃんは、あらゆる人に分けへだてなく心を開いているのですが、お母さん、お父さんの、献身的なお世話を受けるうちに、身も心も親に託し、自分にとってなくてはならない存在になっていきます。

親は、その信頼に対して、一点の曇りもなくこたえてあげなくてはなりません。そのことで、子どもは、世の中のさまざまな人を信じる気持ちを、自分の中に再び育てていくのです。

ところが、親が、気分や機嫌に引きずられて、子どもに対してダブルバインドで迫るようなことがあると、子どもは親のことが全面的に信じられなくなってきました。お父さん、お母さんの言うとおりにしたら、もっとひどいことになる、と考えるようになってきてしまいます（しかも無意識のうちに）。そうなったら、世の中の人すべてが信じられなくなるのは、当たり前です。信じられるのは結局、自分だけ、ということになります。

#### 自分の殻

これに加えて、学校やテレビ、雑誌、いまではインターネットなどが、「信じられるのは自分だけだぞ、自分が正しいと思ったことが正しくて、自分が間違っていると思えば間違っているのだ」、こういうことを子どもに教え込みます。子どもは、やっぱりそうか、

オレ（ワタシ）の思っていることは正しいんだな、と納得して、自分だけの殻に閉じこもっていきます。

こうしたことに当てはまる親子は、いま増えているようです。必ずしも、非現実的な絵空事を言っているのではないのです。まことに、悲しいことです。

「勝手にしろ」などと、ダブルバインドで怒るとするのは、親と子どもが、同じ土俵でケンカしていることになります。親と子が、対等になってはいけません。親は、あくまで子どもより一段も二段も高い次元にいて、子どもをゆとりの目で見守ってあげたいものです。

親は子を見下し、ふんぞり返っていばってよろしいと言っているわけではありません。むしろまったく逆で、親の方がレベルが上だからこそ、一步も二歩も譲ってやり、認め、許してやるのです。これが、子どもを愛する姿の一つです。

親が子どもと同等、対等なレベルで向き合っこそ、子どもは親に心を開いて接するようになる、こういう意見があります。前に色分けしたグループで言えば、ナチュラル派に属する人々が、よく言うことです。

これに対して、スパルタ派の人々が、そういう甘っちょろいことを言うから、子どもがつけあがり、言うことを聞かなくなるんだ、親は親、子どもは子どもなんだから、子どもは親に服従するのが原則、遠慮しないでビシビシやりゃいいんだ、だいたいこんなことを言います。

私たちに言わせれば、どちらも不十分です。ナチュラル派の言うようにすると、親は愛情を注いでいるように見えますが、子どもはそこに親の頼りなさ、ほねのなさを感じ取り、親を自分より低く見るようになるかも知れません。必然的に、言うことは聞かなくなるでしょう。また、スパルタ派の言うとおりにすると、子どもは親からの一方的な押しつけを感じ、それに服従して主体性のない子どもになるか、やたらと反発だけして素直さのない子になるか、どちらかの危険性が高くなると思います。

### 愛はギブ・アンド・ギブ

基本は、無限の、深い愛なのです。愛があれば、子どもに必要な統制と自由を、無理なく、自然に、ゆとりをもって与えることができます。

この愛は、見返りを求めません。つまり、「これだけしてやったんだから、いい子になるはずだ」とか、「大きくなったら親孝行、恩返しをしろよ」、こういうことをいっさい



思わない、ましてや口になどしない、ということです。

愛はギブ・アンド・テイクではありません。それを言うならギブ・アンド・ギブ、ただひたすらに、どこまでも、一方的に与え続けるだけのものです。ここに、人間のもつ一番の人間らしさがあります。

生まれたばかりの赤ちゃんは、誰に対してもわけへだてなく、ひたすらに関心を寄せます。つぶらな瞳で一生懸命に見つめ、目が合えばニコニコとほほえみます。別にそうしたからといって、ミルクをもらおうとか、抱いてもらおうとか、オムツを換えてもらおうとかという計算が働いているわけではありません。取り引きではないのです。

ただ、見つめられた大人の方が、「ああ、なんてかわいい子！」と心を動かされ、いそいそとお世話をしたくなるのです。この交流が、人間らしさの基本と言えます。

ついでに言うとおきますと、動物には、人間のような愛はありません。動物好きの方は気分を害するでしょうが、別に私たちは動物を軽蔑しているのではなく、単に本当のことを言っているだけです。かしこいとされるイルカだろうが、イヌだろうが、チンパンジーだろうが、人間と同じような愛は、決してもっていません。

動物の親は、ときに人間以上にも見える献身的な態度で、子どもの世話をします。人間以上に見えるのは、天敵が来たときに、我が身の危険も省みずにオトリになるときとか、食べ物がなくなると、自分は飢えても子どもに与えるときとか、です。そんな様子を見ると、多くの方は、「すばらしい親子愛！ 人間も少しは動物を見習わなくては」と言ったりします。冗談言ってはいけません。人間がサルやイヌを見習うようではおしまいです。

## 人間と動物の違い

動物の献身的な親子愛は、「種族の保存」という本能に基づいた行動です。つまり、何も考えなくてもそのような行動に出るのです。人間と同じ愛によるのではなく、子孫を残すためだけに、そうしているのです。ですから、群れやグループが違えば、その子どもが死のうが飢えようが、まったく無関心です。また、海鳥やアザラシなどは、同じコロニー（繁殖地）の中で暮らしていても、よその子が自分のなわばりに入ってきたり、餌や乳をねだりに来たりすると、つついたりかみついたりして、死ぬまで攻撃を止めません。

すべての動物の中で人間だけが、本能を超えたひたすらな愛を、他者に向けることができます。ですから、これが、動物と人間を区別する、一番のポイントなのです。

人間はことばをしゃべる、でも、イルカもしゃべるなあ。人間は道具を使う、でも、チ

ンパンジーも石でクルミを割るし、草でアリを釣るぞ。最近パソコン使ってゲームもするし・・・、こういうのを悪いとは言いませんが、こんなことばかり言っていると、人間と動物との違いがどんどんわからなくなってきて、動物が人間並み、または人間が動物並み、ということが起こります（現にそうなっているように思います）。

人間と動物を分けるものは、他者へのひたすらな、わけへだてのない愛、これにつきま。ですから、この愛が枯れてしまった人は、人間らしさの基本を失っています。いくら金儲けがうまくても、パソコンを使いこなせても、知識を豊富にもっていても、大企業の社長でもどこかの国の大統領でも、人への愛をもたない者は、人間ではなくなってしまったのです。

子育てを、教育を、しつけを通じて、子どもに無限の愛を注ぐ、できなくても、できるように日々努力する。このことで、私たちは、失うおそれのある本当の人間らしさを、再び心に取り戻すことができます。

子どものために一生懸命になることは、同時に自分のためでもあるのです。こう考えると、子どもに対して「アンタのためにやってるんでしょ！」などとは、言えなくなります。子どもを「世話してやっている」のではなくて、「お世話させていただいている」のです。このことは、わざわざ口に出して言わなくても、毎日そのような気持ちで接していれば、必ず子どもに通じます。いい意味で、伝染するのです。

## 統制が必要な時期

すでに言いましたように、子どもの成長の道のりでは、おもに統制を必要とする時期と、おもに自由を必要とするときとが、交代で訪れます。この「おもに」というところに少し注意していただきたいのであって、統制の時期にはがんじがらめに束縛し、自由の時期には放ったらかしの知らん顔、と言うわけではありません。あくまでも、どちらにウエイトをおくのか、という話です。

さて、ふたつの時期は交互にやってくるのですから、説明も交代交代でしていったらいいのかも知れませんが、お読みになる方としては、それだとちょっと退屈かも知れません（もうとっくに退屈してるという方がいないことを祈ります）。統制と自由の時期を、いっそもとめてそれぞれ説明していった方が、区切りがよくていいかと思うので、そうすることになります。

さて、それではまず、統制を必要とする時期の話から始めます。

### 胎児期(おなかの中)

#### お腹の赤ちゃんに自由はない

赤ちゃんの心の成長は、お母さんのおなかの中にいるところから始まっています。当たり前のことを言いますが、赤ちゃんは、お母さんのおなかの中では、自分で自由にできることが、とても限られています。栄養は口からではなく、「へその緒」を通じてお母さんから送られてきます。自分が「ほしいな」と思ったときにももらえるわけではありません。まったく一方的、自動的に送り込まれてくるだけです。呼吸も、自分で息を吸ったり吐いたりするのではなく、お母さんの体から流れてくる血液に、酸素が含まれていて、それで呼吸ができるのです。動けるスペースも、ごく限られていて、ちょっと回転したり、手足を動かしたりできる程度です。つまり、赤ちゃんは、お母さんの完全な統制下、支配下と言ってもいいでしょうか、そういう立場におかれています。

赤ちゃんが、自分ではまったく何もできませんから、お母さんが十分に気を配って、赤ちゃんのための環境を整えてあげなければなりません。しかし、お母さんにはよく知られ

ているように、つわりやら、マタニティ・ブルーやらといった、実にさまざまなストレスがかかりますから、お父さんの献身的な協力が必要です。

何をどう協力したらいいのか、それは夫婦によってさまざまで、いちがいには言えないかも知れません。しかし、ある程度共通して言えるのは、「実際に目に見える協力をする」ことが大切だ、ということです。重い物を持つ、食事の準備や食器の片づけ、掃除などの家事を手伝う、あるいは一手に引き受ける、上の子がいれば、その子らの子育てをそれまでよりも多く分担する、などなど、いろいろなことが考えられます。

また、お母さんの精神的な支えになることも、もちろん大切です。妊娠中、お母さんの精神状態は、きわめて不安定になります。「いままではこんなふうに怒らなかったのにな」と、不思議になるくらい、ささいなことでイライラしたり、涙もろくなったりします。人によって程度の差はありますが、だいたい、どのお母さんもそうなります。

お父さんに求められるのは、お母さんがどんな状態になっても、それに影響されることなく、グッとこらえ、ジッと我慢して、いつでもニコニコと機嫌よくしてあげることです。お母さんの気持ちを落ち着かせるには、それしかありません。

お母さんにしても、自分がいつになくイライラしやすかったりすることは、とうに承知しているわけです。しかし、それがどうしても抑えられません。自分でもわかっているのにどうにもならない、そんなとき、お父さんとマトモにぶつかったりすると、お母さんの精神状態は最悪になってしまいます。

こういう心理的ストレスは、おなかの赤ちゃんにとっても悪い影響を及ぼします。赤ちゃんは、逃げ出すことはおろか、泣いて不機嫌を訴えることもできず、おなかの中でじっとしているしかありません。

近ごろは、発達心理学などの学問がたいへん進歩して、おなかの中の赤ちゃんが、想像以上に外の世界をキャッチしていることが、いろいろと明らかになっています。そこで大切になってくるのが「胎教」というわけです。

モーツァルトやバッハを聴いたり、童話を朗読したりするのもけっこうですが、それ以上に大事なのは、お母さんができるだけおだやかに、楽しい気分で生活することです。旦那が帰ってきたら、どんな文句を言ってやろうかしら、と手ぐすね引いて待ちながら、クラシックのCDをかけたって、とても効果があるとは思えません。

タバコやアルコールが、おなかの赤ちゃんにとって毒であることは、よく知られていることです。お父さんだけでなく、お母さんも、こうした誘惑に対してはじっと我慢しなけ

ればなりません。

ある産婦人科のお医者さんが、妊婦さんを診察したとき、その人から、タバコのおい  
がただよってきました。どうも、待ち時間に一服してきたいらしいのです。お医者さんは、  
妊婦さんに「おなかの赤ちゃんに悪いし、生まれたあとも、母乳にニコチンが出るから、  
タバコはやめなさいよ」と指導しました。すると妊婦さん、あっさりと「じゃあ、やめま  
す」と答えたので、お医者さんはホッとしました。しかし、その人の言った「やめます」  
は、「タバコをやめます」ではなくて、「母乳で育てるのをやめます」という意味だった  
のです。その後どうなったのかは、知りませんが。

乳児期前半(離乳、歩き始めのころから2,3歳ころまで)

気持ちが大人の方を向く

オッパイだけだった赤ちゃんも、しばらくすると離乳食が始まり、あっという間にいろ  
いろなものが食べられるようになります。白くてかわいい歯も、生えてきます。グニャグ  
ニャだった体は、首がすわり、腰がすわり、寝返りからおすわり、ハイハイ、つかまり立  
ち、と、どんどん成長し、二本足での歩行に移っていきます。

心の成長はどうでしょうか。おなかがすいた、オムツが濡れた、とっては泣き、ご機  
嫌になればキャッキョと笑って、お父さんお母さんを一喜一憂させていた赤ちゃんです  
が、このころからカタコトを話すようになり、変化がはっきりと感じられるようになり  
ます。

お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、それから保育園の先生などの、大人た  
ちの言うことを、とてもよく聞くようになってきます。それから、大人のすることをよく  
見ている、一生懸命まねしようとしたりします。関心が、急速に周りの大人や、環境に向  
いてくる時期です。

大人がし向けなくても、自然とこうなってくるのですから、心の成長とは、うまくでき  
ているものです。この時期、心がこのような特徴を示すからこそ、離乳、歩行、トイレの  
トレーニング、衣服の着脱、会話といった、今後の生活の上で必要な数々のことを、大人  
のしつけによって身につけていくことができるのです。

ていねいに、やさしく教えていけば、子どもは一生懸命それにこたえようとし、根気よ

く練習を繰り返します。何でもはじめから上手にできるわけではありません。大人はそのことに十分配慮してやり、子ども以上の根気をもって、励ましながら教え、導いていきます。たとえできなくても、ヘタクソでも、遅くても、イライラしたり、叱ったりすることは避けたいものです。子どもが怠けてそうになっているわけではないのですから。むしろ、ひたすらにがんばっているのです。それでもできないときがあるのです。

そんなとき、大人から怒られたり、突き放されたりすれば、子どもの心は深く傷つくでしょう。大人への不信感が、芽生えてしまうかも知れません。たとえできなくても温かく見守ってやり、できたことは大いにほめ、喜んであげる、こうした、頼りがいのある大人の姿勢に守られて、子どもは、人を信じる気持ちを育てていくのです。

#### 児童期(小学生のころ)

##### 小学生に求められていること

しばらく前から、小学生をめぐるのは、いじめ、不登校、学力の低下などに加えて、学級崩壊の問題も、さかんに取り上げられるようになっていきます。何しろ、入学式の日から「うちの子のクラス、崩壊してるワ」とびっくり仰天するお母さんがいるのですから、事態はかなり深刻です。

小学校の教育で、いま、おもに目指されているのは、どんなことでしょうか。これまで何回か紹介してきましたが、それは、「自ら考え、自ら学び、自ら判断できる」ことです。そして、これまたしつこく繰り返してきましたが、その目標は言い換えれば、正しいか間違っているか、よいか悪いかは自分で決めなければいけない、あるいは自分で決めていい、こういうことになります。また、自分がしたいことはトコトンすればいいし、したくないことはしなくていい、こういうことにもなります。このような考え方は、すでに幼稚園での「自由保育」の中に取り入れられています。

たとえば、次のようなことがあるわけです。私たちが、ある幼稚園の運動会を見にいったときのことで、プログラムには趣向が凝らされており、種目は盛りだくさんでした。プログラムが進むたびに、先生が子どもたちを招集しますが、その呼びかけの音がちょっと変わっている、少なくとも私たちには変わっているように聞こえました。

「ハイ、次は玉入れですよー、出たい人、こちらにいらっしゃーい」

「出たい人」？、当然みんなが出るものだと思っていた私たちには、このことばがとても「新鮮」に響きました。

子どもたちの動きを見ていたら、本当に、出る子と、出ない子がいるのです。出る子は、にぎやかに張り切って入場門に並びますが、出ない子は応援席にしゃがみ込んで、地面に落書きなんぞしています。

この幼稚園の先生方は、幼いうちから、自分自身で判断できる力を育てなければならない、みんなが出るからワタシも出るとか、みんなが出なければ出ないとかいう、優柔不断、付和雷同の子どもを育ててはいけない、おそらくこのように考えたのでしょう。しかし、小さいころから、好きなことだけしていればいいと教え続けられた子どもが、果たして、困難にぶつかっても歯を食いしばって乗り越えるとか、つらくてもじっと我慢をするとかという態度を身につけられるのでしょうか。私たちには大いに疑問です。

いまは、こういう方針が小学校教育にも引き継がれているのです。小学校では、さすがに、「やりたくないことはやらなくていい」とは、おおっぴらに言わないと思いますが、そのかわり、やりたいこと、おもしろいことを「自分で」見つけて、それをトコトン追及しなさい、と教えます。それは結局、したいことだけして、したくないことはしなくていい、と教えることと同じになっていくのです。

#### 小学生は大人を求めている

離乳食や歩く練習が始まるころと同じく、この小学生の時代も、自然と子どもの心は他者や大人の方を向いてきて、他者を素直に受け入れるようになるのが、普通です（「でした」と言うべきでしょうか）。このことは、古くからの心理学でも、だいたい定説になっています。したがって、この時期は、子どもにとって、親や学校の先生からの、権威あるしつけが、とても大切です。子どもたちは、それをごく自然に、素直に、身につけることができるのです。

幼稚園時代までに、家族や社会の中で望ましいふるまいがどういうものかを、子どもたちはだいたい学んできています。小学生時代には、それらをもう一歩深めて、人間は、他者、あえて古めかしいことばにすれば「人さま」のために、わがままや欲求を抑え、自分は後回しにしても人さまを優先することを、身をもって学ぶ必要があります。それから、少しくらいつらくても、疲れても、一生懸命に働くことが尊い、このことを学ぶのも大切です。

こうしたことは、口で言ってわからせることはできません。知識や理屈で教えられることではないのです。実際に体を動かして、お手伝いをし、労働することによってのみ、本当に身につくものです。

もうかなり前から、小学校では、いわゆる「体験学習」が大はやりです。「何でも自分でやってみる、それまでは知ったかぶりをするな、自分の目で、耳で確かめて、自分で正しいと感じられたことだけを信じるようにしろ」、子どもは、だいたいこのように教えられます。

体験学習がこのように行われていると、子どもはどんどん自分の殻に閉じこもり、人や社会に心を開けなくなる危険性が高いと思います。しばらく前に、「人を殺す経験をしてみたかった」という衝撃的な理由で、主婦を惨殺した少年がいました。小学校での体験学習が、このような少年犯罪を生み出した、と言っことはとばが過ぎますが、根底では通じ合う部分があると言えないでしょうか。自分で確かめる、体験してみる、と教えるだけでは、その体験が、とてもせまい殻の中だけに、どんどん閉じこめられていくように思われます。自分の体験が、人とのつながりの中で、どういう意味や価値をもつのかを、一番大事にしなければならないのです。

そのためには、子どもが面白いことばかりやらせていたのでは、きわめて不十分です。大人が、どんなふうに入さまのために働いているのかを見せ、可能な限り同じことを子どもに体験させるのです。難しくても、つらくても、大人が力強く励まし、導いて、子どもにやり遂げさせるのです。

## 農業の体験

そのために、私たちが一番適していると考えているのは、農業です。農業は、人間が生きていく上での基本中の基本です。しかし、米作りも、野菜作りも、多くの日本人にとっては非常に縁の遠いものになってしまいました。そんな中で、「食べ物は大事なんだよ」と、いくら子どもに言って聞かせても、ほとんど切実な響きをもたなくなっています。そういうことをしつけようとする大人自体、昔にくらべればずいぶん少なくなっていると思います。

小学校5年生くらいの社会科では、日本の食糧自給率が、世界の中で見ても極端に低いことを教えます。豆腐やしょうゆ、味噌に使う大豆は、ほぼ100%近くが輸入であることや、天ぷらそばの麺もエビ天も、だいたい全部が外国産であることなどが、教科書に載ってい



ます。しかし、そんなことを知識として覚えても、「だから何なの？」ということにしかなりません。テストに出るから覚えても、3日もたてば忘れてしまいます。これほどナンセンスなことがあるのでしょうか。

政府もよく、食糧自給率の引き上げを熱心に語ります。でも、果たしてどこまで本気なのか、怪しいものです。農家の人々は、年ごとに苦しい生活を迫られるようになっているのではないのでしょうか。

食べ物はお金を出して買うのが当たり前、足りなくなったら外国から輸入すればいい、という、いまのような生活を、これから先いつまでも続けようとするれば、私たちはきっと深刻な危機に見舞われるでしょう。諸外国が、外交上もっとも有利なカードとして、食糧輸出の禁止をちらつかせる可能性は高いと言えます。電化製品や日用雑貨が入ってこなくても、工夫次第でしのげるかも知れませんが、小麦や大豆がなくなれば、私たちはとたんに飢えに苦しむことになります。

ずいぶん話が広がってしまいましたが、いますぐにでも、多くの人々が自分の手で食糧を生み出す、つまり農業を始めることは、非常に意義が大きいと言えます。この仕事は楽ではありません。しかし私たちは、いままで、あまりにもお金で楽な生活を買すぎたのです。

農業によって、子どもたちの心も健全に育ちます。さっきも言いましたが、子どもは、とくに小学生のころ、つらくても、一生懸命に働くことの尊さを、身をもって学ばなければなりません。そのためには、農業がうってつけです。やりたいことを、やりたいときに、やりたいだけやる、というような「体験学習」では、子どものわがまま勝手さが増長するだけです。机の上で理屈をこね回すのと、大して変わりません。

本格的に作物を育てようとしたら、子どもだけの手には負えません。大人の指導が必要です。いつ種をまくか、その前に土づくりはどうするのか、肥料は、消毒は、除草はどうするのか、長雨や日照りにはどう対処するのか、とりいれ時はいつか、とった作物はすぐ食べるのか、貯蔵しておくのか、保存の方法は・・・、などなど、あらゆることを、子どもは大人に教わらなければなりません。その中で、大人はおのずから、権威ある存在になっていきます。いばらなくても、怒らなくても、必要なことを教え、あとは黙って一緒に働いていけば、子どもは自然と大人を尊敬し、あとに付き従っていくのです。やりたいことを見つけたら、あとはどうぞ勝手におやんなさい、とばかりに放り出す体験学習とは、根本的に違います。

一坪の土地を借りることは、東京や大阪のど真ん中では難しいのかも知れませんが、工夫と努力でどうにかかります。要は、大人のやる気にかかっているのです。クワをにぎったことのないお父さん、お母さんも多いことでしょう。そんなときは、ベテランの人を探して、教えを請うのです。教わるのは、子どもばかりとは限りません。そうすることで、人の輪が広がり、難しく言えば社会の秩序が正しく保たれていきます。

こんなことをいくら言っても、学校がただちに変わることはほとんど期待できません。それよりも、一つひとつの家庭、一人ひとりの親が行動を起こす方が、ずっとやさしいことです。

「愛」は「信」を生む

さて、ずいぶん話題が広がってしまいましたが、子どもが統制を必要とする時期についてお話ししてきました。深い愛に支えられた統制によって、子どもは、親をはじめとして、世の中の人々を信じる心をはぐくみます。

いま、多くの子どもが、人を信じられなくなっています。学校の先生、友だちはおろか、親すらも信じられません。頼りにするのは自分だけなのですが、それは、絶望的な孤独でもあります。人は、人を信じ、人と心を通わせないと、生きている喜びを感じられないのです。

こうした孤独感から逃れるため、子どもは自分だけの世界に閉じこもり、その世界を必死になって守ろうとします。そのあらわれは、いろいろなかたちをとります。ある子の場合、自分より弱い立場の者をいじめ抜くことによって、自分自身の存在を守ろうとします。自分より弱い者がいなければ、自分自身を痛めつけます。また、昼夜を問わず、テレビゲームやインターネットに没頭する子もいます。部屋の中に閉じこもったまま、何日どころではなく、何年間も外に出てこないという、引きこもりが病的な状態にまで高じてしまうケースも、決してめずらしくなくなりました。

こうした子どもたちを前にして、「自我が弱い」とか「個が確立していない」とか言われることが多いのですが、そのような意見はどこかピントがずれています。決定的に重要なのは、その子たちが、誰とも心を通わせられない、人に心を開き、人を信じることができないうことです。「自我」とか「個」とかいう側面でだけ、人間や子どもをとらえようとする、多くの人をますます孤独へと追いやる危険があります。

私たち大人は、子どもを、人に心を開けるように、人を信じられるように育てなければなりません。そのために、深い愛に支えられた統制が必要なのです。愛は、結果を急ぎません。また、あれこれ多くを語りません。たとえことばがなくても、その人と一緒にいるだけで、じんわりと、やさしく、あたたかく、しみるように伝わってくるもの、それが愛ではないでしょうか。

こう考えると、子育てや教育における愛とは、ことばや理屈、知識や技術ではないと言えます。愛のある人とは、その人の人格そのものが、すでに愛なのです。その愛にふれることが、子育てであり、教育であるわけです。私たちは、そうなれるように、日々努力し続けなければなりません。

どうしたらそうなれるのか。その説明はとても難しく、ましてや実践は至難のわざです。あえて言うならば、私たち自身が、あらゆる人に心を開き、あらゆる人を信じるようにすることです。そんなことしたら、損ばかりするに決まっている、とか、「正直者はバカを見る」などと思う方は多いでしょうが、これは、表面的な損得で判断できることではないのです。もうこれ以上くどくど言っても、ことばが空回りするだけなので、このあたりでやめておくことにします。

## 自由が必要な時期

大人からの統制を受けるだけでは、子どもの心は健全に育ちません。人の顔色ばかりうかがう、主体性のない人間になってはいけないのです。他者に心を開き、他者を素直に受け入れるとともに、しっかりと「自分」をもった人間に育ててほしいものです。それを可能にするのが、統制と自由のバランスと言えます。

今度は、自由が必要な時期についてお話しします。

### 乳児期(生まれてから1歳くらいまで)

#### 赤ちゃん中心の生活に

このころのお母さんは、これまた大変です。「産みの痛み」というやつで、とてつもない痛みや疲労と闘って、やっと赤ちゃんをこの世に送り出したと思ったら、今度は休む間もなく赤ちゃんのお世話を振り回されるのです。

赤ちゃんは、親の都合など、いっさいかまってくれません。おなかがすけば泣き、オムツが濡れれば泣き、抱いてほしければ泣き、放っておいてほしければ泣き、といった具合です。この時期、お母さん、そしてお父さんに求められるのは、そうした赤ちゃんの要求を100%受け入れて、献身的にお世話をすることです。親の都合は引っ込めて、生活のすべてを赤ちゃんに合わせてあげることです。極端に言えば、赤ちゃんの犠牲になる覚悟が必要なのです。

お母さんにも、お父さんにも、したいことがたくさんあるでしょう。独身時代、そして赤ちゃんが産まれる前に楽しめた、ドライブ、映画、レストランでの食事、買い物、おしゃべり、コンサート、スポーツ観戦、人によってはパチンコ、マージャンに競輪競馬、こうしたもろもろのが、赤ちゃんのいる生活では非常に制限されます。

とくに、ストレスが高まるのはお母さんの方です。多くのお父さんは、仕事で一歩家を出れば、気持ちの切り替えができます。お母さんは、赤ちゃんから離れることができないので、そうはいきません。妊娠中は、マタニティ・ブルーの危険性がありましたが、今度は育児ノイローゼになりかねないのです。

母と子、ふたりだけの、いわゆる「密室育児」を通じて、お母さんがどんどんストレス

をため込み、精神的に追いつめられて、何らかの悲劇を招いてしまう、最悪なのは、親が赤ちゃんの命を奪ってしまうことですが、こうした事件は、日常茶飯事と言わないまでも、しばしば起きています。

このような悲劇を避けるために、政府や自治体は、「悩みを一人で抱え込まず、カウンセラーや保健所、児童相談所などに相談しましょう」と、コマーシャルで訴えています。また、子育て雑誌なども、お母さんがいかに気晴らしを見つけるかという問題について、工夫をこらした特集を組むことが多いようです。

そのような取り組みが無駄とは言いません。しかし、お母さんの気持ちを落ち着かせ、ストレスを解消し、子育ての新たなエネルギーを補充するのは、身近に、心の通い合った、あたたかな人間関係があることです。そのために一番大切な役割を果たすべきなのは、もちろん夫、お父さんです。

カウンセラーや、行政の相談係、こういった人々は、あくまでも「役割」「仕事」として、かかわってくれるに過ぎません。もちろん親身になってくれる人が多いはずですが、人間的な心のふれあいなどをあまり期待しすぎたら、がっかりすることになりかねません。人間というものは、誰かと心がつながっている、精神的な支えになってくれる人がいる、と実感できるときに、生きている喜びや幸せをかみしめることができるのです。専門的なアドバイスや、育児のヒントをもらったくらいでは、その場しのぎと言っては失礼ですが実際はその程度の効果しかないと言えます。

お母さんはすでに、骨身を削る思いで赤ちゃんのお世話をしています。とくに、母乳で育てるというのは、まさにわれとわが身を赤ちゃんに与えているわけです。そうしたお母さんと赤ちゃんに対して、お父さんは、おのれを捨てた愛情を注ぐ覚悟をもたなければなりません。

#### おのれを捨てる

「おのれを捨てる」とは、自分の都合は引っ込め、相手を優先してあげることです。あらゆる生き物の中で、人間だけが、意識してその気持ちを表せることは、すでにお話ししました。その心こそが、まさに人間の間人たるゆえんと言えるのです。ただ、お父さんもお母さんも、人によって程度の差があるとは言え、自分自身が成長する道のりを通じて、自分を優先し、自分を主張しようとする心を、かなり大きくふくらませてきています。しかし、わが子に恵まれることで、初めてと言っていいほど、「自」の心が非常に大きく制

限されることとなります。それは、かなりきびしい経験には違いありませんが、同時に、うすれかけた人間らしさをはっきり取り戻すことができる、最高の機会でもあるのです。

お母さんは、極端に言えばいやおうなしに、その世界に引きずり込まれます。たいていのお母さんは、出産後しばらくの間、赤ちゃんのことがかわいいと感じたり、子育ての楽しさにひたったりするゆとりは、ほとんどもてないのではないのでしょうか。でも、お母さんたちは、疲労と闘い、睡眠不足をこらえ、歯を食いしばって、赤ちゃんのお世話を続けます。そのことで、お母さんは、あらためて人間らしさを取り戻していくのです。

お父さんは、この世界にお母さんをひとりぼっちにははいけません。自ら進んでここに飛び込み、お母さんと苦勞をともにする覚悟が必要です。それは、お母さんや赤ちゃんのためなのですが、めぐりめぐって自分自身のためにもなるのです。自分のためとは、得るとか、楽しめるといレベルを超えて、本当に人間らしい人間になっていけること、と言えるでしょう。

このように、赤ちゃんは、ただそこにいるだけで、お母さんとお父さんを、すばらしい人間性へ高めていってくれます。ですから、親が赤ちゃんを育てることは、親自身が、赤ちゃんによって育てられていることでもあるのです。親ふたりが、このことに感謝の気持ちをもてるなら、その家族はどれほどの幸せに恵まれることでしょうか。

赤ちゃんは、お父さん、お母さんからの献身的なお世話を受けることによって、自分がかげがえのない存在として、この上なく大切にされていることを、身をもって感じ取ります。そして、親を信じる気持ちとともに、自分自身を信頼する気持ちを、はぐくんでいくのです。

1歳くらいまでは、親は何があろうとも、決して赤ちゃんに怒ったり、腹を立てたりしてはいけません。罰を与えたり、叩いたりするなど、もってのほかです。赤ちゃんは、大人たちに、本当の人間らしさを教え、与えてくれる存在なのです。大人が気分や機嫌に左右され、赤ちゃんを大人の都合に当てはめようとしてはなりません。どこまでも、大人が赤ちゃんにあわせてあげなければならないのです。

大人は、どうしても、自分の好みや損得を優先して行動してしまいがちです。相手を、自分にあわせようとするのです。それができないと、怒ったり、悲しんだりします。赤ちゃんには、そういうところがまったくありません。他人を思い通りにしようとして、わがままを言ったりはしないのです。ただ、ひたすらに生きようとし、くもりのないまっすぐな心を、誰に対してもわけへだてなく向けているだけです。自分の欲求が満たされないと、

泣いてそのことを訴えますが、それが満たされれば、すぐにご機嫌になります。文句を言ったり、愚痴をこぼしたりしませんし、人を恨んだり、憎んだりすることはありません。そこには、雑念や執着、こだわりというものが、いっさいないのです。ある意味で、大人がとうてい及ばない境地にいますと言えます。

大人は、このことをしっかりと自覚し、どこまでも限りない愛情を赤ちゃんに注ぎ、献身的にお世話をすべきなのです。

#### 幼児期後半(幼稚園のころ、第1次反抗期)

手をかけず、目をかける

このころには、もう大人と同レベルに近い会話が成り立つようになります。運動能力が伸び、友だちもたくさんできて、行動範囲がとて広がります。そうすると、自分を守ってくれた親から、離れたくなってきます。一人で、冒険がしたくなってくるのです。

お父さん、お母さんは、そういう子どもの気持ちをくみ取り、認めて、子どもが「やってみたい」と思うことを、たっぷりとさせてあげることが大切です。そのときに、あちらこちらと元気に飛び回る子どもに引きずられて、しびしびついていくようでは、親として少々頼りないと言わねばならないでしょう。お父さん、お母さんには、自分の手のひらの中で孫悟空を遊ばせた、お釈迦様のようになってもらいたいものです。

放っているようで、子どもの行動と気持ちをちゃんとつかんでいる、見ていないようで、実はしっかり見つめている、こうした親の姿勢に守られてこそ、子どもは其中で思う存分に自分の力を試すことができます。

子どもがこのころから親の手を離れるようになったからと言って、親は楽をできるようになるかと言うと、そんなことはありません。むしろ少し離れたところから見守っていない分、それまでより面倒になる場合もあります。

最近はこの距離のとり方が難しく、親子の間にいろいろな問題が起きることが多いようです。パターンはだいたいふたつに分けられます。

ひとつめ。子どもが親から離れ始めたのをいいことに、ほとんど放任、または無関心になってしまうこと。いい例、いや悪い例が、親がパチンコや買い物など、自分たちの楽しみを優先して子どもを放ったらかしにし、死なせてしまったりすることです。

ふたつめ。親が子供への干渉をやめられず、やることなすこといちいち口出しをしたり、実際に手を出したりして、子どもの意欲や主体性をそいでしまうこと。いわゆる過保護・過干渉です。これには、子どもを愛するあまりにそうになってしまう、という見方があるかも知れません。しかし、この場合、親は子どもが自分の思い通りにならなければ気がすまず、それはつまり子どもを愛しているようでありながら、子どもを通して自分自身を愛しているわけです。本当に子どもへの愛があれば、距離をおいて、じっと見守ることができるはずです。

子どもの成長に応じて、すべてを受け入れてひたすらにお世話をしたり、少しずつ距離をおいたり、親の態度は変わっていきます。しかし、その基本に、限りない愛情があるということは、変わりません。

その愛は、まず、子どもを自分とは離れた存在として、客観的に見られるものである必要があります。そして、そうではありながらも、決して子どもによそよそしくしたり、冷たくしたりするのではなく、どこまでもあたたかく包み込んであげられるものであってほしいのです。深い愛があるならば、両方の姿勢が、ごく自然にひとつになって、子どもに注がれます。

#### 気持ちを満たしてやる大切さ

反抗期と言えども、まだまだ幼い子どもたちです。手のひらを返したように、親に甘えかかってくることもあります。そんなとき、「もう大きいんだから、ベタベタしないで」、「いつもは自分でするって言うくせに、どうしていまだけ人にやらせるの」などと、あからさまに拒絶されては、子どもの心は行き場を失ってしまいます。全面的に親に頼りたいわけではないのです。ほんのちょっとだけ親のふところに帰ってきて、甘えてみて、愛情を確認したいのです。ですから、親の方も、ほんの少し、それにこたえてあげればいいのです。それだけで、子どもの心は満たされ、安心して、再び自分の力で歩み始めます。

お母さんによっては、下の子のお世話で手一杯だったり、中には、体の大きくなった子に近寄られると「気持ち悪い」と言って、イライラしたり、うんざりしたりする人も多いようです。繰り返しますが、ほんの少しでいいのです。ほんの少しだけ時間をとって、ほんの少しだけイライラやうんざりを我慢して、その子のために愛情を示してあげてほしいのです。自分の気持ちを抑え、子どものために「フリ」をしてあげることも、愛なのです。もっとも、本当に深い愛をもっている人ならば、決して「フリ」ではなく、本心から愛情



を示してあげることができるでしょうが、それはとても難しいことです。

#### 青年期(中学生ころから、第二次反抗期)

##### 心の成長の締めくくり

この時期にいたるまでに、子どもたちは、統制が大切な時期を3回、自由が大切な時期を2回、通ってきています。そして、青年期を最後にして、子どもたちは大人への仲間入りをしていきます。心の成長の締めくくりとして、きわめて重要な時期と言えます。

ここまでに、統制と自由をバランスよく経験してきていないと、実にさまざまな、しかも深刻な問題が噴き出していきます。

##### 人を信じられない

愛のある統制を受けてこなかった子どもたちは、どうなるでしょうか。一番怖いのは、人を信じられなくなっていることです。信じる者は、自分しかいません。自分しか信じられないというのは、絶望的な孤独です。その孤独は、自分の命すらおびやかします。子どもは、その恐怖と苦痛から逃れるために、閉じこもる殻を厚く、固くします。

人は、誰でも、何かを頼りにしなければ生きていけません。一番幸せなのは、他者を頼りにできることです。3歳くらいまでの子どもは、100%、親に頼りきり、信じきっています。ですから、そうした子どもたちに不安感や孤独感はありません。過去や未来について、クヨクヨと思い悩むこともありません。いま現在が幸せであれば、それが生きることのすべてなのです。

しかし、人は成長すると、次第に他人よりも自分を頼みとするようになります。そこから苦悩が始まってくるのです。自分がすべてになってしまうと、それでいいのだと思いたくても、不安や疑問がどうしても湧いてきます。幼い子のように、自分へのこだわりや執着がなく、人に心を開いていれば、それが幸せへの近道なのですが、なかなかそれができません。

頼るものが自分しかないという孤独をまぎらわす方法を、子どもたちはいろいろに求めます。それは、お金であったり、食べ物であったり、持ち物であったりします。お酒やたばこ、もっとひどい場合には薬物(睡眠薬や向精神薬、シンナー、覚醒剤、大麻、コカイン)

ンなど)になることもあります。

それから、勉強をしていい成績をとるのは、人より優位に立ちたいという目的のためだけになる場合があります。勉強以外にも、格闘技を身につけたり、もっと困るのはナイフなどの武器を持ったりして、何でもいいから人に勝つことを求める傾向があります。

また、携帯電話を持ったり、インターネットに没頭したりするのは、自分は心を開かなくても、機械が代わりをしてくれるので、非常に都合がいいわけです。人とつながっているように見えて、一人ひとりの世界は、非常に固く閉ざされています。

しかし、こうしたことによっても、根源的な孤独感はつもの一方になります。そのうちに、自分以外の人間はみな、自分の世界をおびやかす「敵」になってしまう場合があります。こうした精神状態が頂点に達し、爆発すると、暴力や殺人になったりします。近年、少年による凶悪な殺人事件が多発し、それらが報道される中で、「どうしてこのような事件が起きるのか理解しがたい」とか「誰でもそういう事件を起こす可能性をもっている」、または「子どもの『個』や『自我』が確立していないのが原因だ」、などというコメントが述べられることがあります。どれも、まったくの間違いとは言いませんが、専門家の意見としてはあまりにも浅すぎるように感じられます。こんなことがいくら言われても、多くの親や子は、ますます混乱するか、よけいに不安をかき立てられるか、事態がますます悪化するかで、何ら建設的な解決策になるわけではありません。根本的な原因は、自分以外の他者を信じられず、頼りにもできず、心を開けないところにあると言えます。何より大切なのは、大人と子どもたちとの間に、愛と信頼を取り戻すことです。

#### 夢や希望がない

また、一方、愛のある自由を経験してこなかった子どもたちは、どうなると考えられるでしょうか。こうした子たちは、自分は何をしたいのか、どうなりたいのか、といった思いを、生き生きともつことができません。周りが自分をどう評価するのかということだけが気になって、将来に向けての夢や希望が、なかなかもてないのです。自分という存在が、次第にまわりから圧迫され、息苦しさを覚えるようになります。しかし、抜け道を見いだすことができません。そのような状態が何年も続き、最悪の事態に至ると、周囲から押しつぶされる形で、自殺することも起きてしまいます。

## 理解と手本

小学生のころまでに、精神が健康に育ってきていないと、この青年期になってからでは心の成長のゆがみや遅れを取り戻すのは、かなり難しくなってしまいます。現に、いまの若者たちの姿を思い起こしてもらえれば、そのことがよくお分かりいただけるのではないのでしょうか。

この時期の子どもたちに必要なのは、あれやこれやと、手出し、口出しすることではありません。まずは、親や大人たちが、子どものよき理解者になってあげることです。それは単に子どものご機嫌をとり、子どもに迎合することではありません。あたたかい理解を示した上で、大人は、多くを語らずに、子どもたちのお手本、モデルになるような姿を、見せるのです。

先日、筆者の一人である小川が行きつけの床屋さんに行ったら、それまではいなかった若者が、新たに入っており、慣れない手つきで懸命に洗髪などの仕事をしていました。聞けば、床屋のご主人の息子さんだったのです。ご主人は、「オレもとうとう息子と一緒に働くようになったよ、何だか変な感じだね、やりにくくてさ」、などと照れて言いながらも、だいぶうれしそうでした。お店で実務経験を積みながら、通信教育で資格を取る勉強をしている、とのことでした。

自営業の方は、自分の働く姿を、幼いころから子どもに見せ続けてこられる、という良さをおもちです。仕事とは、働いてお金をもらえることはもちろん大切ですが、それ以上に、人さまのために働き、人さまに喜んでもらえる、人さまの役に立てる、というのが、本質ではないでしょうか。仕事のやりがいとか、生きがいといったものは、人とのつながりやふれあいを通じて感じられるものだと思うのです。

こうしたことは、口で言うだけではなかなかわかりません。やはり、そういう姿にいつも接していて、知らず知らずのうちに身に付いてくるものです。

もう言いましたように、小学生のころは、子どもの気持ちが高者や大人の方に向いていきますから、大人の強いリードがあっても、子どもはよく付きしがいます。お手伝いを、少々きびしく仕込んでも、がんばって身につけます。

しかし、続く青年期に入ると、まったく同じやり方では、難しくなります。多くの子どもは、大人に反発し、攻撃的になり、「ほっといてほしい」と訴えます。大人としては、広い心で子どもをゆったりと受け止め、温かく見守ってあげたいものです。少々のことには動ぜず、振り回されず、その上で、自分自身のなすべきことに、ひたすら取り組んでい

く姿を子どもに見せるのです。

こうして、子どもたちは、自分の進みたい道、自分のなすべきことを、自分自身で決めることができるのです。

ここでも、親や学校の先生といった大人たちに求められるのは、自分を抑え、ひたすら他者のために尽くす姿勢です。それが、世の中に向かえば、子どもたちにとってのすばらしいモデルになるでしょうし、子どもたちに向かえば、無言のうちの、深い愛情表現となることでしょう。

### 「自分らしさ」の追求

しばらく前から、世間では、「自分らしさ」とか、「自分で自分を好きになる」とか、「自己実現」などということばが、よく聞かれるようになりました。かつてオリンピックに出場した女子マラソンの選手のことば、「自分で自分をほめたい」は、その年の流行語になりました。

バブル経済が崩壊したあと、日本社会はきわめて長い不景気の底に沈み、多くの人々は予想もしなかった苦しさの中でじっと耐えなければなりませんでした。もっとも、その苦しさも、戦時中や、現在でも内戦の続く国での避難民生活に比べれば、まったく比較になりませんが。

いずれにせよ、こうした社会情勢は、日本人の心のあり方に、かなり影響を及ぼしたようです。日本人は、戦後になって、アメリカやヨーロッパから民主主義を緊急輸入して以来、他者を大切にする心より、自分を優先する心ばかりを大きくふくらませてきました。昭和30年代に始まった、高度経済成長のころは、この「自」の心が絶好調でした。多くの人が、立身出世を目指して「モーレツ」に働きました。「会社人間」「モーレツ社員」とは、おのれ自身や家族を犠牲にしてまでも、企業のためにすべてをささげる人につけられたあだ名ですが、その場合、モーレツ社員は、自分より他者を優先していたとは言えません。そうした人にとって、企業の巨大化は、自分自身の巨大化であったのです。自分と会社を同一視していたのです。どこまでも、「自」の心が優先されていたと言えます（ただ、いまのように、夢も希望も失われた世の中に比べれば、活気があっただけでも、かなりましだったと思えますが）。

そんな、右肩上がりの経済成長も、昭和50年代に入ると、ほぼ横ばい状態になります。そして、もの作り（農業や製造業）、勤勉さ、モーレツなどは、だんだん価値を失ってき

ました。その代わり、どれだけ少ない労力で、多くの金を稼ぐか、これが仕事の善し悪しを決めるようになりました。これが、バブル経済期の社会を支配していた基本的な価値基準です。

そのバブルが去ったあと、いくらいい大学を出ても、大企業に就職できても、リストラにあったり、会社が倒産したりすることが、しょっちゅう起こるようになりました。一時期、リストラを苦しめた自殺が、たいへん大きな社会問題として騒がれました。また、日本を代表するような大企業が一夜にしてつぶれたり、きわめて重大な経営危機に陥って、ほかの会社や海外資本に身売りしたりするニュースは、いくつもの例をあげることができます。

そういう中で、会社と運命をともにしないために何をどうするか、ということが大問題となります。まずは、自分以外のものを（人でも会社でも）、かんたんに信じたり頼ったりしてはならないと言われます。世はサバイバルの時代、自己責任の時代です。そのため、小学校、あるいは幼稚園のうちから、何でも自分で確かめて、自分で判断することが求められます。

それから、「がんばれば、必ず努力は報われる」というような、甘い期待と言いますか、幻想と言いますか、そういうものは捨てなさい、と言われます。「そんなウソを子どもに教えるな」と、極端に言う人もいます。実現できるかどうかわからない夢や希望に浮かされるより、斜に構えて、冷めた目で世の中を見つめられることが「たくましさ」であると考えられる傾向もあります。

そして、結局は、「自分」というものを強く、確かにもたないと、これからの時代は生きていけないと考えられています。どこかが人よりすぐれていたり、一芸に秀でていたりして、自分を売り込めるセールスポイントを身につける、ということが言われます。それから、自分の幸せは自分にしかわからないのだから、自分で自分に納得できて、満足できれば、それでいいじゃないか、とも考えられています。給料が上がったり、出世したりしたって、それが何だって言うんだ、という、一種の開き直りです。そんな外部的な評価より、自分で自分に満足しているか、自分のことを自分で愛しているか、こういうことの方が、はるかに大事だろうというわけです。

働かない若者、勉強しない子ども

こんな風潮が反映しているのだと思いますが、しばらく前の文部省の調査では、大学卒

業者の2割強、つまり5人にひとり以上は、就職も進学もしない「無業者」になっていることが明らかになりました。細かく分析したところ、「就職したくともできない」人がいることは確かですが、それだけではなく、アルバイトなどで暮らすフリーターに聞いたところ、「はじめから正社員になるつもりはなかった」と答えた人が、かなりの数に上ったそうです。

ついでに紹介しますと、同じ文部省の調査でわかったことに、不登校の小中学生は、その数を年ごとに記録更新し続け、8年ほどで約2倍にふくれあがったことがあります。2000（平成12）年発表の結果では、全国の不登校の子どもは、13万人を超えました。割合を単純計算すると、小学校ではだいたい300人にひとり、中学校では40人にひとりとなるそうです。ずっと前は、不登校と言えば「学校に行きたくても行けない」、「行かなければならないことは分かっている、体が言うことを聞かない」、このように悩む子どもがほとんどでした。いまは、どちらかと言うとそうではありません。学校へ行かないことは、子ども自らが主体的に選んだ道であって、何ら悩むべきことでも、恥ずべきことでもない、このような考え方が主流になりつつあります。

こうした状況をはやりのことばで言えば、多くの若者が「自分探しの旅」をしているのです。それは悪いことではありません。しかし、旅には、適切な道案内や、地図が必要です。そうでなければ、ただあてもなくさまよって、ことばは悪いですが、結局野垂れ死に、ということになりかねません。

いまの世間の状態は、やる気も目的も失った若者がフラフラしているのを、大人たちがご機嫌をとってせっせと養ってあげているというところではないでしょうか。

若者たちの一番身近な案内役は、やはり親でしょう。この場合、旅の主役は、あくまでも若者たち自身です。人生という道のりを、一步一步、自分の足で踏みしめながら進んでいかなければなりません。親がおんぶしてあげたり、車に乗せてあげたりすることはできませんし、してはならないのです。親にできることは、若者たちが歩いて行くその先を、確かな足取りで歩いてみせることです。子どもが途方にくれて立ちすくんでいたり、助けを求めてきたりすれば、直接手を貸すこともあるでしょうが、そうでなければ、つかず離れずの距離をたもって、力強く進んでいくのです。

子どもは、そうした親の姿を見て、どこへ進んでいくべきか、何をなすべきか、何になるべきか、などを、自分の力で決めていくことができるのです。

成長の道すじを見通して

こうしたことを、青年期になっていきなり始めても、それは無理というものです。やはり、生まれてから育ってくる長い成長の中で、深い愛に支えられた、統制と自由のバランスが大切です。

前にもふれましたが、青年期にまで、心の成長に問題を持ち越してくると、そこから立ち直るのはかなり困難です。そう考えますと、児童期、つまり小学生の時代に、健全な精神を育てておくことが大切であるし、幼児期に少々の問題が見られても、小学生のうちにゆがみを直したり、遅れを取り戻したりすることは、まだまだ可能と言えるのです。もちろん、それなりの難しさがあることは、付け加えなければなりません。

幼いころ、かなりきつい統制を受けてきた子どもは、小学生になっても、「自分」というものをしっかりとてず、大人の顔色や、「自分は人からどう思われているか」という外からの評価ばかりを気にするようになるかもしれません。そして、自分は何をしたいのか、何をすべきなのかを自分で決められず、いつでも大人の指図を当てにすることが多くなります。そのように、大人に頼りたがる場合には、ゆったりと受け止めてその心を満たしてやり、望ましい価値を実現できるように励ましてあげます。

反対に、自由放任、早い話がほったらかしで育てられた子どもは、何でも自分でしたがったり、人のアドバイスや注意には耳を傾けないという、第一次反抗期の特徴のようなものを引きずってくるかもしれません。その場合には、大人は子どものわがままにつきあわせれるのではなく、一段高いところからその自由を認めてあげ、自分の意志で行動し、結果に満足や喜びを味わえるところまで見守り、援助してあげます。

このように、大人が柔軟に接してあげることで、子どもの中に、自分を信じる気持ちも、他者を信じる気持ちも、自律性も、主体性も、能動性も育っていくのです。

心の成長には、大人が愛をもって接すれば、無理やりに引っ張ったり、型にはめ込もうとしたりしなくても、自然とバランスがとれていくという、自然の道すじがあります。その道すじを進んでいくエネルギーを心に与えるのが、無限の愛なのです。子どもを愛するとは、子どもの成長を信じて、親自身の都合や欲、こだわりを捨て、ひたすら子どもにつくすことです。それが基本となり、あるときには力強くきびしいリードになるでしょうし、またあるときにはあたたかな後押しになるのです。

## 子どもの心に育てたいこと

「トップランナー」を目指すのか

無限の愛に支えられた統制と自由を、子どもに与えること、その大切さをお話ししてきたのですが、親はいったい、子どものどんな姿を目指して、子育てに力を注いだらいいのでしょうか。これからしばらく、教育の話題が続きますが、学校教育と子育ては、切り離せないものです。

故・小渕恵三総理大臣が、亡くなる少し前に、「教育改革国民会議」というものを発足させました。審議が始まったと思ったら、首相が急逝してしまったので、この会議は、次の森首相に引き継がれましたが、どことなくゴタゴタ、フワフワした会議というイメージがあるように見えます。

しかし、教育問題が世の中の関心を集め続けていることは、確かです。いま、日本人は、教育に何を期待しているのでしょうか。「国民会議」の座長、江崎玲於奈氏（「エサキダイオード」を発明者で、ノーベル賞受賞者）が、座長になったときに方針として語ったのは、「これからの日本人を、世界のトップランナーに育てなければならない」ということでした。

昔から、日本人は、人まねはとても上手だけれど、自分で新しく何かを作り出す「獨創性」「オリジナリティ」ということになると、だいが苦手である、と、こんなふうに言われています。

ところが、現代は、科学技術が非常に成熟しましたし、日本はいまや世界トップの経済大国ですから、どこかにお手本を見つけて、一生懸命にそのまねをすればいいというわけにはいかなくなってきました。そんなことをしていると、いつ他の国に追い抜かれるか、わかったものではない、こういう危機感が、政治家や財界人の間に高まっているのです。

そこで、「日本人はいつまでもセカンドランナーで満足してはいけぬ。これからは、日本こそが世界のトップランナーになって、他の国々をリードしていくべきである」という意見が、切実に出されるようになったのです。世界のトップランナーになるとは、現実的に言い換えれば、アメリカを追い抜くということでしょう。

## 世界を変える IT と遺伝子

いま、世界の文明には、ふたつの大きな流れが見られます。ひとつは、コンピューター



の急速な進歩による「IT（情報技術）革命」です。もうひとつは、遺伝子の研究です。

このふたつの流れを制するならば、まさに巨万の富を手にすることができます。ITと遺伝子は、いままで人類が築いてきた文化をぜんぶ足しても追いつかないほどの、宝の山であると言えます。その宝の山の、頂上に一番近いところにいるのが、アメリカです。ヨーロッパは、いくつかの国でチームを組んで、何とかアメリカに追いつこうとしています。中国やロシアも、虎視眈々と機会を狙っています。日本も、こういう激しい国際競争の中に、身を置いているのです。

そういうわけで、政治家や財界人からの、教育に対する注文は、日に日に厳しくなってきました。ところが、20年くらい前から、学校教育現場にゆとりがなくなって、子どもが窒息しそうになっているという反省があり、学校の授業で教える内容は、どんどん減らされてきました。そして、自分で問題を見つけ、自分でそれを解くことが大切だということが言われ、知識の量などはどうでもいいのだと言われて今日に至っているのです。

しかし、これもなかなかうまくいかないわけで、そんなことばかり言っているから、見る、子どもがちっとも勉強しないじゃないか、という問題が出てきます。よく話題になるのは、大学に入ったはいいいけれど、講義についていけなくて、予備校の先生が補習をしてくれるなんていうことがあります。浪人中だけでなく、大学生になっても、予備校の先生にお世話になるわけです。また、医学部の学生が、生物を受験科目に選ばなくていいのはおかしいじゃないか、などということもあります。将来、人間の命を預かるのに、生き物の体の仕組みを知らなくてどうするんだ、というのです。もっともな話です。

それでもとにかく、知識を教え込むだけの教育ではダメだ、この点では、ほとんどの人の意見が一致しています。そこで、とくに最近では、「個」に応じた教育の大切さが強調されています。それはつまり、できる子には、より高度な教育を、できない子には、そこそこの内容を施せということです。もっとも、できない子のことはあまりかえりみられていません。極端に言ってしまうと、できる子の足を引っ張るな、エリート教育をためらうなということです。

「みんな同じはダメ」

日本人は、みんな同じ、みんな仲良しが大好きな国民だと言われます。そして、だから日本人はダメなんだと言われており、「みんな同じ」は、とても軽蔑され、嫌われています。その考えが、教育にもだんだん影響を及ぼしているのです。

たとえば、よく言われるものに、運動会のかけっこの話があります。「よーい、ドン」でスタートすると、当たり前ですが速い子と遅い子では差がつきます。そこで、ゴールの手前で先生が手を広げて待ちかまえており、いったんみんなを止めて、手をつないでゴールテープを切らせる、それで、足の速い子は遅い子への思いやりをもつようになり、遅い子は、遅いなりに自分もテープを切れたんだという満足感をもてる、こういう解説がつきます。

「個」に応じた教育を、と叫ぶ人たちは、このようなことに対して怒りを爆発させるのです。学校ってというのは、何とくだらないことをするのだ(たしかにくだらないと言えますが)、足の速い子の、やる気や勝つ喜びをどうしてくれる、子どもの能力を伸ばすのが学校の役割のはずなのに、できるだけそれを潰すように教育するなんて、バカバカしいにもほどがある、実社会や人生は、すべてが競争なのだ、その現実の厳しさを早いうちに教えるのも、教育の大切な役目ではないのか……。あまりの激しさに、かけっこ嫌いの先生が多い学校では、かけっこを運動会のプログラムからはずしてしまう、という最終手段がとられることになります。幼稚園でも、かけっこをやめたら親が怒って独自の運動会を企画し、間に立った教育委員会がほとんど困り果てたのがニュースになりました。

実際、生きることは競争だ、と主張する人は、とてもたくさんいます。ほとんどの人が、そう考えているのではないのでしょうか。人間関係は競争だし、国と国も競争する、だから、人との競争で勝ち残った人間が国をリードし、国家間の競争にも打ち勝てるようにする、そうすれば国が豊かになり、一人ひとりの幸せもそこで保障されることになる、だから教育で競争の大切さと厳しさを教えなければならない、と、こんなところでしょう。

教育に競争原理が持ち込まれると、「みんな同じ」「みんな一緒」という考え方は、一番じゃまになります。勝てる子どもは、どんどん勝ち残らせて、ますます力をつけさせなければなりません。負けていく子どもに対しては、あまり人権を無視するようなこともできませんし、大器晩成・敗者復活の可能性もありますから、リターンマッチの機会を多くすることが求められます。どうしても落ちこぼれていく子どもに対しては、必要最小限度の処遇が検討されます。

あまり過激に能力別のクラス分けをすると「差別だ云々」という批判が起きますから、いちおうは、飛び級とか飛び入学といった、わりと穏当で誰もが納得しやすい手段から始まっています。そのうち徐々に激しいものに移っていくのではないのでしょうか。ボヤボヤしていると、いままで発展途上国だとタカをくくっていた国に、さっさと抜かれることも

十分にあり得ますから、いま、日本のリーダーシップをとっている人々は、内心ジリジリと焦っていることだろうと思います。しかし、そうした人々の願いや焦りが高まるのと反比例するように、日本の若者達がますますグータラになっていくように見えるのは皮肉なことです。

「できる」人間が「善い」人間なのか

人間としての価値が、能力が高いか、競争に勝てるか、人の上に立てるか、すべてこういう視点で判断されています。この傾向は、今後ますます高まるでしょう。そのことで、人々は幸せになるでしょうか。世界は平和になるでしょうか。私たちは、逆に、ますます不幸になるし、暴動や戦争が起きる可能性も高くなると考えています。

勉強をして、本を読んで、知識をたくさん身につけ、教養や能力が高まれば、それにつれて当然人間性も豊かになると、多くの人が思っていることでしょう。政治家は、私腹を肥やすために、国会でウソの答弁をするは、業者からワイロをもらうは、自分の悪事を秘書にかぶせるは、そんな人が多すぎますので、国民からだいが信頼も、期待もされなくなってきています。東大でも京大でも早稲田でも慶応でも、どんな一流大学の卒業でも、政治家ならば、どこかにダーティな部分を感じさせるように思えます。

それに比べて、たとえば医者とか、弁護士とか、大学教授とかの、知識や教養が豊かな人は、人間的にもすぐれていると、いまでもわりあい信じられているのではないのでしょうか。ドラマや小説には、こういう職業の極悪人がよく出てきますが、それはオハナシだからであって、勉強ができて頭もいい人は、やっぱり人柄もそれなりだと、ふつうには思われているでしょう。しかし、それが間違いなのです。別に医者や大学教授がみな悪人だと言うものではありません。それより大事なものは、いくら知識が豊富でも、教養が高くても、能力があっても、そのことで人間の価値が高まることは決してない、ということです。

知識や教養や能力など、人間の本当の価値にとっては、オマケみたいなものです。いや、オマケじゃ良すぎるのであって、オデキみたいなものと言った方がいいでしょうか。ちょっとしたオデキならば、放っておいても命に別状はないし、そのうちに消えてなくなるかも知れません。いずれにせよあるよりはいい方がいいものです。

しかし、そのオデキをいじくり回し、刺激していると、どんどん腫れあがってきます。熱をもち、膿を出し、体を苦しめます。もっと恐ろしいのは、悪性化して、癌になってしまふことです。癌はキバをむき出して、体を冒し始めます。こうなると、もはや最初のよ

うな健康体に戻ることは、そうとう難しくなってしまいます。目に見えない、たとえ話の癌ですから、切り取るにも簡単にはできません。さらにこの癌のやっかいなところは、その人を死に至らしめるだけでなく、まわりの人を巻き添えにすることです。

このたとえ話が当てはまる人は、いくらでもいます。比較的新しい記憶としてあげられるのは、オウム真理教の一連の事件で、超がつくほどのエリートだった人たちが、バカげた教義を信じ、多くの罪のない人々の命を奪ったことです。あのとき、日本中の人々が、「あんな立派な人たちが、どうして!？」と驚愕しました。この犯人たちは、きっと、子どものころから知識をたくさん身につけ、能力を発揮してきたことでしょう。そして、日本でも最高と言われる大学を出て、誰もがうらやむ職業に就いたわけです。しかし、そのことで、人間としての価値が高まることはまったくありませんでした。それどころか、その知識と能力がいつのまにか癌となり、オウムの教義に刺激されて病巣はますますふくれあがりました。そして、それが爆発したときには毒をまき散らして、多くの人々を殺してしまったのです。

#### 知識も能力もいらない

はっきり言いますと、知識や能力など、なくていいのです。その方がずっと人間らしさが豊かになりますし、本当の幸せに近づけます。しかし、私たち現代人は、好むと好まざるとに関わらず、ある程度の知識や能力を身につけてしまいます。そうしたものを、もっとも身につけさせようとする、いまの教育の方針は、極端な話かもしれませんが殺人的行為であり、自ら望むのは自殺行為であると言えます。私たちは、知識や能力をつければつけるほど、今度はそれを捨てる努力をしなければなりません。そこにしか、生きる喜びや幸せを見いだすことはできないと言えるのです。

いつでしたか、しばらく前に、こんなことがありました。私たち二人がある私鉄の駅前に行ったときのこと、大勢の人たちがチラシと花の種を配っているところに出くわしました。

聞いてみると、地域の行政センターが主催して、青少年の非行や薬物乱用を防止するキャンペーンがあり、その一環でそうした奉仕活動をしているとのことでした。

その人たちは改札口に陣取って、お客さんが通るのを待ちかまえていました。夏の暑い日のことで、西日が容赦なく照りつけていました。1枚でも多く配るために、夕方のラッシュ時におこなっていたのです。

列車が着くと、あふれんばかりの人が改札口から流れ出てきました。「お願いしまーす」「お願いしまーす」、腕章をつけた彼らは口々に叫んで、人の流れに逆らうようにチラシと花の種を差し出していました。

そういうときの人々の反応は、だいたいご想像できると思います。ある人は迷惑そうに顔をしかめ、ある人は眉ひとつ動かさず、無言で通り過ぎます。チラシを配っている人と目も合わせません。受け取る人は4割くらいでしょうか、半数もいなかったと思います。きわめてまれですが、足を止め、「ご苦労様」と、ていねいに受け取ってくれる人もいて、見ている私たちもほっとしました。たいていがおばあさんでした。

そんな中、改札口から、中年の、ダウン症の方が出てきました。やはり仕事の帰りのようで、シャツのボタンをきっちりと上まで留め、野球帽をかぶり、リュックをしょって、忙しそうに歩いてきました。ダウン症についてのくわしいお話は、ここでは省略します。

その方は、額に汗をにじませて、足早に改札を通り抜けて来ました。私たちから少し離れて配っていた人が、その方の前にも「お願いしまーす」と、チラシを差し出しました。その方は、びっくりしたような表情を浮かべ、足を止めました。配っていたのは小学校の教員だったので、すぐにダウン症の方だとわかったらしく、説明を始めました。

「あのね、犯罪防止のキャンペーンなんです。この中にお花の種が入ってますから、どうぞ、お持ち帰りになって、まいてください」

説明を聞くうちに、その方は、みるみる笑顔になりました。そして、帽子を取り、大切そうにチラシと種を押し頂くと、何度も何度も頭を下げ、ニコニコしながら歩み去っていききました。

私たちは、少し足を止め、この一部始終を見ていましたが、とても心を打たれました。ほとんどの人が、無表情、ひどいときはあからさまに迷惑そうな顔で、受け取るのはまだマシな方、中には配る人の手を払いのけるようにして去っていく人すらいます。そんな中、全身で感謝を表して、心から「ありがたい」といった受け取り方をしている人がいたので

す。

ダウン症には、ご存知の方も多いでしょうが、知的障害があらわれます。ですから、私たちのこんな体験談を聞いても、「知恵遅れだから、何が起こったのか、よくわからなかったんだろう。もらえるものは、何でもうれしいんじゃないか」と感じる方もいるかもしれません。たしかに、ちょっとくらいは当たっているとも言えます。知的障害がある、ということは、知識や能力があまり（場合によってはほとんど）身に付かないことです。

## 心の汚れ

しかし、余分な知識や能力で「汚されて」いない分、その人は人間として、本当に美しい、清らかな心を持ち続けていられるのです。たいていの人は、「忙しいのに、つき合ってもらえるか」「いらんよ、こんなつまらんもの」「暑いのにご苦労なこった」「何になるの、こんなことして」などなど、いろいろなことを考えます。知識や能力があるからです。そして、それが実は非人間的な傲慢さであることに気づかずにいます。

しかし、知的障害がある方は、そうではありません。目の前に、自分のためにものを差し出してくれる人がいる、そのことだけで、幸せを感じられるのです。「この人は何者だろう」「何をくれるんだろう」など、少しは考えるでしょうけれど、いわゆる「健常」な人ほどは「余計なこと」に思いをめぐらしません。チラシを配る方としては、役割だから仕方なく、半分イヤイヤやっているのですが（そうでない人もいるかもしれませんが）、相手の方は心から「ありがたい、ありがたい」と受け取ってくれるのです。まったく心が汚れていません。

苦虫をかみつぶしたような顔で立ち去る人と、喜んで受け取ってくれる人と、果たしてどちらが幸せなのでしょう。どちらが人間として上等なのでしょう。私たちは、知的障害のある方のほうが、はるかにそうだと言いたいのです。

私たちが、本当に幸せに、平和に生きていくためには、このような人たちこそを、お手本にしていかなければなりません。知識が豊かで、能力が高ければ、便利な、そして快適な生活が手に入れます。人より優れていれば、より多くのお金を稼ぐことができます。多くの場合、そうしたことを目指して、せっせと教育に励むわけでしょう。

しかし、便利な生活をすればするほど、現状では我慢できなくなってしまいます。欲望にはキリがありません。新たな欲望を満たすためには、もっとたくさんのお金が必要で、そのお金を稼ぎ出すためには、それまで以上に知識と能力を高めなければならないことになります。こうなってくると、人としての価値とか、人格とか、人柄とかは、どうでも良くなってきました。欲望を満たせる人間になるために、勉強をするようなものです。

それから、人生を競争と思うことは、当たり前ですが、自分以外の人間はすべて敵と見なすことです。駅前でのんきにチラシなんて受け取っているヒマがあったら、一步でも人より先に行くことを考えなくてはならないのです。こんなことばかり教えられ続け、考え続けている人が、どうして人に優しくしたり、思いやりをもったりできるのでしょうか。知識や能力が高まることは、人間性を失っていく危険性が高まることと、隣り合っていると

言えるのです。

## 人類の危機

いきなり話が飛躍するようですが、いま、私たちは、かつてなかったほどの高い確率で、人類絶滅の危機を迎えています。いろいろな理由が考えられますが、代表的なのは核兵器です。これもまた人間の知能と文化が生み出したやっかいもので、人間が「かしこく」なることと、「平和に、幸せに」なれることとは決してイコールではないという、ひとつの証明です。

いまから40年くらい前、東西冷戦の最中に、「キューバ危機」というのがありました。くわしい説明はしませんが、要するに当時のソ連がキューバに核ミサイルを持ち込んで、それがアメリカの方を向いており、いつ発射されてもおかしくない状態になったのです。偶然だろうと故意にだろうと、核ミサイルが一発でも空を飛ばせば、迎撃ミサイルが自動的に発射され、地球はあっという間に壊滅状態になります。ミサイルの撃ち合いは、両方にタマがなくなるまで止まない仕組みになっているからです。キューバ危機を振り返って、アメリカ政府のある高官は「次の週末を生きて迎えられるかどうかわからなかった」と語っています。冗談じゃないぜという感じですが、事実だそうです。そして、現在、冷戦が終わってはや10年以上がたちますが、全面核戦争の危機が去ったわけではありません。兵器の性能はますます上がっており、人類絶滅の可能性もそれにつれて高くなっているはずです。

核戦争以外にも、環境破壊の問題があります。オゾン層が破壊され、紫外線が強烈に地球上に降り注いでくるようになりました。赤ちゃんができると役所から配られる「母子手帳」に、かつては「日光浴をさせましょう」という文がありましたが、あまり日光を浴びさせると、早いうちから皮膚癌になる危険があったりするので、いまではこの文がなくなっています。

こんな現実世界の中で、トップランナーになるとか、たくましく生きる力をつけるとか、サバイバルできるとか、そんなことばかりを子どもに教えて、いったいどれほどの意味があるのでしょうか。身もふたもないことを言うようですが、どんなにジタバタしても、死ぬときは死ぬのです。たった一人で、一日や二日、他の人より長く生きられたところで、無意味としか言いようがありません。

「お前たち、一生懸命勉強して、みんなトップランナーになれよ」などと言うのは、い

ざ、人類の危機がやってきたときに、他人は蹴落としても、自分だけは生き残ろうとする、あさはかでエゴイスティックな人間になれと教えることと同じです。自分だけが生き延びて、それがどうして幸せでしょうか。縁起でもないことばかり言って、気分が悪くなった人もいるかも知れませんが、もう少し続けますと、目前に死が迫ったとき、一人だけ生き延びようとして他人を踏み台にするより、みんなで手をつなぎ合って、じっと心静かに過ごす方が、結局は生き残れる可能性が高くなるとも言えるのです。

漂流するボートの上に、人が10人、パンがひとつだけ。こうなったとき、みんながそのパンを独り占めしようとなったら、とたんに殺し合いが起こります。いずれ死ななければならぬ身でありながら、死ぬまでの時間を自分たちで短くしているのです。これほど愚かなことがあるでしょうか。全員飢え死にするかも知れないけれど、みんなで平等に、ひとつまみずつパンを分けようとなったら、殺し合いにはなりません。助かる可能性が、その後に出てくるかも知れないのです。たとえ助からなくても、その方が最後まで幸せに生きられたと言えるでしょう。

#### 仲良く生きる

いま、すべての子どもたちに教えなければならないのは、自分だけがいい思いをしようとはからってはない、ということです。助け合い、分かち合い、支え合って、あらゆる人と仲良く生きていこう、ということです。これは、知識や能力で身に付くことはありません。反対に、知識や能力が高まるほど、こうした生き方から遠ざかるとすら言えます。いまこそ、私たちに生き方のお手本を示してくれるのは、先ほどご紹介したダウン症の方のような、知的障害の方々であるとも言えます。

もう一回、「トップランナー」に戻って考えてみたいと思います。単純、素朴な疑問なのですが、みんながみんなトップランナーになってしまったら、世の中はメチャクチャになり、收拾がつかなくなるのではないのでしょうか？

だれもが、「オレがトップだ」「オレこそがトップだ」「それを言うならこのオレだ」と騒ぎ合う状態、これをことわざで「船頭多くして船山に登る」と言うのです。念のため、『広辞苑』で意味を引いておきますと、「指図する人ばかりが多いため統一がとれず、かえってとんでもない方に物事が進んでゆくことにいう」とあります。いまの世の中、まさにここで言われるとおりになっているのではないのでしょうか。

トップランナーがその役割を十分に果たせるのは、周囲を優秀なセカンドランナー、サ



ードランナーが固めているときです。そうなったとき初めて、トップの仕事は社会的に興味をもち、役に立つのです。

誰もがトップの座を狙うのであれば、それはつまり戦国時代、下克上ということです。すでに日本は長いこと、学生ならば受験戦争、社会人ならば出世競争というかたちで、戦国時代さながらでした。高度経済成長の時代には、国際的な技術競争が激しく、日本は自動車や電化製品の分野で、天下を取りました。

現在は、先ほども言いましたように、IT と遺伝子で、新たな戦国時代が始まっています。しかし、日本がこの開発競争に勝てる見込みは、だいぶ低いのです。日本の教育は、学級崩壊やいじめ、不登校の問題が著しく、大学になっても学力低下が騒がれ、やっと卒業しても2割が無業者と、子どもや若者がまことに頼りないのです。発展途上国の留学生たちが、使命感と愛国心に燃えてメキメキ頭角を現すのを横目で見ながら、日本の指導者たちはいても立ってもいられないことでしょう。

あくまでも予測ですが、IT と遺伝子の競争で、日本が踏んばれるのは、おそらくいまくらいが限界で、これから先はどんどん順位を落としていくのではないのでしょうか。おそらく同じ思いが多くの人々の頭にあるからこそ、「トップランナーを目指せ」という意見がわざわざ叫ばれるのでしょう。現にトップにいるのなら、そしてトップになれる可能性が高いのなら、あえてそんなことを騒ぎ立てなくてもいいはずです。ヤバイからこそ、叱咤激励しなければならぬのです。

しかし、話を戻しますが、誰もがトップを目指す社会は、混乱と崩壊の危機を高めます。いますでに、日本には十分すぎるほど、社会的危機が広がっています。そういう中で、さらに「子どもたちよ、トップをねらえ」と教え込むことは、その危機を回避するどころか、ますます拡大することになります。

## 社会崩壊の危機

混乱と崩壊の危機は、世界に広がっているのですが、震源地はこの日本です。どうしてそんなことが言えるのか、と、反論したくなる方も多いでしょう。確かに、たとえばアメリカを見てみれば、相変わらず銃器犯罪は多いし、麻薬やアルコール依存、精神疾患の問題も深刻です。また、アフリカの諸国では慢性的な飢餓と同時に、いっこうに終わる気配のない内戦と、それによって生じる民族虐殺や、ふくれあがる難民、エイズの蔓延などの問題に、まったく出口が見えません。中東和平も危機的で、武力衝突や爆弾テロなどがひ

んぱんに起こります。東南アジアや中南米における民族独立問題をめぐっても、多数の死傷者を出すテロやクーデターなどがあとを絶ちません。

こんな世界情勢を見るにつけ、日本がいかに平和であるか、しみじみと感じる人は多いでしょう。それなのに、どうして日本が崩壊の最前線にいるなどと言えるのか、という疑問が出てくると思うのです。

実は、世界の中で、子どもの心が一番すさんでいるのが、ほかならぬ日本なのです。これは、いろいろな調査から明らかです。文部省に、そういうデータはいくらでもあります。それらを一つひとつ紹介しても意味があるのですが、興味のある方にはくわしくお調べいただくとして、ここではほんの少しだけ紹介します。

「先生には反抗してもいい」、「親の言いつけは守らなくていい」、「学校はずる休みしていい」、「したければ売春をしてもいい」、こう答える子どもの数は、世界で日本が一番です。売春なんて、イヤイヤ、泣く泣くやらされるのが常識のはずですが、日本ではそうではなく「したいんだもん、やったっていいでしょ」、こちらの方が常識なのです。

「子どもの成長に満足している」、と考える親の数は、日本が世界で最低です。それから、大人になったら、みんなから好かれるようになるとか、仕事で成功するとか、いい親になれるとか、自分の将来をポジティブに考えている子どもの数も、世界で日本が最低です。さらに、いまの自分を、勉強ができるとか、正直だとか、親切だとか、働き者だとか、勇気があるとか、やはりポジティブにとらえている子どもの数も、世界で日本が最低です。

これだけの紹介でも、もはや十分ではないでしょうか。これらの調査対象は、何も先進国だけではありません。発展途上国も含まれています。つまり、貧しいとか豊かとか、見かけは平和だとかということと、心が荒れているかどうかは、関係がないのです。数字の上でも、日本の子どもの心は、世界で一番すさんでいることが、実証されているのです。

たとえ、犯罪が多発していても、戦争が終わらなくても、難民キャンプで暮らしていても、世界の多くの子どもたちは、未来に夢と希望を失っていません。きっとすばらしい時代が来る、その時を自分たちの手で掴むんだと考えて、けなげに、必死に暮らしています。

#### 情けない日本の子ども

それにひきかえ日本の子どもたちはどうでしょう。毎日学校へ行き、おいしい食事を三度三度食べ、休日には親と一緒にドライブをし、おしゃれな服や楽しいおもちゃに囲まれて暮らしている、それなのに、将来に夢も希望もなく、親や先生をバカにし、友だち同士

はいじめ合い傷つけ合い、勉強も手伝いも口にしなくて、ボーッと怠惰に日々を過ごしているのです。これほど情けない話があるでしょうか。

多くの人たちが「これではいけない」と焦り始めています。しかし、そこで出される対策のどれもこれもが、ますます事態を悪化させることにしかならないものなのです。その代表が、「トップランナー」なのです。

まず、誰も彼もがトップを目指せ、という教育が、よけいに混乱を招くことは、ことわざを例にして述べました。子どもたちの多くは、いますでに孤立してバラバラなのに、それがますますひどくなるのです。

それから、トップランナー育成のための具体策として取り入れられているのが、飛び級や飛び入学です。知識を教える教育はダメだ、と口では言いながら、結局は知識や能力が教育や評価のすべてになっています。心の成長は、ほとんど無視されています。

また、トップランナーとしての期待をされない子が、山ほどいるわけです。そうした子にも、個性に、または才能に応じて、それを伸ばす教育を、などと言われますが、そんなのもほとんど口だけです。せいぜい、机の前に座らされて、受けたくもない授業を無理矢理に受けさせられるのが関の山です。高校や大学の中退率が上昇し、不登校の子どもが激増するのも、当然の成り行きと言わざるを得ないのかも知れません。いまや、高校への進学率はほぼ100%、あと数年で大学へも、進学希望者が全員入学する時代がやってくると言われていています。そのことは、日本の子どもたちをよい方向へ導くでしょうか。私たちは、かえって、怠惰でグータラな若者を増やすだけではないかと危惧します。

いまのように、フリーターがどんどん増えれば、税金を納める人間の数は、逆にどんどん減っていきます。年金制度も、危うくなってきます。中高年が、若者を養わなければならないようになってくるのです。そんな国に、諸外国と張り合い、協調していくだけのエネルギーがあるでしょうか。どこかに植民地にされても、「ウン、いいよ別に、それだって」と、力無く言いなりになるだけではないかと、心配になります。別に私たちは国粋主義者ではないのですが。

「悪知恵」を捨て、心を磨く

いまのまま、教育が、知識と能力を高めることばかりに一生懸命になっているうちは、決して日本と日本の子どもがよくなることはありません。「トップランナー」など、失礼ですが、たわごとに過ぎないのです。

もちろん、少くくは知識や能力があってもけっこうです。しかし、遊ぶことばかり考えている高校生を机に縛り付けて漢文を読ませたり、教官の講義を缶コーヒー片手に聞くような大学生に経済問題を議論させたところで、果たしてどれほどの意味があるのでしょうか。それこそ百害あって一利なしです。知識や能力など、ほとんどあるよりない方がいいものです。多くの人にとって「悪知恵」にしかならないものだからです。ですから、放っておいてもついてくる知識や能力など意識して捨て去り、心を磨き、はぐくむことを、教育の根本に据えなければならないのです。

そうすると、外国との競争に勝てなくなるし、生活のレベルもいままでよりは落ちるかも知れない、という問題が出てくるでしょう。たぶんそれは避けられないと思います。しかし、競争に勝ったり、便利で贅沢で快適な生活を続けるよりも、人間として、本当の幸せを実現することの方が、はるかに大切なことではないでしょうか。

「本当の幸せ」などと、抽象的なことを言っても、多くの方はピンと来ないと思います。ある人は、「こりゃ新興宗教の勧誘か？」と身がまえることでしょう。もちろんちがうことは、全体を読んでいただければお分かりになるとは思います。

幸せとは何か？

だいたい、幸せとは何でしょうか。それこそ、人によって千差万別だと思います。ある人にとっては、出世して、給料が上がるのが幸せでしょう。念願のマイホームを手に入れたことが、幸せな人もいます。または、毎日好きな酒が飲める、おいしいものをいくらでも食べられる、映画やビデオを好きなだけ見られる、温泉に入れる、インターネットに没頭できる、海外旅行に行ける、朝から晩までミステリー小説を読みふけられている、釣りに行ける、テニスができる、ピカピカの新車を手に入れる、・・・、などなど、数え上げればきりがありません。

こうした幸せを、むなしいものとバカにするわけではありません。それらを求めて一生懸命になるのも、とくに若いうちならばけっこうでしょう。しかし、水を差すようで気分を害する人も多いでしょうが、あえて言うならば、こうした幸せは、仮のものに過ぎません。「条件付きの幸せ」なのです。つまり、その条件がはずされてしまうと、とたんにストレスが高まり、不幸になげくことになってしまうのです。

人間は、何の条件がなくても、ただ生きているだけで、あふれ出るような喜びを感じることができます。どんなに粗末な食事でも、ボロしか着られなくても、傾いたような家に

住んでいても、それらに十分満足して、生きていられることだけに感謝をして、日々を送ることができるのです。先ほど紹介した「教育改革国民会議」の報告書を見ると、こんな文があります。

「私たち人間はすべて生かされて生きている」

「私たちは誰もが、そのことに感謝を忘れないことだ」

誰もが「生かされて生きている」と実感し、そのことに感謝し続けていられるなら、それ以上すばらしいことはありません。それはつまり、「無条件の幸せ」を得たということなのです。それは、人生の究極の目的を果たした、ということでもあります。

たいへん失礼ながら、「国民会議」で話し合い、この報告書を作った委員の方々が、この「無条件の幸せ」を感じていらっしゃるとは、とうてい思えません。根拠のないイチャモンをつけているわけではなく、報告書のどのページを開いても、そのことを指摘できる箇所を見いだすことができるのです。いまは、そんなことをしている暇とページがありませんし、読者の方々もつき合わされるのはかなわないでしょうから、いちいちは言いませんが。

民主主義は自己主張

「無条件の幸せ」は、民主主義からは生まれません。民主主義は、自己主張の制度です。自分が正しいと思うこと、自分が善いと思うことを主張し合い、議論し合って、多数決で「何が正しいのか」「何が善なのか」を決めていくのが民主主義の手続きです。「誰それが言ったから、これが正しいのだ」とか「昔からこう決まっているのだ」とかいうことではなく、あくまでも「自分が」「いま」正しいとか善いとか思うのが、判断の基準になるのです。相手を説得するためには、いろいろと理由や説明をつけなければなりません。たとえヘリクツやコジツケであっても、相手が納得して引き下がれば、それは正当な理由になるのです。それを昔から「勝てば官軍」と言うのです。

ですから、民主主義の社会では、幸せも人の数だけあることになります。ある人は新築のマイホームに住めることを幸せと感じ、別の人には借家住まいでいいから高級な外車に乗れることを幸せとします。日本はとても豊かになりましたから、三度三度ご飯が食べられるだけで幸せという人は、たぶん日本中探しても見つけるのは難しいと思います。そう

して、幸せにどんどん条件が付いていくのです。

ここまで言うと、多くの方は、「じゃあ、オマエたち自身は、その『「無条件の幸せ』とやらがわかっているのか」と思われるでしょう。逃げを打つようですが、そんなことをいくらここに書いても、ことばだけではむなしいのです。仮に私たちがここで、「もちろん私たちにはわかっている」と言っても、99.99%以上の方は、決して信じないでしょう。これ以上私たちを追及したい方とは、お会いして話をするよりほかはありません。私たちにもいちおう仕事がありますので、呼びつけられてホイホイと出かけて行くわけにはいきませんが、機会があったらお会いできる方がいらっしゃるかもしれません。

無条件の幸せへの道は、自分を抑え、それはつまり欲やこだわりや執着をできるだけ抑え、他者を認め、許し、譲り合い、受け入れるところからしか始まりません。繰り返しになりますが、それは、現代の民主主義とは正反対の考え方であり、生き方なのです。

#### 子どもに執着する

条件付きの幸せは、食べ物や持ち物、娯楽などへの執着としてあらわれる他に、人への執着としてもあらわれます。その執着が、ありありと見えるようになるのが、家族関係です。

夫は妻に、妻は夫に執着します。この関係をいろいろ書き出せば、夫婦げんかとか不倫とか、いろいろ面白い、と言うか深刻な話題にこと欠きませんが、そんなことに関わっているわけではありません。

親子関係にも、赤裸々な執着があらわれます。こちらの方が、本題です。夫婦関係の執着では、「自分によって、相手がどれほど幸せになっているか」「自分はどれほど相手に愛を捧げているか」ということよりも、「相手は自分をどれほど幸せにしてくれているか」「相手は自分にどれほど奉仕しているか」ということの方が、重要になっています。親が子に執着する場合にも、似たようなことになります。

「どれほど親の思い通りに育ったか」

「どこまで親の夢（欲望）を果たしてくれるか」

「いつまで親の面倒を見てくれるか」

「どれくらい親に満足させてくれるか」

親が、子に愛を求めているのです。子どもから愛をもらえないとき、親は怒り、悲しみます。そのとき、子どもが、親の幸せを左右する条件になっているのです。

「うちの子、10人中少なくとも2番目か3番目にはかわいいわ」、子どもの顔がよくなかったら、その親は悲しいわけです。

「かけっこではいつも1番だな」、足が遅いと腹が立ちます。「幼稚園なのに、もうかけ算九九が言えるのよ」、勉強ができないと頭にきます。だんだん大きくなって、地域で一番の進学校に入った、一流大学に合格した、大企業に就職した、芸能人になった、プロスポーツ選手になった、芸術家になった、ここでちょっと一言お断りしますが、私たちは子どもがこうなることを「悪い」と言っているのでは、決してありません。どれも結構なことだと思います。また、子どもの努力や成功をともに喜び、大いに誉めてあげるのも、ごく自然であるし、すばらしいことだと思います。

しかし、こうしたことによって子どもへの愛情が左右されたり、親が幸せを感じたり不幸せをなげいたりすることは問題だと言っているのです。それでは、親の言いなりになって、親のエゴを満たしてくれる子はかわいく、そうでない子は憎たらしいということになって、他ならぬ子ども自身が、親によって不幸な人生を歩まされることになってしまいます。

#### 気分で怒る親

あまり極端な例は少ないかも知れませんが、つい、親の言うとおりにしないことを、八つ当たりの的に怒り散らしてしまうのは、よくあることではないでしょうか。何が正しくて、何がまちがっているのか、何が善いことで、何が悪いことなのか、こういうことを、正しい価値として子どもにしつけるのではなく、その時その時の気分を、子ども相手にぶちまけてしまうことは、ないでしょうか。

「オマエみたいなのは、うちの子じゃないよ。さっさと出て行きな」

「そんなに言うことを聞きたくないんなら、お母さんだってアンタの言うこと聞いてあげないからね」

「これだけ言ってもわからないなんて、ちょっとアタマおかしいんじゃないの」

「もうオマエの顔なんか見たくもない、あっちに行け」

「そうやって、一生泣いている、お父さんはもう知らん」

スーパーなどで、見知らぬ他人が、子どもをオニのごとき勢いで叱りつけているのを見ると、たいていのは、「あんなに怒らなくてもいいのにねえ」「あーみっともない、ワタシはあそこまでヒステリックには叱らないわ」「あんなになる前に、ちゃんとしつけが

できないのかしらねえ」などと思うことでしょう。しかし、ことが自分におよんでくると、そんな気持ちはどこへやら、もっとすさまじい剣幕で怒鳴り散らすことになりかねません。子どもにガミガミ言っている一部始終をビデオに撮られていて、あとになってそれを見せられたら、ほとんどの人があまりのみにくさ、恥ずかしさにひっくり返ることでしょう。自分の心をセーブし、コントロールすることは、実に難しいのです。いくら普段は、自分のことを「落ち着いているほう」と思っている、いざ、というときには暴走する気持ちを止められなくなります。人間には、誰にもそういうやっかいなところがあるのです。

子どもを憎たらしいとか、かわいくないとか、頭に来るとかいう、親の気分やご機嫌、好き嫌いをまったく離れた、客観的で、冷静な注意なら、どんどんするべきです。こう言うと、じゃあ、子どもを叱るときには、ロボットか機械みたいに、淡々と、冷たく、無味乾燥な言い方をしろというわけか、という誤解が生じるかも知れません。そうではないのです。子どもに対しては、何を話すときにも（叱るときも誉めるときも）できるだけ心を込めて、感情豊かに話す方がいいに決まっているし、そうするように努力すべきです。ただ、その上で、親の都合はできるだけ引っ込めましょうと申し上げたいのです。叱ったり、注意したりするのは、正すべきだからそうするのであって、親が頭に来たからとか、腹の虫が治まらないから、こうしたことが理由になってはいけません。

#### 愛ではなく取引

いくらきびしく叱っても、甘やかしても、それが親の欲から出たものであれば、決して子どもを愛したことになりません。これも繰り返し言ってきたことですが、子どもを通して、親が自分自身を愛しているのです。親が、子どもを、自分の欲やこだわりを満たすための手段にしているのです。それは取引ということであり、それでは、子どもは決して幸せになれません。そして、その子が親になったとき、再び自分の子どもを手段として利用するようになります。悲しいかな、その関係はとぎれることなく、はるか未来まで引き継がれてしまうのです。

親子ですら利用や手段の関係になるのでは、他人同士の関係となればもっとすさまじいものになるのが当然と言えるでしょう。赤の他人だけでなく、知り合いや隣近所に対してであっても、ひたすらに愛や好意を捧げることは、難しくなっています。つきあいが損なわれない程度の社交辞令は、大人であれば誰しもが身につけますが（いや、「つけている」と期待したいのですが、最近は何れも危ういと言えます）、せいぜいそこまでです。



ここ数年、携帯電話やEメールが急速に普及していますが、こうした「コミュニケーション・ツール」は、社交辞令すら不要なものにしつつあると言えます。何しろ機械によって人と人が結びつけられているのですから、相手が邪魔になったりうっとうしくなったり気に入らなくなったりしたときには、電源をブチンと切れば、「ハイ、それまでヨ」となります。

近い将来、全国の学校をインターネットによって接続するという計画を、政府はもっています。「先進的な」実験校では、相当なお金をかけてパソコンを導入し、学校中にネットワークを作り上げています。しばらく以前に、職員室をなくした学校というのができました。そこは「オープン・スクール」と言って、教室を仕切る壁もありません。広々としたフロアで、先生たちは各階に分散し、それぞれに机や本棚を持っています。さすがに会議の時には集まるのですが、そうでなければ先生たちは一日中バラバラです。職員室に閉じこもっているより、その方が子どもに目が届くし、子どもとも触れあえるというのがねらいなのでしょう。打ち合わせやちょっとした相談などはどうするのかというと、各人が持っているパソコンを使い、Eメールでやりとりするのだそうです。

こんな学校が「先進的」とされていいのでしょうか。「開かれた学校作り」とよく言われますが、職員室をなくして先生たちが散らばれば、それで「開かれた」ことになるのでしょうか。先生たちの人間関係はどうなるのでしょうか。先生同士が機械で結ばれ、「そっちのクラスの　ちゃん、最近どう？」というやりとりすらEメールでおこなって、果たして豊かな心のやりとりや触れあいができるのでしょうか。気の合う仲間同士だけでひんぱんに連絡を取り合い、イヤミな同僚や上司にはぜんぜんアクセスしないということが、Eメールならば可能です。先生たちがみんな無味乾燥なロボットみたいになった学校で、どうして子どもたちに豊かな人間性を育てられるのでしょうか。効率優先で教育を考える愚かしさに、いいかげん気付くべきだと思います。

#### 取引と孤独、不安

親子関係が取引になり、そうして社会全体の人間関係も取引になっていく、それがまた親子関係の取引化に拍車をかける、いま、日本にはこういう悪循環が渦巻いています。世界全体に見られる傾向でもありますが、日本はその最先端を突っ走っているのです。人間一人ひとりがバラバラになり、孤独と不安にさいなまれ、その苦痛から逃れるためにますます自分に閉じこもっています。そうすると、周囲の人は、みんな敵に思えてしまうので

す。

少しでも人を求める気持ちが残っているうちは、一生懸命頼ろうとしたり、依存したがつたり、甘えたがつたりします。子どもも大人も、その方が正常と言えるのですが、そうすると、「個が確立していない」「自我が弱い」「自立していない」「幼児性が抜けない」などなど、やたらときびしいことばで怒られてしまいます。うっかり手を伸ばすとヤケドしますから、「二度と人をあてにするもんか」と、殻に閉じこもってしまいます。

「個の確立」「個性化」「個別化」などというかけ声が、そもそもまちがっているのです。それは「孤」の確立であり、「孤性化」「孤別化」と言うべきです。そして、孤独に突き落とされ、押しつぶされてゆがんでしまった人々が、自殺し、人を殺し、犯罪を犯し、友だちをいじめ、不倫に走り、援助交際をし、部屋に引きこもっているのです。孤独の闇が、現代の大人から子どもまでを広くおおっていると云えます。

いまこそ、子どもたちに教えなければならないのは、人と仲良くし、人を認め、受け入れ、許すことの大切さです。これは、本や授業で教えられることではありません。小学校や中学校には「道徳」の授業がありますが、あんなものがどれほど役に立たないかは、みなさんがご自分の子ども時代を思い出してみたら、すぐにおわかりになるでしょう。

「人には親切にしましょう」「悪いことをしたら素直に謝りましょう」「何かしてもらったら、ありがとうと言いましょ」「好き嫌いをなくしましょ」「物は大切に使いましょ」「お父さん、お母さんの言いつけは守りましょ」、こんなことを「アタマで分かる」ことは、誰にだってできるのです。先生に教えられて「みなさん、分かりましたか？」と聞かれれば、ほとんどの子が「ハーイ」と返事できるのです。ところが、分かっている、できないのです。なぜ分かってもできないのかと言えば、人間には自分を大事にする心と他人に尽くそうとする心があって、そのふたつのうち、「自」の心ばかりが大きくなって、「他」の心が働かなくなってしまうからです。

現実社会は「自」ばかり

そして、現実の社会は、こういうことができなくなるように、しなくてもいいように動いています。生きることが競争ならば、人に親切するなんてバカバカしいと、誰もが思うでしょう。悪いことをしても、バレないようにうまく立ち回るのが「かしこい人」であり、うっかり謝ったりすればよってたかって責任をとらされます。

生きる権利、働く権利、勉強する権利、など、何でも「権利」を主張することは、「や

って当たり前、できて当たり前、してもらって当たり前」と考えることであり、人への感謝の気持ちは、必然的にうすれていきます。

好き嫌いがあっても、別に嫌いな物を我慢して食べなければならない理由はありません。また、使い捨て商品がどんどん開発されたり、修理するより新品を買った方が安上がりだったりするので、物を大切にしようという気持ちはなくなっていきます。「自分で考えて判断することが大事」と学校で教わってくれば、親の言いつけにしたがわなくなる子どもが増えるのは当たり前です。

こうした社会を変え、子どもたちを健全に育てるには、私たち大人が「愛」をもつよりほかにありません。自分ではなく、他者を愛する、本当の愛です。他者を愛するとは、自分の都合は後回しにして、欲を抑え、こだわりを捨てることです。自分より「人さま」を優先することです。短く言えば「我慢すること」「辛抱すること」「耐えること」です。

大人は、欲をじっと我慢し、「この子さえいなければ」、「早く大きくなってくれれば」、「そうしたら好きなことができるのに」という気持ちを殺して、さまざまな誘惑やストレスに耐え抜き、子どもに愛を注ぎます。親の愛を十分に受けた子どもたちは、心の成長の道筋にしたがって、自分を信頼し、他者を信頼し、バランスよくのびのびと育っていくことができます。そして、親を手本として、人を愛することの大切さを、身をもって学んでいくのです。

#### 思い通りにできないこと

普通、成長するとは、「それまでできなかったことができるようになること」と考えられています。人間一人ひとりの成長もそうですし、社会の進歩も、同じように考えられています。つい100年前までは、人間が空を飛ぶことはできませんでした。それが、飛行機が発明されたと思ったら、あっという間にジェット機になり、ロケットになり、スペースシャトルになりました。その進歩の加速度たるや、すさまじいものがあります。つまり、プロペラ機からジェット機になるまでの年月と、ジェット機からロケットになるまでの年月と、ロケットからスペースシャトルになるまでの年月、この3つを比べると、どんどん短くなってきているわけです。携帯電話なんて、つい最近までなかったのに、いまでは小学生が親のお迎えを塾に呼ぶための必需品となっています。

こうして、人は、「自分の思い通りになること」を広げていきます。しかし、どんなにあらゆることが思い通りになっても、最後に、どうしても不可能なことが残ります。それ

は、永遠に生き続けることです。つまり、人間は誰でも、生まれた以上は、いつか必ず死ななければなりません。これだけは、絶対に、人間の思い通りにはならないのです。

動物は、思い通りにならないことがあっても、まったく悩みません。「自分にはできないことがある」と自覚する心がないのですから、当たり前です。魚は「陸に上がりたいなあ」とは考えませんし、イヌは「空を飛びたいなあ」とは思いません。人間だけが、こうした自覚をもち、悩めます。そして、思い通りにならないことをできるだけ減らして、便利に、快適に生活できるよう、何百年も、何千年も工夫と努力を重ねてきました。

いまでは、昔ならとても考えられないようなことが、いくらでも可能になっています。現在、IT（情報技術）革命と遺伝子研究によって、さらに常識はずれなことまでが可能になりつつあります。しかし、どれほどコンピューター医療が進歩し、遺伝子を自由に操作できるようになっても、すべての人がいつか死を迎えることだけは、絶対に避けられません。

この事実は、人間に根本的な恐怖と苦しみを与えます。そして、「死にたくない、死にたくない」と思えば思うほど、ますます死ぬことが恐くてたまらなくなるのです。これは、すべての人にとってたいへんに重要なことですが、この本でこれ以上深入りするにはあまりにも問題が大きすぎますので、このへんで止めておきます。

さて、死を避けられないことを根源的なものとして、普通は他にも、思い通りにならないことがたくさんあります。そして、思い通りにならないことを、何とか思い通りにしたいと願えば願うほど、それがかなわないときの苦しみは倍増します。その苦しみを取り除くには、「思い通りにしたい」という執着を捨てるほかはありません。

これは子育てや教育においても言えることです。子どもを思い通りにしたいという親の願いが強ければ強いほど、その通りに育っていかないときに、親のストレスは高まります。そして、そのストレスは、だいたい、子どもへの悪影響となってあらわれます。大切なのは、親の思い通りに子どもを育てることではありません。子どもが、本当に人間らしく育つことです。それは、他者を愛せる人間に育つことです。

#### 願うことの大切さ

ここで付け足さなければならないと思いますが、「こうしたい」「こうなりたい」という強い願いをもつことは、決して悪いことではありません。それどころか、充実した、張り合いのある人生を送るためには、欠かせないものです。前にも紹介しましたが、最近、

「子どもには、いくらがんばっても報われないことだってあるんだということを、小さいうちから教えた方がいい」と主張する人が多くいます。努力は必ず報われる、などと絵空事を教え込むから、挫折を知らず、自殺したり引きこもったりする若者が増えるのだ、という理由です。がんばらなくたって、無理せずに放っておかれれば、子どもは勝手にやる気を出して自立できるようになる、と考えられているようです。

本当でしょうか。では、子どもたちに「がんばらなくていいんだよ」「無理しなくていいんだよ」「好きなことだけしていなさい」「いやだったらやめていいからね」、こんなことばかり言い続けるべきでしょうか。それで、どんな子どもが育つのでしょうか。気力も活力も、ガッツも覇気もない、無気力な子どもたちが、ますます増えることになるでしょう。いま、現にそうなっていると思います。

がんばらせるからいけない、というのは間違いです。いまの子どもたちの多くが、簡単にあきらめ、やる気を無くし、挫折してしまうのは、ひとことで言うなら「孤独だから」です。自分の世界に閉じこもり、自分だけががんばっている、あるいはがんばろうとするから、すぐに疲れ、傷つき、へたばってしまうのです。あたたかく見守り、やさしく励まし、力強く導いてくれる大人の愛を感じられないのです。信じられないのです。そして、ともに手をつなぎ、支え合って進んでいける仲間が見えないのです。

他者を求め、愛し、信頼し、受け入れる心、それが、苦しみに耐え、挫折を乗り越えて生きていくエネルギーを与えてくれるのです。それなのに、「個が確立していない」「自我が弱い」などと考えて、子どもをますます孤独にして「鍛えよう」としたり、逆に「がんばらなくていいよ」「無理するな」と言うだけで、そのまま放っておいたりするのは、まったくのあやまりです。

人間は、他の誰かと心がつながっていると実感できるときに、初めて生きる喜びがわいてくるものです。「生かされて生きている」ことがわかる、とはそういうことです。「個性」ばかりを重視していると、そのことが分からなくなってしまいます。いくら個性が強くても、「自分ひとり」では生きていけないのです。

極端に言えば、個性なんてなくたっていいのです。それより大事なものは、人と仲良くし、人を愛する心をもつことです。

「和」を取り戻す

小学校か中学校の社会科の授業を思い出してください。かつては一万円札の顔だった聖徳太子が言った有名なことば、「和をもって貴しと為す」を覚えている方は多いでしょう。わがままや自己主張を抑え、人を立てて、仲良くし、協力し合うことが「和」です。「和」は、日本では伝統的に大切にされてきた価値でした。

しかし、戦後になって、この「和」は、たいへんに嫌われ、バカにされました。いまやほとんど死語に近いのではないのでしょうか。使われるとしたら、たいていマイナスイメージです。「和」ということばからは、いつも群れていて、主体性がなく、自信もなく、意味不明のあいまいなニヤケ顔で、コソコソ、オドオドした日本人像が描き出されてきたと思います。そんなだから、欧米人の前に出るとからっきし頼りなくて、いつでも押され気味、日本人が強気になれるのは札束を握っているときだけ、と、外国人はおろか、当の日本人までが考える始末です。日本人は、さっさと「和」を捨てて「自立」しないと、外国と対等に渡り合っていけないと、長い間考えられてきました。

その結果、50年以上がたったいまの日本は、どうなったでしょうか。ますますひどい世の中になってきていることはいままで何度も実例を挙げて紹介してきましたから、もうここでは繰り返しません。何故そうなったかと言えば、「自立」「個の確立」「自我の確立」「個性重視」などといったスローガンばかりが横行し、人々の多くが自分の世界に閉じこもり、人と心を通わせなくなったからです。「和」を捨てたからです。

民主主義だけが、日本人が唯一頼りとする思想ですが、これは基本的に、一人ひとりが自分の都合と利益だけを大切に考える考えですから、日本人はみんなわがまま勝手になって、人のことは無視するようになってしまいました。

アメリカやヨーロッパは日本にとって民主主義先進国です。お手本です。そしてそれらが、民主主義の国々でありながら日本よりもかなりマトモなのは、ごく簡単に言うてしまおうと、キリスト教があるからです。キリストの教えの方が、民主主義思想より上であって、社会全体を支配しているのです。聖書に「汝の隣人を愛せよ」と書いてあるため、民主主義や個人主義が確立していても、人々はてんでんばらばらに勝手なことはせず、お互いに尊重しあうのです。民主主義は、言うなれば人間が都合のいいように作り上げた社会システムですが、隣人愛は神の絶対的な命令です。民主主義は少くも無視してもせいぜいみんなからひんしゅくを買ったり、悪くて警察に捕まるくらいです。しかし、神の絶対的な命令にそむいたら、人間として生きてはいられません。「最後の審判」で地獄行きを命

じられるのです。日本人はすぐ「ヘッ、地獄なんて」と鼻で笑ってバカにしますが、欧米人の多くはよちよち歩きのころから両親に繰り返し繰り返し、徹底的にイエス・キリストの教えをたたき込まれますから、聖書の一字一句が骨の髄までしみこんでいます。

日本が世界の手本となる

日本には、キリスト教のような、唯一絶対の神はいませんでした。あまり宗教的なことを説明するゆとりはありませんが、神さまの命令はなくても、日本人は「和」を大切にし、お互い協力しあい、はみ出し者には「村八分」などの制裁を加えて、社会秩序を保ってきました。村八分というと、悪い習わしの代名詞のようですが、八分はのけ者にしても、残りの二分はちゃんと面倒を見てあげていました。嫌いな相手は徹底的に叩きのめさなければ気が済まない凶暴な現代人より、はるかにまともだと言えます。

いま、欧米では、キリスト教の教えが揺らいできています。かつて、アメリカの大統領がセクハラのスキャンダルを起こしたとき、大統領は裁判で、聖書に誓って証言をしました。後に、その証言がウソだったことがばれて、大統領もそのことを認めざるを得ませんでした。アメリカ人のヒーローであり、良心の代表である大統領が、「聖書に誓ってウソの証言をした」わけです。キリスト教の権威も地に落ちたと言わざるを得ません。こうして、人々を結びつけてきたキリストの教えがだんだん力を失ってきて、欧米社会も崩壊の危機を高めています。

日本の場合は、何しろ「和」という人と人とのつながり合いだけで社会を維持してきたのですから、それがなくなればそれこそアッという間に社会は崩壊の危機に直面します。50年かけて、崩壊は9割方進行したのではないのでしょうか。パソコンの爆発的普及と遺伝子操作技術の完成が、これにとどめを刺すように思われてなりません。

いまこそ、「和」を取り戻さなければ、手遅れになります。子どもたちには、そのことをよくよく分かってほしいのです。そして、日本に「和」がよみがえり、再び社会が平和と幸せに満ちるようになれば、民主主義とキリスト教に限界と挫折を味わいつつある欧米社会に、今度は日本がお手本を示せることになるのです。

いま、大人ができることは何か

根気がなく、閉じこもる子どもたち

私たちは、もともと障害児教育が専門であり、ここ数年おもな研究対象にしてきたのは色々と話題になることが多い「学習障害（LD）児」のことでした。学習障害のことを長々説明し出しますと、これまた時間とページがいくらあっても足りませんので、ここでは控えておきます。しかし、子育て中のお父さんお母さんはおそらくこのことに関心が高いでしょうし、新聞やテレビでも取り上げられることが増えてきましたから、どこかで聞いたことがあったり、けっこう詳しくご存じだったりする方は多いと思います。

さて、私たちは学習障害の研究をする中で、過去の専門書や学術雑誌に当たれるだけ当たり、学習障害児がどんな行動をとり、どんな話し方をし、人とどうつきあうか、それから、何を苦手とし、何を得意とするか、などという、ひとことでは「行動特徴」を、できるだけたくさんピックアップしました。

そこにはたとえば、「時計が読めない」とか「靴の左右を間違える」とか「人と話すとき、視線が合わない」などといったものがあり、全部を合わせると160個ほどになりました。

そしてそれらの行動を、いつも見られれば2点、ときどき見られれば1点、まったく見られなければ0点としてチェックできるアンケート用紙を作り、つてを頼って、できる限り多くのお父さんお母さんに、ご自分のお子さんについて採点してもらいました。およそ4,000人の方々に配り、回収できたのはだいたい1,000人分ほどでした。これらの方々は大多数がいわゆる「健常児」の親御さんでしたので、この調査は、学習障害児の行動特徴が、健常な子どもたちにもどれくらい見られるのか、を調べるものになったわけです。

さて、集まったデータを、コンピューターに入力して、統計的な計算をします。そして、どんな行動の特徴が、いちばん多く見られるかをはじき出しました。ここまでの作業は、とても私たちだけでできるようなものではなく、複数のチームでそれこそ突貫工事のように進めたものです。

結論に飛びますと、いちばん多かったのは、「根気がない」というものでした。二番目は「自分の殻に閉じこもる」というものでした。このふたつは、他の行動特徴に比べて、かなり高い数値を示しました。

根気のなさ、自分の殻に閉じこもることは、現代の子どもたちについて、マスコミな



どでもよく取り上げられる問題です。そして、このことが私たちの研究によっても科学的に証明されたと言えます。

もうひとつ大切なのは、これが、お父さん、お母さんからの回答によって明らかにされたことです。つまり、世の多くの親御さんたちは、根気がなく、閉じこもりがちな我が子を見て、ため息をつき、悩んでいられるのです。決してそのことをどうでもいいと考えているわけではないのです。前に書きましたが、文部省の世界的な調査で、「我が子の成長に満足している」と答えた親の数は、世界中で日本が最低だということがわかっています。文部省と私ども、双方の調査結果には、相通じるところがあると思います。

なぜ根気強さが必要なのか

さて、こうなると、子どもたちに根気強さを育てることが、たいへん重要になります。実際、根気のない子どもにはホトホト困ります。どんなにアメを与えておだてても、逆にどれほどムチをふるっておどかさうとも、当の子どもがドロンとした目つきで一向に腰を上げないのでは、しまいには大人の方がキレてしまいます。近ごろは、このキレる大人が増えてきたようで、これはこれで困った問題です。

だいたい、産業や文化の進歩というものは、どこまで根気強さを捨てても平気か、つまりどこまで楽ができるかというところにエネルギーを注いできたのです。ほんの百年前までは、どこへ行くにもひたすら歩いた（乗ってもせいぜい馬か駕籠）ののですが、いまでは乗り物でひとつ飛びです。また、食べ物を作るのも、着るものを作るのも、家を建てるのも、人間の力に変わって機械がしてくれるようになりました。公衆電話というものだって、考えようによっては非常に便利なのですが、いまでは電話ボックスを探し歩いたり、順番を待ったりすることが嫌われ、少々余分なお金を払ってでも携帯電話を使う人が圧倒的になりました。

どこまでラクができるか、根気強くなくてもいいか、これが社会全体の課題であり、要請です。それなのに、子どもたちに根気強さを望むのは、つじつまが合わないと言えば合わない話です。親が子どもに、「何でこんなことがんばらなくちゃいけないの」「どうしてがまんしなくちゃいけないの」と言われたとき、せいぜい「だってうちにはお金がないんだから仕方ないでしょ」と答えるくらいが関の山です。これでは残念ながらしつけにも教育にもなりません。それじゃあお金を稼げばいいんだな、やっぱり世の中はお金だなあと、子どもたちが思うのは当然です。

根気強さがあるというのは、人間としてすばらしいことなのです。それが、人間の値打ちなのです。しかし、それをいくらことばで言って聞かせたところで、子どもにとっては右の耳から入って左の耳から抜けるだけです。学校の道徳の授業と同じです。いくら頭でわかってダメで、心でわかり、体でわからなければ意味がありません。

根気強くがんばることが、どうして人としての値打ちなのか。これがわかり、また、人にわかせることができるのは、決定的に難しいことです。いま言ったばかりのように、ことばでわかることではないからです。ふつうに考えられているのは、根気強くがんばれば「自分が得をする」から、ということです。そうすると、屁理屈をこねるのがうまくなっただけの子供たちは「別にボクはトクしなくていいから、がんばるのもやめる」などと言ったりします。まったくアタマに来ますな。

いつか報われるときが来るのだ、それまでがんばりぬけ、それがキミのためなんだ、こういう励ましは、いまではまったく力を持ちません。これは、後でお話するように、いまの子供たちがみな、自分の世界に閉じこもりがちなことと、強く関係しています。つまり、自分だけが満足できれば、他人（親ですら他人）が何を言おうと、将来がどうなろうとおかまいなしなわけです。

自分だけがよければいいのなら、根気強さの価値などまったくわかりません。実は、自分のために根気強くがんばれ、と言うだけなのも、間違っているのです。根気強さの値打ちは、自分が得をするから、それだけではありません。人さまのために、世の中のために、少々の困難にはへこたれず、挫折にもめげずに粘り強くやり通す、このこともまた、とても尊いことです。しかし、それがわかっても、なかなか人さまのためだけに、自分を投げ出してでもがんばるといのは難しいことです。それをあまり子どもに押しつけると、まじめな子どもほどつぶれてしまう可能性があります。

いままで、繰り返し言ってきたふたつの心、自分を優先する心と他者につくそうとする心、これが、大人になってくると分裂してしまうために、いままで書いてきたようなことが起きるのです。このふたつの心が一体化していれば、完全にではないにせよ、多少なりとも一体化させようという気持ちがあれば、自分のために根気強くがんばることが、そのまま人さまのために努力することになるのです。

さあ、いろいろと理屈をこね回しましたが、結局、「アタマ」で考え、「アタマ」で答えを出そうとするから、こんなややこしいことになるのです。知識がじゃまをしているのです。よけいな知識などが捨てられれば、ただひたすらに、根気強くがんばることができ

るのです。私たちは、そのことを「専心勤労」というひとことで表しています。自分のためとも思わず、人のためとも思わず、これが自分のつとめだとだけ思って、よけいな考えを捨て、ひたすら仕事に打ち込む、そのことがすでに、人間としての尊い値打ちなのです。

根気はどうしたら育つか

スパルタ的にしごき抜いたら、根気強さは身に付くでしょうか。そういうこともあるかもしれませんが、その場合は、きっとただのスパルタだけではないと思います。みちびく者（親や大人）と、教えにしたがう者（子ども）との間に、信頼関係があり、心の通い合いがあったとき初めて、スパルタを乗り越えて実りが得られるのだと思います。

信頼関係や、心の通い合いを生むのは、親や大人から、子どもに注がれる無限の愛です。おのれの欲や都合、野心を捨て、ただ子どものためだけにすべてを捧げる、その覚悟と迫力があつたときに、子どもはそれにふれて、ひたすらな信頼を寄せてくるのです。そして、そのことで、ちつとやそつとではへこたれない根気強さをもてるのです。

愛のないしごきは、ただのいじめです。拷問であり、虐待です。いま、残念ながら、親や大人たちから、子どもへのひたすらな愛が失われつつあります。愛のように見えるものが、実は親の欲望であることが少なくないのです。こうした中で、単に「子どもは厳しくしつけよう」とか「スパルタを取り戻せ」とか言うだけでは、ますます暴力や虐待が増えていくおそれがあります。

そうでなくても、幼児や児童への虐待は、年々増える一方で、減る気配はいささかもありません。しかも虐待の手口は、どんどん凶暴化、凶悪化してきています。子どもを殺して逮捕された多くの親たちが、取り調べに対して「しつけのつもりだった」「言うことを聞かせようと思った」と答えています。実際そう考えていたのかもしれませんが、スパルタ教育を主張する人々には、こうした事実をきちんと認識した上で発言してほしいと思います。愛のないしつけは、いつ虐待に変わっても不思議ではないのです。「叩かなきゃわからない」のは、親に愛が足りないからです。叩かれるようなことをする方が悪い、と、親はすぐに子どものせいにしてますが、それを言うなら、叩かれなければわからないような子どもに育てた親が悪いのです。愛があれば、叩かなくてもしつけは可能です。親の心は、十分子どもに通じます

いっぽう、スパルタを嫌い、ナチュラル教育をすすめる人たちは、とにかく子どもには何も強制するな、と言います。いまの日本では、たぶんこちらの方が多数意見でしょう。

好きなことを、好きなときに、好きなだけしていれば、子どもは自然と根気強くなっていくと考えられているようです。

話を学習障害の調査に戻しますが、アンケートに答えてくださった親御さんのうち、多くの方が、チェック以外に、子育ての悩みや心配事を書いて出してくださいました。その中でとても多かったのは、「うちの子は、自分の好きなことならそれこそ何時間でもぶっ通しでやっているけれど、したくないことはぜんぜんやらない」というものでした。だいたい予想がつくと思いますが、「好きなこと」の代表はテレビ(コンピューター)ゲームです。「一日何時間まで」とルールを決めても守ったためしがない、とか、隠しても見つけだしてきてやってる、とか、家族で出かけてもゲーム恋しさに途中で帰ろうと騒ぐ、などの深刻な悩みが綴られていました。お母さん方の血圧が心配になります。

当たり前ですが、多くの親御さんは、何時間もゲームをし続けて平気な我が子のことを、「根気強いなあ、うちの子は」とは思っていないのです。すなわち、「好きなことを、好きなときに、好きなだけやり続けられる」とことと、「根気強い」とことは、イコールではありません。これまた当たり前のことです。

しつこいようですが、つまり、いくら好きなことだけやり続けても、子どもは根気強くない、と言えるわけです。

そもそも、「根気がある」とか「ない」とかいうのは、自分一人のことではなく、人との関係で言えることがほとんどです。テレビゲームを延々としている我が子を見て、多くの親たちは、無意味なことをしているなあと感じています。少くも手先が速く動くようになったって、最後の面がクリアできるようになったって、それが何の「役に立つんだ」と思うのです。それは、大げさに言うなら、人さまの役に立つ、世の中の役に立つということです。人との関係で、意味のあること、価値のあること(簡単に言えば、人の喜ぶこと)をがんばっているときに、子どもは「根気がある」と認められ、ほめられるのです。

子どもは、ほめられれば、期待に応えようとして、次もがんばります。そしてまたほめられ、いっそう努力を惜しまないようになる、この繰り返しで、たったひとりで机に向かって勉強しているときにも、それが価値あること、意味のあることであれば、ひたすらに打ち込むことができるようになるのです。そうなれば、それが自分のためなのか、人のためなのか、そんなよけいなことを考える必要がなくなります。「専心勤労」になるのです。結局、子どもを放任していても、絶対に根気強い子どもには育たないと言えるわけです。自己満足だけで、社会的にはまったく意味のないことには没頭できても、他から根気を求

められるようなことには耐えられないし、最初から見向きもしない、こういう若者や子どもが増えていくのです。いま、現に、どんどんそうなっています。右を向いても左を向いてもグータラばかり、とは少々言い過ぎかもしれませんが、それに近いものがあります。ごく少数の、やる気のある、マトモな若者たちは、その影響を受けて、じわじわと「汚染」されています。

そこにもってきて、多くの大人たちは「いいんだよそれで」「いつかキミにもできるときが来る」等の、励ましにもならないことばかり言いますから、事態は悪循環となります。大人たち自身に、グータラを好み、「専心勤労」を嫌う人が増えていきますから、若者や子どもに、何が正しいのか、何をなすべきか、といったことを示せません。自分にばかり目が向いていて、他者に愛をもてないのです。

いまなすべきことに、ひたすら取り組む、このことの尊さを、子どもたちに心と体で学ばせなければなりません。そのためにはまず、親自身が、その姿を子どもに見せることです。このことは、口で言ってわかることではありません。このためにもっとも適しているのが農業だという私たちの考えは、もうすでにお話ししました。

#### 自己主張と不安

自分に閉じこもる子どものことは、根気との関係でかなりふれてきました。これからはまとめとしていままでの話を整理しておきたいと思います。

人は、誰かと心が通じ合っていると実感できるときに、もっとも幸せを感じることができます。誰ともふれあわず、たった一人で生涯をまっとうする「孤高の人」も、きわめてまれにですが、いることはいます。しかし、そうした人はあまりにも少数ですし、ときおり世に紹介される「孤高の人」は、人と交わることの出来ない単なる変わり者か、筋金入りのエゴイストである場合がほとんどのように思われます。

話を戻しますが、人が幸せに生きていくためには、誰かと心が通じ合うことが一番大切だと言えます。どんなに一生懸命勉強しても、働いても、そのことを誰かに認められなかったり、感謝もされなかったりすると、むなしさがつのります。どれほどお金を貯め込んで、ぜいたくな暮らしができて、ひとりぼっちであれば、喜びよりも寂しさが襲ってきます。そういうとき、人はむなしさや寂しさをまぎらわそうとして、よけいに仕事や勉強に没入したり、財産に執着したりするのですが、それがかえって悪循環になります。業績や財産といった「モノ」にしか頼れず、他人はすべて敵かドロボウのように思ってしまう

のです。前に「イヌは裏切らない」ということを書きましたが、同様に「カネは裏切らない」というわけです。その大切な「カネ」がいつ無くなるか、いつ奪われるか、ということが頭を去らず、他人をそういう目でしか見られなくなって、ますます精神状態が悪くなっていきます。こうしたとき、「カネ」と、自分自身の存在が、ほとんど同一になります。カネが失われることは、自分自身の存在が消えてしまう恐怖と同じなのです。カネのところに、地位や、学歴や、快適な生活や、豪華な家など、別のものを当てはめると、話がいつそう具体的になると思います。人が信じられない代わりに、これらのものを信じて、不安から逃げようとするのです。

子どもにも、同じことが起こります。生まれたての赤ちゃんは、「自」の心と「他」の心が一体化していて、人の喜びは自分の喜び、人の悲しみは自分の悲しみです。親だけでなく、すべての人と心がつながっていると言えます。そうすると、生きている上での不安や悩み、苦しみはまったくありません。いま、ここにただあるがままで、すべてが満ち足りているのです。「赤ちゃんは無知なんだから当たり前だろう」と思う人もいることでしょう。確かにその通りですが、それはつまり、知識が身につくことと幸せに暮らせることとは、全然無関係だということなのです。

ところが、あらゆる人間は、成長してくると、この「自」の心と「他」の心が分裂してきます。そして、ほとんど例外なく、「自」ばかりがふくれあがり、「他」は小さくなっていきます。自分を優先し、自分を主張すると、他人のことが信じられなくなってくるのです。頼りにするものが自分だけになると、とても孤独になります。孤独は、自分の存在が消えて無くなってしまわないかという恐怖を生みます。自分を優先して生きる人間にとって、自分が消えてしまうのは、一番耐えられないことです。それは子どもでも変わりありません。

子どもは子どもなりに、この恐怖から何とか逃げようとしします。そのために、変わらないもの、動かないものに頼り、寄りかかります。成長していく中で、親やきょうだい、友だちを頼りにできるように、心が開かれてくれば、かなり幸せな子ども時代を送ることができると言えます。統制と自由の時期を説明した際、他者に心が開かれてくる時期は、およそ2, 3歳のころと、小学生のころだとお話ししました。

この時期に、他者に十分心を開き、信頼する気持ちが育ってこないと、不登校や引きこもり、摂食障害（拒食症や過食症）、アルコール依存や薬物依存などにつながってしまうおそれが強いと考えられます。そこまで病的にならなくても、テレビゲームに異常なほど

没頭したり、友だちや小さな動物をかなり残酷にいじめたりする子どもが、いま多くいます。

## 子どものストレス

現代の子どもたちにはストレスがかかりすぎており、心がゆがんでしまっているということが、いつも言われます。しかし、いまの子どもたちに、いったいどんなストレスがかかっているのでしょうか。ストレスをかけているのは、いったい誰（あるいは何）なのでしょうか。

よくやり玉にあげられるのは、塾やお稽古ごとなどです。学校で勉強勉強、それがやっとならしたら家にも寄らずに塾へ直行、カバンには夕食用のお弁当が入っており、いくつかの塾やお稽古をハシゴして、家に帰るのが毎晩 10 時ということはたいして珍しくない、などということがあります。

こうした生活を毎日続けていれば、誰でも疲れるに決まっています。肉体にストレスがかかれば、それは当然精神にも影響するでしょう。しかし、ここ数年は、こうした情勢にやや変化が見られるのです。

まず、公教育において、授業内容が減らされ続けていることはよく知られています。とくに、すでに導入されている「総合的な学習の時間」や、近々始まる完全週休二日制との関係で、教えるべきことがかなり減ってきています。学校行事も削られ、クラブ活動なども同様の扱いを受けつつあります。さらに、教育の方針は基本的に、教師が教え込むのではなく、子ども自身が興味や関心にしがたって課題を見つけ、自分なりの方法で解決することとされています。そして評価も、集団内での比較がもととなる相対評価から、人と比べず、その子なりにできていればよく、クラス全員が 5 になることもあり得る絶対評価へと変わってきています。こうして見てくると、学校での勉強は、子どもにとってどんどん楽になっていると言ってもいいのです。

学校とはくらべものにならない猛烈なしごきが当たり前だった塾も、様変わりしつつあります。少子化の影響で、バブル期には乱立していた塾や予備校は、淘汰の時代に入りました。いまでは、それぞれの塾も生き残りをかけて、特色や工夫をアピールし、生徒集めに懸命にならざるを得ません。まず、ただ単に勉強や受験テクニックを教え込むだけでなく、たとえば体験的な学習ができるように新たなカリキュラムを導入するところが増えていくようです。また、世の中のゆとり指向にあわせ、たとえば週末には授業を入れないと

か、家族そろっての夕食に間に合うようにコマを組むとかの配慮が見られます。このように、かつては死にものぐるいの修羅場ですらあった塾や予備校が、学校と同じく子どもに合わせた、はっきり言ってしまえば楽なものになりつつあると言えるのです。

いまや、高校は事実上、希望者全員に入学が保証されており、数年後には大学が同じ状態になります。こうなれば、悲しいかな子どもたちが勉強しなくなるのは当然で、塾がいままでのようにスパルタ方式を看板にしていたのでは、生徒が激減するのは火を見るより明らかです。塾や予備校は私企業ですから、何より社会情勢に敏感で、常に顧客のニーズを先取りしなければなりません。その現れが前記のような体質変化です。

#### 愛情不足が殻を作る

学校や塾は、子どもたちの生活のごく一部ではありますが、ここを見ただけでも、子どもたちにゆとりがないのかと問い直すと、首をかしげてもおかしくない状況です。衣食住に不自由がないのは当たり前で、ぜいたくが過ぎるあまり生活習慣病の恐れありと言われる始末です。手伝いや重労働を強制されることもありません。子どもたちはかつてないほどのゆとりの中に、どっぷり首まで浸かっているのではないのでしょうか。

では、現代の子どものストレスを高め、心をゆがめている元凶は、いったい何なのでしょう。ひとことで言うならば、それは親の愛情不足であると、私たちは考えます。すでに述べたことの繰り返しになり、しつこいようですが、いくらおいしいものを食べさせ、かわいい服を着せ、いくつも習い事をさせ、高価なおもちゃを買い与え、高級車に乗せ、豪華な家に住まわせても、そうしたことと本当の愛情とは、まったく別次元のことがらなのです。いま、世の多くの親たちが考えている愛は、子どもではなく、親自身を向いているのではないのでしょうか。ぜいたくで、快適な暮らしを保証してやれば、子どもはとくに不平も不満も言わず、だいたい親の言いなりになって成長していき、それは親にとっていちばん楽なことであるからそうしている、と、ここまで言ってしまっただけが過ぎるかも知れませんが、8割くらいは当たっているように思います。結局、子どものためではなく、親の都合なのです。

近年、遺伝子操作技術が進歩し、あらかじめ予定したとおりの生物を人工的に作り出すことが可能になっています。それはすでに人間にも応用可能になっており、「思い通りの」「理想的な」赤ちゃんは「デザイナー・ベビー」と呼ばれて、現実にもこの世に誕生しています。たとえばノーベル賞受賞者の精子とスーパーモデルの卵子を体外受精させて、赤



やんのほしい女性の子宮に入れ、その女性が出産すると、最高に頭がよくて、容姿抜群の赤ちゃんになるわけです。

こうした親子は国内にもいらっしゃるわけで、そうした人々をおとしめる気はありません。しかし、こうして「作り出された」子どもが、果たして幸せな人生を歩むのかと考えると、その保障はどこにもありません。人が幸せに生きることは、すなわち自分以外の誰かを幸せにすることと、ほとんどイコールだからです。才色兼備な人間が、思いやりも深いとは限りません。ご本人たちには酷な言い方ですが、「デザイナー・ベビー」は結局、親の自己満足の産物でしかないのです。子どもは親の欲にしたがって人生を歩まされるわけで、その時点ですでに不幸がひとつ生じています。

親の都合を見抜ける子どもは多くありませんが、心には影響がはっきりと現れます。親が本当の愛情を注いでくれない、守ってくれない、はぐくんでくれない、こうしたことが無意識のうちに積み重なっていくと、子どもは自分で自分を守らなければならなくなります。これもまた無意識のうちにそうなるのです。話を戻しますと、それが「自分の殻」となるわけです。多くの親は、その殻を作り出した張本人が自分であることに気づきません。それどころか「こんなに愛してきたのにどうして」と嘆き、子どもを責めるのです。後悔の矛先が自分に向く、多少良心的な人もいるかも知れませんが、元凶がおのれの愛情不足、あるいは自己愛にあったと心底反省する人は、多分まれでしょう。それでは、決して子どもは救われません。

いまこそ親たち、すべての大人たちがすべきことは、自分の欲や都合、執着やこだわりを捨てることです。誤解のないよう付け加えますが、生きる希望や目的、生きがいを捨てるというわけではありません。次の最終章で、夫婦関係や父性、母性について考える際、もう一度述べたいと思いますが、人生の目標や信念をもち、それを子どもに生きざまとして見せることは、何にも代え難い、最高の教育です。

人間は、おのれの欲望を満たすためだけに生きているわけではありません。人の役に立ち、人の幸せのために尽くすために生きることは、あらゆる動物の中で、人間にしかできないことです。つまり、人間らしい生き方とは、そこにしかないのです。ことばをあやつり、パソコンを使いこなすのは、教えればサルにだってできます。そんな技術や能力を追い求めても、決して人間らしい生き方をしたことにはなりません。

親の欲は、子どもにストレートに現れます。親の欲望実現のために生きることほど、子どもにとって惨めなことはありません。しかし、世の大半の人は、それこそが子どもの幸

せだと勘違いしていないでしょうか。これが私たちの杞憂であることを祈ります。

子どもは、善い人に触れあうことでしか、善い人になることはできません。親が善い人にならない限り、子どもも善い人になることはできず、結局は不幸な人生を歩まなければならないということです。ですから、子どもを育てるとは、親がおのれ自身の人格を磨くことにほかならないと言えます。「善い人」とはどんな人か、ということですが、おのれの生きがいが他者のために生きることであるという強い信念をもち、やさしく、明るく、こだわらず、前向きな人であるということにまとめておきます。本当は、とうていことばで言い表せることではないのですが。

夫婦として、父として、母として

#### 夫唱婦隨の復活

子どもは、ふつうふたりの親のもとで育ちます。何らかの都合で親が一人だけになってしまうことはありますが、子どもができたときには必ず父親と母親がいます。子どもの成長、そして子育ては、赤ちゃんがお母さんのおなかにいるときから始まっていますので、どんな子でも、期間の長短はあるにせよ、ふたりの親のもとで育つことには違いありません。

親子のあり方は夫婦のあり方の鏡です。したがって、よりよい親子関係を作り、善い子どもを育てていくには、その基礎によりよい夫婦関係が不可欠です。この本の締めくくりとして、この、よりよい夫婦関係とはいったいどんなものなのかを考えたいと思います。先に結論を申し上げますと、よりよい夫婦関係とは、夫がリーダーとなり、妻がそれをサポートするものです。古いことばで言えば「夫唱婦隨」の関係です。もはや死語と言えるものです。

こんなことを書くと、多分反応はまっぴたつに割れるでしょう。ひとつは「当たり前だ、そんなこと」というもの。もうひとつは「冗談じゃない、封建主義者がアンタたちは」というもの。現代の日本では（おそらく世界もですが）、後者の方がかなり優勢でしょう。女性の解放とか権利の確立、ウーマンリブなどといったことばすらもはや古くなり、いまさかんに言われるのは「ジェンダー（社会的な性差）」そして「ジェンダー・フリー」ということです。つまり、男らしさ、女らしさというものの大半は、社会的に作られたもの、しかもたいがい男に都合よく作られたものであって、そうしたものに縛られて考えたり行動したりすることはよそう、という考え方です。例を挙げれば、青は男の子の色で、赤は女の子の色？ 誰が決めたのそんなこと、反対だっていいじゃない、とか、男の子が「くん」付けで女の子が「さん」付けなのはどうして？ 男も女も「さん」でいきましょう、おとなはそうしているではないか、などといったことです。余談ですが、「ドラえもん」をテレビで見ていると、「しずかちゃん」が男の子に対して「のび太さん」「たけしさん」「スネ夫さん」と、必ず「さん」付けで呼んでいますが、これは以前からなのでしょうか。それとも最近の風潮にしたがって「くん」付けから変えたのでしょうか。どうでもいいことですがちょっと興味があります。

女性解放などと言って「女性、女性」と強調すると、かえって女性の特殊性を自ら認め

ることになり、戦略的に不利だという計算があるのでしょうか。「ジェンダー」という視点で語ることにより、男も女もないんだということで同質化を図る意図があるようです。

さて、問題は、こうした動きが世の中の安定や人々の幸せに貢献しているかどうかということですが。またまた反発を覚悟で言いますと、私たちは逆に社会の混乱を招いたのではないかと思うのです。多くの家庭や子どもたちがおかしくなり、女性も自分で自分の首を絞めることになっているのではないのでしょうか。女性が権利を主張し、それを守るのはあながち悪いことではありませんが、いまではそれが行きすぎて、多くの女性が女らしさ、あるいは母親らしさを捨ててしまい、その弊害がいろいろな形で現れているように見受けられます。

#### 父親不在の真実

女性は男性がいるからこそ女性であります（もちろんその逆も真なりです）。ということは、男性（父親）を語ることは、必然的に女性（母親）を語ることになるわけです。

日本の家庭、家族において「父親の不在」が叫ばれて久しいものがあります。そして、第一にその責任をとらされているのは会社、企業です。高度経済成長の時代以降、日本中の男という男、父親という父親はほぼ例外なく企業戦士になり、仕事の虫になり、家庭を顧みないこと甚だしいものがあるとされ、バブルの崩壊を経て長い景気の沈滞期にある現在、そのことへの反省がかつてない盛り上がりを見せています。「育児をしない男を、父親とは呼ばない」というコピーが、賛否両論あるにせよ世間の話題となり、父親が子育てに奮闘した体験記が次々と出版され、「男も育児休暇を取ろう」という呼びかけはすっかり社会に定着した感があります。

男性（父親）が育児や家事に積極的に参加することは、もちろんいいことです。だいたい、この「参加」ということばにどうも消極的なニュアンスがあり、男も家での仕事をおのれの領分とわきまえ、「してやっている」とか「やらされている」などという雑念を捨て、専心勤労で取り組むべきだと私たちは思います。

しかし、そうすれば、家庭での父親の存在感が高まり、子育てやしつけ、教育に好ましい影響が出るのでしょうか。そこまで期待するのは甘いと、私たちには思えます。父親の父親たるゆえんは、家事労働をせさせとする程度のこととは、まったく無関係です。家事などというのは、結局のところ単なるやつつけ仕事であり、男がしようと女がしようと、要はサッサと能率よく片づいていけば、それでいいのです。

数年前、『父性の復権』という、よく売れた本がありましたが、いまの日本では、現役としての父親をほぼ引退した人も、父親業真っ最中の人も、これから父親になろうという人も、つまりは男という男すべてが、真の父性とは何かについて、自信をもって語る事が難しくなっているのではないのでしょうか。男自身に分からないのですから、女に分かるはずがないと言えるでしょう。

大まかに言って、いま、「父性」を語る際にはふたつの相反する立場が存在し、人々はその間を揺れ動いていると考えられます。この本の最初の方であげた、スパルタ派とナチュラル派に通じるのでふたつになるのですが、片方は父性に強力な権威を求め、家族や子どもを半ば強引に引っ張っていくのをよしとするものです。もう一方は、権威ある父親が子どもを抑圧すると考え、リードするにしても、友だちか、せいぜい先輩程度の距離感で、なるべく子どもと対等につきあうべしとするものです。現役を引退したか、しつつかある人は前者の父性を求め、現役の人たちは「いやいや自分にはとてもそんな自信も実力もありません」と言って、後者のスタンスをとるとというのが一般的のように見えます。

私たちはすでに、夫婦のあるべき姿は夫唱婦随と言いましたから、それだけ取り上げると、単純にスパルタ的な父親の復活を願っているように見えると思います。確かに私たちは、父親に権威が必要だと思います。そうでなくては家族を束ねられません。しかし、「父親よ、厳しくあれ」とだけ主張することには、危険を感じます。そうするとすぐに、しつけのためには体罰（暴力）も辞さないということになり、今の世の中では体罰がすぐに虐待へと発展するからです。ただ厳しければいいというほど、父性は単純ではありません。

父性の基本は、父親がおのれの人生の目的、生きる意味をとことん追求するところにあります。それは、出世とか、地位とか名誉とか、いわんや金儲けとか道楽とかといった、俗な欲望の追求とは違います。ある程度の経済的基盤を固めること、つまり生活のためのお金を得ることは、もちろん大切です。そういうものを軽視するわけではありません。しかし、人間が人間として生まれ、人間らしい生き方を追い求めて生きていくことは、お金やモノを超えたかなたに見据えるべき問題なのです。

「自分は何のために生まれてきたのか」「あるべき生き方とは何か」「自分がいま生きていることに、どんな意味があるのか」、こういう、いわば哲学的な問いは、いまの世の中で非常に煙たがられると言いますか、場合によってはバカにされる傾向があります。しかし、いまの父親から父性も権威も失われていると言うのなら、それはすなわちほとんどの父親が、こうした問いを放棄しているからだと考えるべきです。

生きる意味を問う

おのれの人生の意味を考えるとときには、自分ひとりだけのことを考えるわけにはいきません。人間は誰しも社会的な存在であり、すなわち他者の存在なくして自分自身の存在はないからです。「誰か他の人」がいるから「私自身」がいるのであり、自分一人だけでこの世に存在している人は、誰一人としていません。このことを自覚できる生き物は、人間だけです。いくらサルやイルカが賢くても、こういうことは絶対にわからないし、考えることもありません。

このように、人間は人間である以上、どんな人も必ず「他者とのつながり」や「他者に開かれた心」をその人自身の中にもっています。人間が生きるということは、他者と共に生きることなのです。ですから、「自分がどう生きるか」ということは、「他者と共にどう生きるか」「他者のためにどう生きるか」ということでもあります。他者とのつながりを無視して人生の目的を考えても、まったく意味がないのです。もう少し言えば、地位や、名誉や、財産や、快楽を追求し、獲得できたとしても、それが他者との関係で意味をもつものでなければ、きわめてむなしく、くだらないものに過ぎないわけです。棺桶やあの世にお金はもっていけないのであり、そんなことにとらわれていては、いよいよ死ぬ間際になって「もっと生きたい」「もっと稼ぎたい」「もっとぜいたくをしたい」と、あさましく醜態をさらすことになってしまいます。醜いのが本人だけならば勝手ですが、たいがいの場合家族や縁のある人を修羅場に巻き込んで、迷惑をかけることになります。

ちょっと深入りしすぎましたが、いま、多くの父親たちは、こうしたことにきわめて無頓着です。ですから、子どもに対し、人生について語るべきことをほとんどもたなくなってしまうています。その上で、子育てのテクニック、たとえば休日にはどんなふう子どもと過ごすかとか、アウトドアに子どもを連れ出して尊敬されるには何をどうしたらいいかとか、父親として、子どもに言うべきとっさのひとは何かとか、そんなことばかりがもてはやされます。こんな風潮は、基礎工事抜きで砂の上にせっせと家を建てているようなものです。

いま、私たち父親が緊急に取り組むべきなのは、おのれを振り返り、反省し、自分自身の生き方をしっかりと見据えることです。そこでは、必然的に、他者や社会との関係が視野に入ってきます。そして、「自分がこの世に生まれ、生きていく意味は何か」という大問題に、真正面から取り組むとき、その問題を厳しく追求し続ける姿が、生きざまとして具体化します。その姿を子どもに見せることが、最大にして最高のしつけであり、教育だ

と言えます。そうした父親には、意識しなくても、おのずと権威が備わってきます。犯しがたい威厳が感じられ、子どもはいい意味で恐れを抱くだろうと思います。いま、子どもが大人を恐れなくなっています。できるだけそうなるように育てているのですから、当然です。そしてその結果、世の中はどんどんメチャクチャになっています。もはや相当手遅れですが、いまずぐに立て直さなければ、それこそ破滅は時間の問題でしょう。

### 生み出し、包み込むのが母

このような生き方は、男性（父親）だけがいくらがんばってもできるものではありません。女性（母親）の理解と協力、支えがどうしても必要です。今度は焦点を女性に移して考えてみたいと思います。

「女性は男性の付属物ではない」というのが、女性解放運動始まって以来のスローガンのひとつであり、その克服はいまだ達成されていないと考えられて、マスコミも女性の権利獲得と自立のために、連日大量の情報を流し続けています。

確かに女性は男性の付属物でも所有物でもありません。男性が女性を束縛している事実があるならば、それを断ち切って社会に出たり、生き方を追求したりすることはおおいにすすめるべきだと思います。

しかし、その上で私たちはあえて「夫唱婦随」ということを申し上げたいのです。男性には男性としての、男性にしかできない役割があり、女性も同様です。それを最大限善い方向に伸ばすのが、それぞれの性にとって幸せなことと言えるでしょう。「ジェンダー云々」にこだわるあまり、何でもかんでも同等対等、同質同視点で物事をとらえ、語るの行きすぎです。

男性の役割とは、男性は体力的に女性より勝っていますから、それを生かすことです。家の外に出て働くことは、どちらかと言えば男性向きということです。女性にそれができないとは言っていない、念のため。

女性にしかできない女性の役割とは、子どもを産み、育てることにつきます。人間は誰しも、他者の存在をおのれの中に宿しているということを、いままでいろいろところで述べてきましたが、女性は妊娠することで、まさに自分自身の中に他者を宿し、はぐくむのです。したがって、女性の生きる意味は、他者のためにこそあると言えるわけです。

男性は、女性によって生み出された存在です。この世に放り出された、言うなれば「はみ出し者」です。はみ出し者の本質は、おのれ自身を追求し尽くすことです。極端に言う

ならば、人生の意味や生きざまをエゴイスティックに追求するのが、男性の生き方です。しつこいのを承知で付け加えれば、人間としての本当の生きざまには必ず他者との関係が含まれます。

女性の本質は、男性とは違います。母なる大地、母なる海と言うとおり、女性性、母性はすべてを生み出し、包み込み、はぐくむものです。

いちいち先回りして言い訳がましいことを付け加えるのはいやなのですが、あえてそれをしておきますと、ここまでを読んで、何らかの事情で妊娠・出産ができない女性は、女性の本質を失っているのか、という異論が出てこないとも限らないと思います。私たちはここで、精神のあり方、心の問題としての父性、母性、男性性、女性性を考えています。ですから、実際子どもを産んだとか、子どもがいるとかいうことも、当然大切なことですが、それ以上に、そういう心があるかどうか、もてるかどうかという次元で、お話をしているのです。

#### 民主主義と女性

さて、話を元に戻します。母性の本質は、子どもをはじめとする他者を包み込み、認め、許し、後押ししてはぐくむものです。「縁の下の力持ち」と言うこともできます。おのれを追求し、おのれを伸ばそうとするよりも、反対におのれを抑え、我慢して、その分他者を育て、伸ばしてあげようとする姿勢です。

ここまで読んだだけで、フェミニストの方々は「時代錯誤！」「男尊女卑！」「女性蔑視！」と怒るでしょうか。女性だけでなく、男性からも「そこまで言っちゃっていいのかなア」という声が聞こえてきそうです。

実際、戦後半世紀以上に渡って行われてきた民主主義教育では、こんなことは一切教えられていないと思われます。男女同権が大前提であり、男にできて女にできないこと（またはその逆）などあるはずがない、もしあるとすれば、それは社会や風習や習慣や常識や固定観念がそうだからであり、そういう誤った考えはぶち壊していかなければならないと誰もが考え、子どもにそう教えてきました。男の役割、女の役割など、口にただけで冷たい視線が矢のように突き刺さり、さらに近ごろではセクハラ発言と決めつけられても仕方がない雰囲気すらあります。

男女が同権であることは確かです。そして、女性も男性と同じように、おのれの生きる意味を追求していいし、積極的にそうするべきです。しかし、女性にとっての「生



きる意味」とはいったい何なのか、そのことをもう一度考え直してみる必要はありませんかと、私たちは言いたいのです。

現代では、男にとっても女にとっても、「生きる意味」が、はっきり言って何だか分からなくなっています。分からなくなっていると言えるし、誰もがそんなことを知ろうとも、知りたいとも思わなくなっている、とも言えます。そんなことが分からなくても、知らなくても「自分は十分幸せ」だし、「これから先もずっと幸せだろう」と、多くの人が考えているのではないのでしょうか。

そう言うときの「幸せ」って、一体なんでしょう。それを一言でまとめるなら、便利で快適な生活がエンジョイできること、になるように思えます。そして、肉体的にも精神的にもストレスがかからず、毎日楽しく笑って暮らせること、です。仕事は、そういう生活を買うお金を得るために、イヤイヤするものになりつつあります。したがって、仕事そのものの意味や喜びが、いま、次第に薄れてきています。

それはつまり、「人さま」のために何かをすることの意味が、なくなってきたということです。働くことの意味が、自分が食べるため、自分がぜいたくをするため、自分が遊ぶため、自分が楽をするためというように、すべて自分を基準に考えられています。

「いや違う、家族を、子どもを食わすため、養うために働いているんだ」という意見があるでしょう。それは当然だし、親が稼いだお金で家族が生きていけるのも、当たり前の事実です。しかし、いまは大人も子どもも、必要のないぜいたくな暮らしにどっぷり浸かっています。人によって多少の違いや差はあるでしょうが、とても「食うために働いている」と言える状況ではありません。「食うため」だけだったら、もっと少ない収入で十分やっていける家庭が、大多数ではないのでしょうか。「食う」ほかに余ったかなりのお金が、ぜいたくをするために使われています。そしてさらにタチが悪いのは、子どもにさせてやりたいぜいたくとは、結局のところ親の欲に過ぎないことです。高価な文房具やおもちゃ、いくつもの塾や習い事、流行の服などには、「子どものため」というたてまえの裏に、飾り立てられた子どもに自己満足する親の欲という本音が隠れているのです。多くの人にとって、すべてが自分中心でまわっている（まわそうとしている）のは、悲しむべき事実です。

前にも書きましたが、人間は、いくら自分が幸せになったと思っても、そのことが他者や社会にとって意味をもつものでなければ、結局はむなししいものであることを、いつかは思い知らなければなりません。生きている間にわからなくても、いよいよ死ぬ間際になっ

て、それまでの人生を振り返らざるを得ないとき、その事実打ちのめされるのです。人間にとって、自分が幸せになるとは、すなわち誰かを幸せにすることです。相手は配偶者や子ども、子孫に限りません。あらゆる人の幸せのためにこそ、自分の生きがいがあると実感でき、実際そのように生きられることが、人間として最高に幸せな生き方であると言えます。自分の欲やこだわりにしがみついで生きているのでなければ、いつ「お迎え」が来ても、「これで私の役目は終わった、ありがたいことだ」と、おだやかな気持ちで旅立っていくことができます。たとえそのときが明日来ても、です。明日来ようが30年後に来ようが、一切こだわらず、ただ毎日を、そのときそのときをひたすらに、懸命に生きていくだけなのです。

ちょっと長くなりましたが、人間にとって、自分の幸せは人の幸せであり、反対に人の幸せが自分の幸せです。母の、女性の役割とは、子どもをそういう人間に育てることです。そのためには、当たり前ですがその人自身が人の幸せを自分の幸せと思える人間でなければなりません。あらゆる人の幸せが実現していなければ、それを悲しみ、そのために努力できる、少なくとも努力しようと思える人でなければなりません。母がそうなれるためには、そのまた母がそうでなければならぬのも当然です。

自分の母親のことを悪く言われたら誰でも腹が立つでしょうが、一般的な話として読んでください。いま、「お母さん」になっている人のそのまた「お母さん」は、戦後生まれである方がかなり多いと思います。学校では民主主義を徹底的に教わってきています。また、男と女は権利も同じ、能力も同じと言われて育っています。さらに、青春時代は高度経済成長期に重なっています。そういう中では、女性として、母としてどう生きるべきかは、あまり重視されないのが成り行きではないでしょうか。ひとりの「ニンゲン」として、「コジン」としていかに生きがい追求するか、どこまで権利を獲得できるか、が、誰にとっても大切なことになります。そうした時代をへて「お母さん」になった女性たちは、当然教わったとおりに子育てをします。女性として、母として何かを教わり、身につけてきたわけではありません。繰り返しますが「ニンゲン」「コジン」として生きなさいと教えられてきたわけで、子育てにもそれが影響します。そうした育てられてきた女の子たちが、いまや大人の女性、お母さんになっているのです。

## 自己主張する女性

この間、20世紀最後のお祭り（騒ぎ、をつけたら怒る人が多いでしょうが）、シドニーオリンピックがありました。いろいろなことが伝えられ、語られましたが、その中に、「女性の進出と活躍が、これほど目立った大会はかつてなかった」という意見が多かったように思います。もちろん「素晴らしいことだ！」という意味で、です。「それに引き替え男は元気がなかった」「はっきり言えば少々情けなかった」と付け加える人もいました。

男性選手の話はさておいても、女性があればほど目立ったことには、一体どんな意味があるのでしょうか。「よかったよかった」「素晴らしい」という賛美ばかりが聞こえてきて、その意味を的確にとらえたものには、私たちの知る限りでは出会いませんでした。

あれは、善くも悪くも女性の自己主張がきわまった姿です。女性が、自分というものを追求することを第一にし、いちおうのゴールとしてたどり着いたのが表彰台だというわけです。リアルタイムで全世界に中継され、何億という人から惜しみない賞賛の声を贈られるのですから、本人の満足感、成就感、達成感は察するにあまりあります。中には「金確実」と言われていながら銀や銅に終わった人もいて、悔し涙を流すわけですが、見ている方にしてみればどちらでもいいじゃないのという気がしないでもありません。本人や家族、指導者や練習仲間にとっては、何年間にも渡るそれこそ血のにじむような練習と鍛錬の成果ですから、絶頂感や、逆に奈落の底に落とされるような思いを味わっても、当然でしょうが、いずれにせよ、女性選手のガッツポーズや笑顔、または泣き顔が、確かに目立ったようです。

あるとき新聞に、活躍する女性選手に対して「お母さん選手」とか「主婦選手」とか「妻と競技者の両立」など、余計な形容詞がつくことが多く、目障りでしょうがなかったと述べるコラムが載りました。男性の選手に対して「お父さん選手」だの「夫として」だの、そんなことがただの1回でも言われたことがあるか、女性の活躍は実に見事だったが、日本の世間は相変わらずそんな女性たちを色眼鏡で見たり、古くさい枠にはめようとしていたりしている、いいかげんにそんな考えを捨てたらどうかと腹を立てている内容でした。

この内容自体に、それほどけちをつける気はありません。言っていることはさほど間違いではないのですが、ただ「こんなことを新聞に書いて、世の中がよくなると思っているのか」という思いをもったのが正直なところです。

オリンピックに象徴されるように、多くの女性が自己主張を始めました。そして、男性を支え、子どもを産み育て、家族を守ることを、「そんなこと、私の仕事でもないし生き

がいてもないのよ」と、積極的に放棄する人が増え始めたのです。「私には意欲も能力もある。やる気のない男より、よっぽど会社や世の中のためになるわ」という自信も、みなぎっています。

確かに、男は近年、めっきり元気がなくなってきました。人生の意味や生きがい、生きざまをとことん追求するのが男の男たるゆえんと言いましたが、ほとんどの人にとって、一体何が生きる目的なのか、生きがいや生きざまとは何で、果たしてそんなものがあるのか、こういうことがわからなくなってしまったのです。ほどほどの経済的豊かさを実現すると、その先に何があるのかが見えず、見ようとしなくなっているのではないのでしょうか。

「アンタ、しっかりしなさいよ、ワタシがついてるでしょ。ホラ、がんばって」と、男を叱咤激励し、頼もしく後押ししてくれる女性はいなくなりました。その代わりに、男どもがどんどんフヌケになっていくのを見て取り、チャンス到来とばかりに、そやつらを蹴散らし蹴落とし、自分が上にのぼろうと奮闘する女性が増えてきたのです。元気がなくなった男を尻目に、女性たちはパワーに満ちあふれ、夢を追い求めているように見えます。

悪いことではありません。しかし、多くの女性が求めてやまない「夢」とは、いったい何なのでしょう。いま以上の収入、リッチな生活（シンプルでもゴージャスでも）、より上の地位、社会的な名誉、忠実な部下・・・、こうした具体的なもののように思われま

す。多くの男性は、だいたいバブル経済のときまでに、これらをほぼ獲得したのではないのでしょうか。そして、バブルがはじけ、日本全体が長い長い不況のトンネルに入り込んでしまうと、それまで宝物だと思っていたものが忽然と消え失せてしまい、あるいは急に色あせてしまい、人生の目的も生きがいも、やる気も感じられるずに途方に暮れているように見えるのです。

反対に多くの女性が、こんどこそ私たちの番だとばかりに、それこそ雨後の竹の子のごとくニョキニョキと頭角を現し始めています。たとえば悪いですが、男どもの累々たる屍を肥やしにして、そこに根を張り、枝を伸ばし葉を茂らせて、いよいよ花を咲かせようとしているのです。女性たちの栄華は、おそらくこれからが本番でしょう。

何を求めるべきなのか

しかし、お金とか地位とか名誉とか、限りあるものを追いつけるのであれば、多くの女

性たちも遅かれ早かれ男性と同じ挫折感と喪失感を味わうことになるでしょう。もちろん、そうした夢を追求することを単純にむなしいとか無意味だとか言って軽蔑するわけではありません。長い人生のうちで、いちどは追い求めてみるのも結構なことだと思います。でも、人は人と出会って人となり、人の中で生きていくことでだけ、心からの幸せを感じられます。人としての幸せは、他者とのふれあいの中にしかありません。お金に代表される「モノ」の中には、幸せを見いだすことは決してできないのです。

多くの女性がいま、このことを見失っているのではないかと、私たちは恐れを感じます。もっとも、それを女性だけのせいにはできません。現代社会では、この世のあらゆることを「モノ」のレベルでとらえようとしています。それが科学技術、文明の進歩からです。

どういう意味か、少しだけ具体例を挙げますと、ひとつには臓器移植の問題があります。脳死などの問題もからんでいて、すなわち、二度と生き返らないことが確実な肉体ならば、心臓が動いていようがさわるとあったかろうが、「カラダ」という物体、「モノ」に過ぎないわけで、それを他人の役に立てる、早い話が命を救うのに何をためらう必要がある、という話です。もちろん反対意見も多くてなかなか決着はつきませんが、それは、人間をモノとして扱っていいかどうか、ほとんどの人がわからないからです。先にも話題にした生殖医療の現場でも、卵子や精子が「モノ」として扱われ、さらに進んで売り買いされているという事実があります。

「ヒトゲノム計画」では、遺伝子というモノを調べれば、人間がわかると期待されています。それから、近ごろ、脳の研究の進展にはすさまじいものがあり、その中で多くの脳科学者が最終的に目指しているのは、脳という「モノ」を調べて、人間の心を明らかにすることです。脳のどこで、どんな化学的变化が起こると、人間の心がどう移り変わるのかを知ろうというわけです。それがわかれば、人間の心の動きを、外側から自由に操作することができるようになると信じられています。こう見てくると、やはり、人間はつまるところモノに過ぎないと考えられていることがわかります。

多くの人が、ためらいながらこうした時代の流れに乗っています。きっと、「これでいいんだ」と、無理に自分を納得させている場合も、少なくないでしょう。現代人は次第に、他者をモノとして見るようになって来ている、そうとしか見られなくなって来ていると言えます。30年、50年先の世の中を想像すると、空恐ろしくなります。

このような時代の流れは、おそらく人間を不幸にすることでしょう。他者を「モノ」と

してしか見られないとは、他者が何を喜び、何を悲しむのか、何を期待し、何をいやがるのか、こうしたことがわからなくなることです。わかろうとも思わなくなることです。それは、人間の人間たるゆえんを、自ら捨て去ることです。

人間と動物とをへだてるいちばんの違いは、他者の気持ちをくみ取ることができる、くみ取ろうとするところにあります。動物は、どんなに賢いサルでもイヌでもクジラでもイルカでも、決して自分以外の存在の気持ちを思いやることはありません。そのように見えることがあっても、それはあくまでも本能に基づいた行動であって、人間のもつやさしさや思いやりとは、区別して考えるべきものです。

ですから、他者に思いをはせることのない人は、まるっきり動物並みの存在と言えます。いや、動物は他者への配慮がなくても、そのことによって横暴に振る舞ったり、傲慢になったりはしません。「ワガママ犬」というのが時々いますが、あれはイヌ特有の習性が出ただけで、決して必要以上にいばっているわけではありません。どんな動物でも、与えられた命をただひたすらに、一生懸命生きているだけです。

ところが、人間は違います。他者への配慮がなくなると、同時に「自分だけが得したい」「楽したい」「ぜいたくしたい」「いばりたい」という気持ちが、強烈にふくれあがってしまいます。その気持ちに引きずられて、平気で他者を悲しませ、ないがしろにし、傷つけてしまうのです。最後には、人を殺してもまったく心の痛みを覚えなくなるころまでいくことになります（若い世代にこういう人間が現れ始めています）。これは、人間だけがもつ悲しい宿命です。ですから、他者への思いがなくなった人間は、動物並みどころか、動物にも劣る存在に成り下がってしまうわけです。

科学技術の進展と同時に起こりつつある「人間のモノ化」は、人間を動物以下の存在にってしまう危険性を、つねにはらんでいます。

## 母性の回復

一刻も早くここから引き返さないと、人類の滅亡は早まる一方ではないかと危ぶまれます。とうとう 21 世紀となったのに、世界に明るい話題はきわめて少ないのが現実です。人類が本当の幸せをこの手に取り戻すために、いくつかの道筋が考えられるでしょうが、そのひとつとして、あらゆる女性が本来の豊かな母性を回復することが、いちばんにあげられます。何度も繰り返しますが、子どもを産み、育て、社会に送り出すことに最高の意義と価値を見いだすことです。そのためには、自分自身の欲や都合、こだわりや思いこみを

最小限に抑えることです。そんなことをしたら「自分」がなくなってしまう、と憤る方は多いと思いますが、決してそんなことはありません。逆説的ですが「自分」を抑えて抑えて抑え抜き、ついには捨てられるまでの境地に達したとき、そこに「本当の自分」というものが立ち現れて来るとも言えるのです。そんな心境はことばで言ってわかるものではありませんし、すべての女性にはそう簡単に要求できることでもないですから、話はこの程度にします。しかし、歴史上、夫や家族、子どもに尽くすことだけに生涯を捧げながらも、決して奴隷で終わったのではなく、人間として尊い人生を送ったと考えられる女性は多くいたでしょうし、みなさんもそうした人をひとりやふたりは思い浮かべられると思います。

また、母性の働きとして、父性を支えるということがあります。女性が男性を支えなくなったことは、すでにさんざん実例を挙げてきました。これは民主主義社会の必然的な結果でもあります。民主主義では、あらゆる人が同等対等なのが大原則で、支える者と支えられる者がいるという発想は、差別を生むとされるからです。

母によって、妻によって、女性によって支えられ、存分におのれの生きざまを追求するような男性は、もはや絶滅寸前の天然記念物です。そもそも、ほとんどの男性にとって、ときには命をかけてでも追い求めるようなものがなくなってしまったし、見えなくなってしまったとも言えます。かつて、はっきり言えば敗戦まで、多くの男性には天下国家の行く末を案じ、おのれの命を投げ出しても「お国」を守る覚悟がありました。「すばらしい！これこそ『個』を捨て、『公』に生きる人間のかがみだ」と、太平洋戦争中の男（銃後を守った女も含まれますが）の生きざまを賛美する声が、近ごろとくに高まっています。しかし、こうした覚悟が本当に「公」だったかということ、そうは言えません。「お国のために命を捨てる」という考えは、残念ながら間違いです。

いまは、この問題にこれ以上深入りできませんが、このような国粹主義、国家主義の思想は、昭和 20 年 8 月 15 日を境にして、百八十度ひっくり返ります。「滅私奉公」は悪の思想とされ、かわって民主主義こそが最高の考えだと言われるようになりました。あらゆる人間は、自由に、そして平等に、自分自身の幸せを追求する権利があるという考え方が大原則となりました。戦後の焼け跡の中で、幸せとは何かを考えたとき、それは何よりもまず経済的な豊かさを実現することだと誰もが思ったのは、当然のことです。そして、男性の多くは、豊かさを獲得することを第一に目指し、そこにおのれの生きがいと夢を重ねて、猛烈に働いてきました。多くの女性が支えてきたのは、会社人間、企業戦士としての男性です。こう言ったら怒る人が多いと思いますが、女性は、自分と、経済的、物質的豊

かさをつなぐパイプとしての男性を支え、たててきたのです。

高度経済成長を経て、戦後 20 年を過ぎるころから、国民が一丸となって目指してきた経済的な豊かさが、次々と実現されるようになってきました。1970 年代に入ると、国際社会での日本の地位も、盤石なものになります。多くの男性は、このころになると、だんだんと夢を実現し、欲しい物は何でも手に入れられるようになってきました。それまでの猛烈な上昇志向が、だんだんと失速し始めます。それにつれて、生きがいとは何か、本当の幸せとは何か、徐々に不明確、不透明になってきてしまいました。仕事にしても、いったい何のために働くのかが、わからなくなってきたのです。他者のためはおろか、家族のために働くことにも、意味を見いだせなくなる男性が増えてきました。アフター 5 や休日には、趣味や道楽に没頭し、自分だけの世界に閉じこもる傾向が、世の男性に強くなってきた面があるように思います。

さて、呆れたのは女性です。「ナニヨ、冗談ジャナイワ」と憤慨するのも、無理はないかも知れません。したいことも、欲しい物も我慢して、ひたすら夫と家族を支えてきたつもりだったのに、当のダンナは家事や子育てを全部押しつけて来るばかりか、暇なときにはしたいこと（女性の目から見るとくだらない遊び）ばかりして、こちらを見向きもしない、こんなろくでもない男連中、なんでワタシが支えてやらなくちゃならないの、そんな義理、これっぽっちもありませんからね、というわけです。もともと子ども時代から、民主主義教育を徹底して受けてきた女性たちです。おのれの幸福を追求したい権利意識が強いのは、男性と何ら変わるところがありません。

夫を、家族を支えることを、積極的に放棄する女性が増えてきました。具体的には、亭主の稼ぎだけで我慢する（させられる）なんてアホらしいことはやめ、自分の手で稼いだお金を、自分の好きなように使うということです。加えて、世の男性の多くが将来に夢を描けず途方に暮れていますから、キャリアアップを目指す多くの女性にとっては、まさにチャンス到来です。

男性はというと、こうしたエネルギー充填 120%の女性たちに、ただただ圧倒されるばかりです。そして、「いや、近ごろの女性の活躍ぶりは実にすばらしい。彼女たちがもっと働きやすくなるように、われわれも努力しなければ」などと、どうにも迫力に欠けることばかり言っています。「キミたち、このごろずいぶんものわかりがよくなったわネ、この調子でどんだんがんばりなさい」と足を組む女性の前で、「はあ、どうも恐れ入ります」と、精彩に欠けること甚だしいものがあります。



「女はなあ、男の言うことを黙って聞いていりゃあいいんだ、つべこべ抜かすと叩き出すぞ」と、公式な場で発言しようものなら、「不当差別」「人権侵害」「セクハラ」「名誉毀損」等々で裁判になります。そしておそらく負けるか、きわめて不利な条件で和解になるでしょう。

#### 弱肉強食の世の中

こう見てくると、いま、男女間には弱肉強食の原理が支配的なことがわかります。そして、おおかたの男性はやる気も実力も失いつつありますから、この原理は女性に有利な方へ傾いています。女性が、より多く、「男性並み」に経済的豊かさを享受できるようにしようということです。完全な実現にはいま一步であっても、世論の方向は固まっています。さらに、男女の問題に限らず、いまや人類全体が弱肉強食で動いていることは、あらためて言うまでもないことでしょう。

このように言うと「人間関係が弱肉強食でなかった時代があるのか」という、開き直った反論が聞こえてきそうですが、かつては、宗教、哲学、思想、道徳、常識、習慣などといったものが、人間の行動を強力に規制してきました。たとえ弱肉強食が「ホンネ」であっても、「タテマエ」がそれを抑えてきたのです。そうした「タテマエ」の束縛から人間を解放しようとしてきたのが民主主義思想です。そして21世紀を迎えたいま、民主主義は他のあらゆる思想を凌駕する唯一の行動基準になりました。

民主主義は弱肉強食を認め、そればかりか「もっとやれ、もっとやれ」とけしかける制度です。そうなるとまず国と国とが競争しますから、国家事業としての公教育では、とにかく相手に勝つ知識と能力を子どもに植え付けるのが最優先課題になります。すると、いまの日本では「人格の完成」などと悠長なことは言っていられないとばかりに、教育基本法を改正せよと騒がれます。トップランナーを育成せよ、エリート教育をためらうなという意見が続々と出されます。しかし大人が躍起になると反比例するように、子どもや若者は覇気をなくしていくように見えます。

社会の中で、人と人、男と女は奪い合い、足を引っ張り合い、傷つけ合うのが日常茶飯事になります。夫婦、親子、きょうだいの間ですら、それが当たり前になってしまうのです。もちろん昔からこういうことはありましたが、多くの場合、誰もが「これは人の道に外れている」と反省したものでした。しかし現代では「人の道」など死語になっています。そんなことより、実際にどれだけ自分が得するかが、誰にとってもいちばん大切になって

いるのです。

こうした風潮を喜ぶ人は、まずいないでしょう。みんなが「困ったなあ」「弱ったなあ」「いやな世の中だなあ」「どうしたらいいのかなあ」と頭を抱えています。しかし、これは、長年行われてきた子育てと教育の「たまもの」なのです。そのことをはっきりと自覚し、反省するところから始めない限り、どんな対策やアイデアをひねり出したところで、しょせんは空念仏、絵に描いた餅にしか過ぎません。

## 民和主義

同じことを、手を変え品を変えて言い続けてきたわけで、結論もやはりすでに述べたことの繰り返しになるのですが、おのれの損得にとらわれて、人と競い合い、奪い合い、傷つけ合うのはもうやめましょうということです。それよりも、譲り合い、許し合い、分け合い、愛し合いましょうと言いたいのです。

先頃亡くなられましたが、中村元先生という、世界的に有名な仏教学者が居られ、この先生の膨大な著作の中に、『日本人の思惟方法』というものがあります。この中で先生は、古来の日本人や神話に登場する神々には「寛容の徳の著しい民族である」「親和感・寛容の精神が著しい」「なごやかな親和感と愛情が支配している」「寛容宥和の精神が著しい」等の特徴があると、繰り返しご指摘になっています。別の本では、これにはかなり狭い土地を大勢で耕して田畑を作り、さらにそれを何代にもわたって守り続ける必要があったという、日本人独特の生活様式が影響してきたのではないかという考察をなさっています。譲り合い、許し合いは、日本人に伝統的に豊かだった心のはたらきなのです。そうして、狭い国土に世界有数の人口を抱えながら、数千年もの間平和な社会の営みを続けてきたと言えます。

日本人の思惟方法も、長い歴史の間に少しずつ変質してきましたが、わずか半世紀前に起こった、欧米民主主義の直輸入によって、古来著しいと言われた寛容宥和の精神は、徹底的に排除されました。そんな大げさな、という方もいるかも知れません。しかし、これが事実であることは、戦後史を少し眺めただけでも、指摘できる点が多いと思います。損得勘定がいちばんに来る民主主義を信奉している限り、ノストラダムスではありませんが世界の破滅、人類の滅亡は避けがたいと思います。人類は核燃料や核兵器、IT、遺伝子操作や臓器移植の技術など、持つてはいけなかったかも知れないものを持ちすぎているからです。ギリシャ神話ならば「ダモクレスの剣」というところで、つまり自分たちの頭の

上に馬の尻尾の毛一本で剣をぶら下げているのです。目先の損得に惑わされた人が、少しでも科学文明の成果を誤った方向に使えば（始末に負えないのは当の本人にそれが「誤っている」とわからないこと）、連鎖反動的に破滅が引き起こされます。

新世紀を幸福に、平和に生きていくためには、民主主義に代わる思想が必要です。私たちは、それを古来の日本人の心に習って、万民宥和の「民和主義」と、仮にですが名付けています。先に聖徳太子の和の精神も紹介しました。ことばで語るのはさほど難しいことではありません。自分の損得にこだわらず、誰とでも、つまり世界中の人と譲り合い、許し合い、分け合い、愛し合いましょうということです。ところが実行となると、これ以上難しいことはないのかも知れません。こういうことは小学校の道徳はおろか、幼稚園でも先生が毎日子どもたちに言い聞かせているだろうと思います。それなのに、ぜんぜんその通りになっていないからです。

しかし、少なくとも子どもたちは大人と比べものにならない柔軟性をもっています。4、5章で説明したとおり、子どもは自分を優先する時期と、他者に心を開く時期を交互に繰り返しながら大きくなっていくので、それぞれの時期に適切なしつけや教育がなされれば、子どもはそれを柔軟に受け入れて、ふたつの心が統合された、円満な人格に育つと考えられます。

## 母の使命

この柔軟性を大切に、大人はこれから心して子育てや教育にかからなければなりません。まず、お母さんは、子どもを産み、育てることこそ自分の最高の使命と感じ、全身全霊をもって子育てに当たっていただきたいと思います。くどいようですが、これは過保護とは違います。子どもには頭が良くなってもらいたい、スタイルが良くなってもらいたい、クラスの人気者になってもらいたい、なぜかと言えば親であるワタシが気持ちいいから、などというのではダメなのです。過保護には、たいていこういう親の自己満足が潜んでいます。子どもがまっとうに育つのなら、私はどうなってもかまわないと思う（子どもにはわざわざ宣言しなくても良いのです）捨て身の気迫が、これからの子育てには必要です。かつて日本の母は、こんなことはあらためて言われなくても当たり前だと考えていたことでしょう。この場合の「まっとう」とは、他者の喜びや悲しみをわがことのように感じることができ、人さまのために何かをしようと思えることです。大企業に就職して高い給料を取るようになることだけが「まっとう」なのではありません。

母性の本質である、見返りを求めないひたすらな愛を、子どもたちにかけてあげていた  
だきたいのです。お母さん方がそうするところにしか、子どもたちの幸せはないと言えま  
す。そしてまた、無償の愛は、情報や知識によっては得られません。子育て雑誌や、育児  
の本をいくら読んで勉強してみても、そんなものは何にもならないのです。「それじゃあ  
お前たちの書いたこの本も同じではないか」と感じる方が当然おいでだと思いますが、そ  
れもその通りです。私たちがこの本を通じて出来ることがあるとすれば、それは子育てへ  
の覚悟を求めることだけであり、その覚悟をみずからもつかどうかは、読者であるみなさ  
んにかかっています。ましてや知識や情報など、そんなものをいくら積み上げて見せたと  
ころで、何の役にも立ちませんから、私たちは最初からそのことを目指しているのではあ  
りません。

どんな離乳食を与えたらいいとか、入園したら何に配慮すべきかとかといった、実際  
的な知識が何にもなくていいと言っているのではありません。子育てとは何か、人間を人  
間として育てることにはどんな意味があるのかという根本的なことを抜きにして、おまけ  
みたいなテクニックばかり集めても、決して子どもは幸福に育たないと言いたいのです。  
逆に言えば、確固たる信念と覚悟が出来ていれば、必要な知識や技術はおのずと、勝手に  
身に付いてきます。

無償の愛を、ぜひ夫に対してもかけていただきたいと思います。子育て雑誌を卒業した  
人が読む奥さま雑誌が、何を中心にしているか、それは、いかに亭主（あるいは家族、子  
ども）を操縦し、おのれが、つまり奥さま自身が、楽しくハリのある人生を送るかという  
ことにつきています。こんなことでは、どれほど家庭がワイワイとにぎやかであろうとも、  
決して家族の幸せは実現されていません。あるのはただ、奥さま一人の自己満足だけです。  
母性の本質は、自分はどうなっても、ひたすらに相手の幸福のみを念じて、すべてをその  
ために捧げようとするものです。動物も、子育てのためには命を投げ出します。それは本  
能に基づいた行動であり、体が勝手に動くのです。そしてまた、自分の子ども以外のため  
に、命がけになることはありません。しかし、人間は違います。自分の命がけの行動を自  
覚することができます。また、見ず知らずの他人のためにも、命を賭けることがあります。  
ですから、ここに、人間の人間たるゆえんがあるのです。

本当の母性を回復するとは、真の人間らしさを取り戻し、それをことばでなく態度で子  
どもに伝えていくことです。父親にもできること、そして父親にしかできない役目が当然  
あり、それと同じく血肉を分けた子どもをみずから生み出すことができる母親ならではの

役目というものがあります。また、女性はもともと、おのれの欲や都合にこだわらない人生を歩むことができやすいという性格をもっているようです。

#### 子どもの可塑(かそ)性

血肉ということばが出たついでに、昔からよく言われる「氏より育ち」とか「生みの親より育ての親」とかいうことについて考えてみたいと思います。生みの親がすなわち育ての親になることが理想的なのは言うまでもありませんし、日本では実際ほとんどの親子がそうなっていると思います。いちおう話を母親に限っていきますが、母親が、お母さんとしてかなり不適格、たとえば自分の欲望や快樂にふけてばかりで子どもを省みないとか、虐待をするとか、そこまで行っていないくても毎日小言ばかりで子どもを萎縮させているとか、過重な期待で子どもを圧迫しているとか、子どもの前で父親や学校の先生の悪口を平気で言って、その子の社会性を混乱させているとかいった場合、それでも「その子にとっては世界でたった一人のかけがえのないお母さん」ということで、その母親が子育てを続けることが本当に良いのか、その人に母親としての資格があると言えるのか、こういうことを考えてみたいのです。

唐突なようですが、「狼に育てられた少女」の話をご存じの方は多いと思います。1920年代に、インドのジャングルで姉妹と思われる2人の少女が発見され、ことばを話せないだけでなく、四つん這いでしか歩けないとか、生肉を食べるとか、暗闇では目がギラギラ光るとか、夜には遠吠えをするとか、丸くなって寄り添うように眠るとかいったことから、おそらく生後間もないころ狼に連れ去られ、発見されるまでは狼の親によって育てられたのだらうということになりました。

かわいそうにこのふたりは、10代と思われるころに若くして亡くなってしまいました。この「事件」は当時の世界に一大センセーションを巻き起こし、心理学者や医学者、動物学者などがこぞって研究の対象に取り上げました。

研究によって明らかにされたことはいろいろとあるのですが、その中でもっとも重要なのが、人間は、狼が育てれば狼になってしまう、ということです。このことは、人間以外の動物では考えられません。イヌやサルの子を、家族の一員として、人間の子どもと何のわけへだてもなくかわいがって育てても、やっぱりイヌはイヌ、サルはサルです。絶対に人間にはなりませんし、人間らしく育つこともありません。二本足で歩こうとするとも、しゃべろうとするとも決してないのです。

狼の群れの中で育って、狼らしさを身につける狼以外の動物は、人間だけです。人間の成長は、誕生後の環境によってすさまじいほどの影響を受けるのです。環境によって変わるというこうした性質を「可塑（かそ）性」と言います。英語で言うとプラスチックです。プラスチックは、熱を加えて軟らかくすると、どんな形にも変えることができ、その性質が名前になっているのです。人間のもつ可塑性は、他の動物に類を見ません。人間は、善い人に育てられれば善い人になり、悪い人に育てられれば悪い人になってしまうのです。知能や運動能力はある程度遺伝しますが、人間性や人格は、この可塑性に負うところがきわめて大きいと言えます。はっきり言えば、ろくでもない生みの親に育てられるより、すばらしい育ての親のもとで成長する方が、はるかに善い人間に育っていきますし、当然幸せになれる可能性も大きくなるわけです。

近ごろ、腹を痛めたわが子に愛情をもてない母親が増えているようですが、それでも、大半のお母さんは、血を分けたわが子を本当にかげがえのない存在として、愛情を注いでいることと思います。しかし、血がつながっているというだけでは、いい母親である条件にはなりませんし、本当の意味で母親であるという資格にはならないのです。

本当に母親らしい母親とは、おのれの人間性が高まらなければこの子の幸せはないということ肝に銘じ、日々その努力を怠らない人にこそ、ふさわしい呼び方です。いままで繰り返してきましたように、人間性が高まるということと、知識や情報の量、アタマの善し悪しとはまったく無関係です。そんなもの、むしろ人間を磨くためには邪魔になるくらいです。いくら本を読んでも、偉い人の話を聞いても、決していい人になれず、悪知恵がつくか、余計に悩みが深まるのがオチでしょう。そんなことより、おのれの欲や都合を捨て、少しでも人さまのために何かをさせていただこうと思って体を動かす方が、はるかに善い人間へと近づくことになると言えます。

#### 安定した夫婦関係を築く

つい子どもとお母さんの話が長くなって、父親について考えるのが後回しになってしまう傾向があるようです。父親らしい父親とは、信念をもっておのれの生きざまを子どもに見せられる人のことです。当然、その際には、どんな信念をもち、どんな生きざまを見せるかが大切です。人間が生きることの意味は、おのれを追求することと、人さまに尽くすことにこそある、と腹の底から思うことができ、その通りの仕事や行動ができればすばらしいのではないのでしょうか。そうした姿が子どもに見えるためには、ある程度、父親と子

どもが共に過ごす時間を確保する必要があるでしょう。ウィークデイは会社に入質に取られ、たまの休みに家でゴロゴロしているのでは、生きざまを見せよと言ってもやはり無理というものです。かと言って、定時退勤をして家にとんで帰り、子どもを風呂に入れ、家事を手伝い、休日には家庭サービスに忙しいのが理想の父親かとなると、決してそうではなく、これは私たちがわざわざ言うまでもないことです。人生の意味や生きる目的を、威厳と迫力をもって子どもに伝えるのが父親の役目でしょう。またまた断っておきますが、子どもを怖がらせろと言っているのではないのです。揺るぎない信念がある父親は、やさしい微笑ををたたえていても、子どもの方で勝手に怖がります。

妻が夫のこうした生き方を認め、尊敬し、支えられれば、その夫婦関係は非常に安定します。単に波風が立たないというだけでなく、夫婦で協力し合って、人生の目的に一步一步近づいていける、動的な安定です。そして、夫も妻も、自分が生まれてきた意味、生きている意味を実感することができるでしょう。現代は多くの男性が生きていく意味を見失い、女性はモノやカネ、地位や名誉にそれを求めようとする風潮が色濃いと言えます。ですからいっそう、こうした夫婦の在り方が重要になってくると思います。そしてこれが、子どもへのしつけや教育の上で、ほとんど最上とも言える効果があることを、私たちはほぼ確信するのです。

おわりに

「はじめに」では児童虐待のことにふれましたが、いま、日本の家族に起きている危機として、もうひとつ「ひきこもり」の問題があります。児童虐待は、その原因や問題がほぼすべて親の側に考えられますが、ひきこもりは思春期以降に起こってくる現象で、本人の問題にも非常に大きいものがあります。

児童虐待以上に、ひきこもりは日本に特異的な問題です。すなわち、諸外国にひきこもりはありません。もう少し付け加えますと、精神の病気や障害を原因とするひきこもりは、どの国でも見られます。ところが、そういう病的な理由が見つからないのに、青少年や大人が自分の部屋から、家から、出てこない、出られない、しかもその状態が何年も続くということは、日本にしか起きていないのです。また、そのひきこもりの人が、推定では百万人前後いると言われていています。さらには、その人数が減るきざしはほとんど見られず、今後ますます増えていくという予測の方が優勢です。きわめて深刻な事態です。

「親の愛情不足でひきこもりになる」と言うのは簡単です。そして、それが当てはまるケースもあるでしょう。しかし、そうとは言い切れない例も、おそらく多いことと思います。「こんなに一生懸命、愛情をもって育ててきたのに、なぜ？ どうして？・・・」と途方に暮れている親御さんは、相当いらっしゃるのではないのでしょうか。

ひきこもりに関して、これ以上くわしいことを申し上げるのはひかえようと思いますが、現在、日本ほど人々のあいだから愛が失われてしまった国は世界にない、という事実には、たいへんに厳しいものがあります。愛の喪失が、実にさまざまな、そして多数の悲しむべき事態を引き起こしていると考えられます。

社会が、世の中が変わらなければならないと、声高に叫ぶ人が多くいます。それはもちろん間違いではありません。乗り越えられるべき多くの問題点を、日本社会は抱え込んでいます。

しかし、そこで大切なのは、社会を作っているのはあくまでも私たち一人ひとりの人間であるということです。個人個人が変わらなければ、その集まりである社会も決して変わることはありません。そして、子どもたちの幸福が実現されることもありません。本書で一番に訴えたかったのはそのことです。

あらゆる人が、お互いに「よき友」となり、支え合い、愛情をかけ合って生きていける社会になることを、心から念願する次第です。

不許転載